お母さんは黒幕 お父さんは英霊

seri

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お母さんは黒幕　お父さんは英霊

【Ｎコード】
Ｎ２３１０Ｑ

【作者名】
ｓｅｒｉ

【あらすじ】
これはある並行世界の物語。とある神父がその世界では修道女だった……ただそれだけが違った。
聖堂教会の修道女、言峰綺礼は託す望みなどないまま令呪を授かり、第四次聖杯戦争に参戦する。そしてその血塗られた闘争の中で長年追い求めていた己の本性をさとった……のだが、
「騎士王を取り逃がしてしまった。……まあ、この際だ、貴様でもよいか」
「何の話だ、英雄王？」

聖杯戦争終了後の冬木にて潜伏中の言峰綺礼と受肉した英雄王ギルガメッシュ。
王様の気まぐれで魔力供給を強制されました。結果妊娠しました。
聖職者としての身分も監督役の地位も地下聖堂の人間乾電池計画もすべてご破算です。
おまけに空から別の並行世界の宿敵の息子（中年）が落ちてきて……。

染色体が違う、ただそれだけなのに、何もかもがずれていく……これはＺｅｒｏからｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔへ到る物語。

貳、ある男の死

それはある男の死。
余命いくばくもない男が、自ら死を選んだ。
そんな誰もが納得する、ありきたりな死だった。

その日、おしまいの日が来た。
その日が来ることはわかっていたから、別に怖くはない。それがまわりの人たちより早く来ることだって、別に何とも思わない。
だって、自分はいつだって『お仕舞いの時』を見つめて生きてきたのだから。
欠陥品として生を受けた人間だった。
呼吸をすることさえ努力を必要とした人生だった。
自分が生まれた時、医者は言ったそうだ。この子は長くは生きられないと。
生まれて数時間ののちに手術室に連れて行かれ、腹を切り裂かれ、一命を取りとめたあと何本もの管につながれて、ようやく母親の乳房を口に運んだのは三ヵ月後。五歳の時、十歳まで生きられないといわれ、十二歳の時、成人することはできないだろうと言われた。
五回の大きな手術と二回の心拍停止をくぐりぬけてようやく二十年生きた。生きるためだけに両親の資産と他の人たちの労力を消費した。そんな二十年だった。
（自分の人生になにか意味があったのだろうか？）
男は薄暗い石造りの家で、遠い雨音を聞きながら寝台の上で考えていた。そんなことを考えることしかできなかった人生について。答えは出ない。仕方がない、人生は推理小説やパズルとは違う。すべてのピースを目の前に揃えて、さあ真相に気付きなさいというわけにはいかない。だいたい、自分の価値を正確に測るならこんな自分を生かし続けるために人生を浪費した両親の評価が絶対に必要だ

というのに、両親はもうどこにもいない。
今度こそお前は元気になれる、最高のお医者様を連れてくる。そういって父は自分を強く抱きしめてくれた。母はもう泣いていた。自分は病院のベットから彼らを見送り、それが両親を見た最後だった。悲惨な飛行機墜落事故として語り継がれる、パリ発ニューヨーク行きエアバスＡ３００。乗客二八七名全てが死亡したあの痛ましい事故のそれに両親と自分を見てくれるはずの医者は居合わせたのだ、犠牲者として。
「……」
ふう、と男はもう一度深く息を吐いた。雨音はますます強くなっていった。まだ昼だというのに全てが薄暗く切り離されてしまったようで、世界には生命の気配というものがなかった。時も音も止まっているような部屋の中で、しゅんしゅんと音を立てる加湿機だけが生き物のようだった。
おしまいにするにはいい日なのかもしれない。彼女もそう思ったから今日なのだろうか。
男はこの家のどこかで真剣なまなざしをどこか遠くへ投げかけているだろう妻を思った。いかなる理由であれ彼女のことを考えるのは幸せなことだったので、男は少し笑った。
妻のことを思う。彼女と初めて出会った時のことを思う。
両親を失った自分には何も残っていなかった。両親は多額の保険金を自分たちにかけていたし、航空会社からも大金が謝罪とともに口座に振り込まれた。遺産もあった。そもそも自分がここまで生き延びられたのは家が資産家だったからなのだ。
でも有り余る金が何になるだろう？　もう、どうか生きてくれと懇願する二対の瞳はどこにもない。生きていても苦しいだけだ。呼吸することすら苦痛なのだ。もう充分なはずだ。眠らせてほしい。
そんな時、彼女と出会った。恋をした。
彼女は健康で、優秀で、美しかった。美しいのは容姿ではなく、姿勢であり姿態であり、

何よりも声だった。聖母を思わせるような柔らかい声だった。子守唄のようなささやきだった。
自分は信心深い方ではなかったが、彼女の諳んじる聖書の言葉を聞く時だけは苦しみを忘れることが出来た。幸福だった。彼女は誠実で信仰深く、誰かを分け隔てることもない。短い命と莫大な財産を持ち合わせた男を、欲望の眼差しで見つめることもない。彼女と居るだけで幸せだった。彼女がいるだけで幸せだった。そう、自分だけが幸せだった。
その事実がどれほど彼女を傷つけていたのかを思うと、壁に頭を打ちつけたくなる。それでも彼女と生きていたくて、あさましいことを何度もしてしまった。だから自分の命の炎が消える前におしまいの日が来てしまったのは仕方がないことなのかもしれない。
（でも、君には生きていてほしいんだ、綺礼）
（ああ、今なら父さんの母さんの気持ちがよく分かる。それがどんなにつらいことでも、
君に生きていてほしいんだ。なぜなら生きていればその先に何かがあるかもしれないから。
君が自分を無価値だと判断した、その確信を覆す何かが）
だって、世界は推理小説やパズルではないのだ。
君が今まで出会ったもののいずれをも愛することが出来なかったとしても、これから出会うものたちも愛することが出来ないということではないだろう。そんな確信は間違っている。
でもそんな言葉は今の彼女には届かない。届くくらいなら彼女は今日、夫だった男に別れを告げたりはしない。
（だから僕は、こうする）
（綺礼、君の幸せを祈っている。君が僕のいない世界で幸せになるのを、妬みながら呪いながら、それでも心の底から願っている）
怖くはない。おしまいの日はいつだって目の前にあった。心配なのは骨と皮だけになったこの腕でちゃんと出来るだろうかということと、最後にうまく微笑んであげられるかということだけだ。

キィとかすかな音がして、重い木製の扉が開いた気配がした。男は妻が音もなく部屋に入ってきたのを見た。野生の獣のような力強く無駄のないその歩みに何度見惚れたことだろう。

「綺礼……どうしたの？　ああ、聖堂教会からの手紙だね、また出かけるのかい？」

「招集はありました……明日、ナポリに向かいます。……そして、もう戻ってこない」

妻の眼差しはまっすぐに自分を見つめている。それを嬉しく思う。いつだって彼女は相手の目を見て話すのだ、見捨てる時さえも。一途で残酷で不器用な愛しい女だ。

「ここには……戻ってこない。私は貴方を愛せなかった」

「いいや、君は僕を愛しているよ」

枕の下から取り出したむき身のナイフに妻の目が見開かれる。

それが少しおかしくて男は笑った。

そして女は取り残され、極東の地で運命と出会う。

業火の夢（前書き）

性的な描写あり。そして一応王様視点です。しかし難しい……。

業火の夢

――――――昔の夢を見ていた。

無骨な手が頭をなでる。自分よりもはるかに大きな父が、幼い『自分』の頭に手をのせてくしゃくしゃと髪をかきまぜている。もののように扱われているようで、すこし面白くなかったが、相手が真剣な顔だったので黙っていた。

お前はみんなに好かれている、私もお前を誇りに思うと父はいう。あの御夫婦はね、お前を養子に欲しいというんだ。お前もここで暮らしていきたいか？　ずっと私と巡礼をして、せっかく仲良くなった人たちとすぐに別れることを繰り返すよりも、この場所に定住して安定した暮らしを営ませるのが、お前のためかもしれない。

いいえ、わたし、ちちうえといっしょにいたい。

そう言うと父は破顔した。そうか、私と一緒にいたいのか。そうか、そうかと何度もうなずいてからその微笑みの粒子を顔に貼りつかせたまま、では彼らにお別れを言ってきなさいと言った。悲しいことだけれども、仕方がないことなのだから。

お別れが悲しいことならば、どうして今父上は笑っているのですか。そう聞いてみたかったが、なぜかそれはやめるべきだとわかっていた。

――――――いや、これは『我』の記憶ではない。

目の前で少年が泣いている。なんでだよ、その言葉を嗚咽交じりに繰り返している。

それは『自分』はただ黙って見つめている。

お前にとってピアノはなんだったんだ。あんな音をだしておいて、どうしてこんなにあっさり捨ててしまえるんだ。

あんな音、そう彼はいったけれど、周囲や少年が絶賛するその音

色が技術のみでつくられたハリボテだと『自分』はとうの昔に気付いていた。己の音楽には情熱がない。楽譜を正確に再現しても、そこにこめるべき“自分自身”がないということを。
そう確信しているというのに、まだ鍵盤の前に座り続けるということは、この少年のように奏でることと生きることが同語である者たちへの侮辱ではないだろうかと思うのに。
少年はまだ泣いている。『自分』は立ち尽くしたままで。
貴方はそうやって音楽を愛しているけれど、私に才能がないと気付くことができない貴方もまた才能のない人間なのだと、そう思った。

――――――いや、これは『我』の記憶ではない。

手をつないでいいかと聞かれ、かまわないと答えた。
労働など一度もしたことのない細い指が、何度もつぶれた豆で硬くなった自分の指にそっとふれたのがわかった。その差異に、これでは手だけ見ればどちらが男か女かわからないなと思った。
それから二人で片田舎の教会の小さな庭を歩いた。ふいに隣の男は立ち止ってこちらをじっと見つめた。そして言った。
僕は幸せだよ、君がここにいてくれるから。
数年の余命しかもたない痩せた男は、その時本当に心の底からそう思っていた。それがわかったから、なずくことはできなかった。
そう、とつぶやいただけだった。
花で埋め尽くされた狭い庭の小道を、ただ二人で歩いている。
それのどこに幸福を見出せばいいのか、いくら考えていてもわからなかったから『自分』はただ黙って歩いている。
隣の男は雲ひとつない青い空を見上げて、もうすっかり春だねと言った。

――――――いや、これは『我』の記憶ではない。

街が燃えていた。その日、数多の命を飲み込んで街は炎に包まれていた。
もはや燃えていないモノなどどこにもなく、そこは一面の紅蓮の業火の海だった。逃れ得るものなどあり得ない、この世のすべてを、あるいは天すらも溶かす灼熱だった。
そんな悲嘆と慟哭の世界で一人の女が笑っていた。髪を振乱し、心底おかしいというように腹を抱えて笑っている。
「あ、あは、あはっはは、あ、はは……ああっ」
やがて女はそこが満開の花園であるかのように、両腕を広げてくるくるとワルツのステップのままに回りだした。彼女の頬をかすめ飛ぶ火の粉を、まるで蝶か風に舞った花びらであるかのように指先が愛でる。
「あ、ああ、ふ、ふふふ……、なんだ、そうか、私は“そう”だったのか！　そうか、これが“私”だったのか、ふふ、なんという勘違い、なんという見当外れ！　……なんという馬鹿げた回り道……！」
恋の成就の喜びを歌い上げるかのように、女の独白は恍惚に満ちていた。黒髪にうつろな眼差しを持つ女は、官能的ともいえる仕草でわが身をかき抱いた。
あなた、とそこにはいない誰かにやさしくささやく。
「これが、あなたが私に見せたかったものですか？　あきらめければいつか出会えると言ってくれたものですか？　見て、崩れゆくモノの、なんて美しいこと。嬉しい、楽しい、なんて……ひどい」
最後の言葉と共にこぼれた一粒の涙は、落ちる前に蒸発して消えた。
「こんなものが私の“幸せ”だというのか……うそつきめ」
その様を『自分』は愉快な心持で眺めている。この胸に宿るのは道化仕草への惜しみない賛美。無様で滑稽なモノへの愛おしさ。
「……それで、おまえは満たされたのか、綺礼？」

――――――ああ、これは『我』の記憶だ。

「む？」

唐突に覚醒した。なにやら夢を見ていた。だが内容は忘れてしまったようだった。ギルガメッシュはしばらくぼうっと天井を見つめながら、夢の内容を思い出そうとしたが、はたせなかった。思い出さないということは思い出さなくてもよいということだ、多分つまらないことだったのだろうと英雄王は結論付け思考を現実に戻した。

「ふむ、寝てしまっていたか」

身体を横たえていたソファから身を起こすと、腹の上にのせてあった雑誌が床に落ちた。どうやら読書の最中に意識が落ちてしまったらしい。ギルガメシュが寝そべっていたソファの側のサイドテーブルには漫画のコミック本が四十冊ほどと、少年漫画の週刊誌が同じくらい山積みになっている。商店で気まぐれで立ち読みした漫画雑誌の連載の一つを気に入ったギルガメッシュがその場で全巻を購入し（ちと重かった）、コミックに収録されていない分はネットオークションにて雑誌を購入して一気に読みふけったのだった。

「ふむ、第一話から登場するものの、日常を象徴するだけの一般人雑魚キャラだと思っていた幼馴染がここにきてまさかのレギュラー入りとは。最終的に主人公はヒロインとくっつくとして、この女のことはどうするのだ？ハーレムエンドか？」

昨日読んだ最新話を思いおこしながらギルガメシュはつぶやいた。

真剣な眼差しであった。ようするに暇なのだった。

「つまらん……、だいたい綺礼はどこへ行った。マスターの分際でサーヴァントをこのような所に置き去りにして。マスターを名乗るなら責任もって世話をせぬか。放置は虐待と同じぞ、あのネグレクトマスターめ」

第四次聖杯戦争――――、最終的に勝者なく終ったそれによる災害

は、冬木市を広範囲にわたって焼き尽くし、五百余名もの死者を出した。そしてギルガメッシュ本人を聖杯の泥によって受肉させ、この地へ繋ぎ止めた。街に刻まれた傷痕は三ヶ月たった今も癒えることを知らず、必然的にギルガメッシュの行動を制限している。

「やれ、次の聖杯戦争まであと何年あるのだ。よもや六十年などと言うまいな？」

ギルガメッシュの手が伸び、その指先の空間がゆがんだ。英雄王の宝具、“王の財宝”である。その異次元への蔵へ続く黄金の歪みの渦から白銀に輝く液体をたたえた小瓶が王の元へと進み出た。それは『若返りの秘薬』、その原型となる秘薬だった。以後もこのような退屈が続くのだとしたら、いっそのことこの秘薬を飲み干して幼年体の我に押し付けるか……などとギルガメッシュは思い、しかしふいに脳裏に熱い女の肌の記憶がよみがえった。

「ふむ、あの愉悦を手放すのはおしいか」

自分を召喚した正統派の魔術師を謀殺して己を奪い取った二人目のマスター。言峰綺礼。彼女は今ここにはいない。三日前から姿を見ていなかった。聖堂教会に所属する修道女である彼女は今聖杯戦争の後始末をするために走り回っている。

自らも父親を失いながら不眠不休に近い状態で復旧作業にたずさわる薄幸のシスターは、どうも教会の広告塔がわりに便利に使われているらしい。業火の海の中で彼女が恍惚に身悶えていたのを知る身としては、神徒どもの憧憬の眼差しを受け淑女然として微笑むその姿に嗤うしかない。あの時も、セイバーのマスターとの戦闘でおった傷を癒す暇なく、元凶の分際で火災で焼け出された人たちの救済にかけつけようとしていた。それを押しとどめて下着だけを引き下ろした状態で後ろから味わったが、あれは格別だったとギルガメッシュは思う。

騎士王を取り逃した憂さ晴らしも兼ねていたので、少しがっついてしまったかもしれない。

信仰と常識にがんじがらめになっていた女、快楽は悪だと言い切

った修道女を愉悦に目覚めさせたのはこの英雄王である。だからあの女は己のものだ。もっとも女の心まで全て手に入れたわけではないし、欲しいとも思わない。もしアレが男の愛を求めてすがりつくようなつまらない女になったのなら大いに失望するだろう。彼女に望むのはいつまでも新鮮な快楽と娯楽の対象であることであって、それ以上ではない。

もちろん女は王の好みだった。その性根の醜悪さは可愛らしく、矮小の身で決して応えてくれない神に問い続ける滑稽はいじらしく、己の問いを天に届けるためなら世界を薪にすることもいとわない一途さは王を愉快にさせる。

ギルガメッシュが小瓶を弄びながら己のマスターのことをつらつらと考えていると、すうっと扉が開き、件の人物が音もなく部屋の中へ入ってきた。

男ならば皆息を飲まずにはいられない官能的な肉体を禁欲的なカソックに包み、癖のある黒髪を無造作に束ねて脇に流す修道女は、一見はかない幻のようだった。それでいてその眼差しは自殺者を誘惑する深淵の沼のような求心力を秘めている。

彼女は己の部屋に客があるのを知ってその瞳を瞬いた。

「ここにいたのか、ギルガメッシュ。探したぞ」

彼女を信奉する信者たちが聞けば目をむくようなぶっきらぼうな口調、古代の英雄王に対するにはあまりにも不遜な態度だったが、王は気にしなかった。この女にはなぜか英雄王を寛容にさせる雰囲気があったし、媚びる言峰綺礼などというものは、そもそも想像がつかない。

「お前こそどこへ行っていた、綺礼。煤の匂いがするが」

「焼け跡の献花を取り替えに。それから今日明日、休暇をもらった。私としてはまだまだ働けるのだが、さすがにここらでつかれた振りもしなければ一般人から離脱している」

「嗤えるな、お前に花を捧げられて死者が喜ぶと思うのか？」

「私一人で行ったのではない。私は遺族の付添にすぎない。それ

よりギルガメッシュ、少し話がしたい。かまわないだろうか」
「ふん、地下室の件か？　家畜どもの数はそろったのか？」
「いや、……それとは別の件で、至急王にご報告しなければならないことが出来てな」
「ほお、いいだろう、聞こう。来い」
ギルガメッシュは近づいてきた綺礼の腕をつかみ、強引に己の元へ引き寄せた。抱え込むように抱きしめた。
「ギルガメッシュ？」
「いや、なに。お前もいいタイミングで現れたものよ」
腕の中のマスターを反転させソファに組み敷いた黄金の王は艶然と微笑んだ。そのままカソックの裾の中に手を滑りこませる。戦士のものとは思えない細く優雅な指先が太ももをなでつけた。
「ギルガメッシュ。話を」
「聞いてやるとも、後でな。だがまずは我を満たせ」
次にあげようとした抗議の言葉は王の唇でふさがれた。散々口内を舌でなぶられた後、綺礼はあきらめたようにギルガメッシュの首に腕をまわし目を閉じた。

誤算（前書き）

ギルガメッシュ×綺礼、性描写注意。
この話の言峰綺礼は女です。ジョージの声で再現しないでね。

誤算

白亜の教会の一室にて、全裸の男女が絡まるように長椅子の上に寝そべっていた。二人が横たわる長椅子の周りには脱ぎ捨てられた服が無造作に散らばり、部屋の中には精と汗の匂いが満ちている。長椅子の端の絹地のクッションを背に横たわる金髪の男は、己が腹の上に乗っている黒髪の女の腰をなでさすりながら、にんまりと小鳥を飲み込んだばかりの猫のような笑みを浮かべた。

「……時臣めがお前を可愛がった気持ちが今ならわかるな。お前は海綿が水を吸うように覚えがいい。優秀な弟子は師の自尊心を多いに満たすものよ。いや、お前も数か月前までは未亡人とは名ばかりの石のような女だったのにな、綺礼。だがこれは師たる我がすごいのか？　うむ、さすが我」

「王に満足していただけて私も嬉しいよ」

御円満なギルガメッシュに綺礼は人知れずため息をついた。お前に師事した覚えはないし、性技を会得しようと思ったこともない。そう抗議したいところだが、機嫌のいい英雄王は怒っているとき以上に話が通じないという事実に数か月の付き合いですでに気づいていた。

たくましくも滑らかな男の胸に身をゆだねながら、どうして己の肉体はこの行為に喜ぶのだろうと綺礼は考える。美しいものを美しいと思えない、そんな欠陥者として生をうけたのなら、この肉体的な感覚も反転していればいいのに。そうすれば快楽はまさしく苦痛であり、この男にこのような得意げな顔はさせないものを。

英雄王が己を腕に抱きご機嫌な様は、その身体を使って自分の欲を満たしたからだけではない。彼女もその行為を喜び、快楽に身悶えたことを知っているからである。恥知らずにも男の上で腰をふり、言われるがままに卑猥な言葉を繰り返してしまった。どこに欲しいかと聞かれ、中に、奥で、と叫んだ時にこの男が見せたしたり顔を

思い出すと羞恥と憤怒で身が震えそうになる。以前結婚していた相手との行為でこのような振舞いをしたことなど一度もない。だから自分には女として喜びを感じる感性そのものがないと思っていたのに。

この状況を引き起こしたのが、同じ聖杯の泥に侵されたというこの肉体のせいなのか、この世の全てを手中に収めた暴虐と愉悦の王の手際のせいなのかはわからないが、甚だ不本意である。まったく遺憾である。言峰綺礼が己がサーヴァントと肉欲にふける現状を誰が想像しただろうか。少なくとも恩師から彼を略奪した時には考えもしなかった。

これは快楽以外の目的がない行為であった。

（しかし何故この男は私のところに来るのだ……）

魔力供給が目的なら原始的な性魔術よりもっと効率のよい方法があるだろうし、そもそも自分たちの間にはマスターとサーヴァントの絆たるパスがちゃんとつながっている。魔力が欲しければそっちから吸い取っていけばいいのだ。

それに女の身体で雄の欲を満たしたければもっと美しい女や、男を喜ばす技術をもった女が他にいるだろう。確かに未だ聖杯戦争の残り火が燻っているこの冬木で目立つことするなとは言ったが、かの暴君が誰かの命令など聞くとは思えない。戦争の真最中だって新都の夜の歓楽街を闊歩していた男だ。その美貌と金払いの良さでさぞやいい思いをしただろうに。

そうしてくれていたのならこのような致命的な『誤算』は避けられたはずだった。

（……ああ、憎らしい。この“元凶”めをどうしてくれよう？）

綺礼はもう一度ため息をつくと、自分を抱きしめている男の顔を見上げて覗き込んだ。

「ギルガメッシュ、話がある」

「む？　ああ、そのようなことを言っていたな？　いいぞ、言っ

てみろ。しかし面白い話であろうな？」
「少なくとも私は面白くない。このようなことを告げねばならないのはまことに遺憾だが……地下聖堂の件、あれは実行出来なくなった。王にはしばらくは我が魔力のみでしのいでいただきたい。いや、しばしの間だけだが」
「……ほう、弁解を聞いてやろうか？　しばしとはいえ王を飢えさせようというのだ、それ相応の理由があるのだろう？」
「……」
綺礼が戸惑うようにうつむいた様をギルガメッシュは意外な心持で見た。悪に属しながら誠実さでも並ぶ者がない女にしては態度がおかしい。真実を持ってして他者の心を切開するのを喜びとする女は、告げることが悪しきことならばそれを嬉々として語るはずだった。
「ギルガメッシュ、私は……私は死んでいる」
「ふむ、確かにお前は死んでいる。あの時、セイバーのマスターに心臓を打ち抜かれて確かに死んだ。それはパスで繋がっていた我が保証する」
「そう、私は死んだ。この胸にはもはや心臓がない。詰まっているのは泥だけだ。だから私は正常な人間とはいえない。たとえ心臓以外の部分は正常に機能していても。空腹を感じるし、爪や髪もちゃんと伸びてくる。そして受肉したといってもあくまで英霊であるお前と違って多分このまま年を取っていくことだろう。だがそれでも私はもう生きていない」
「わかりきったことを。何がいいたいのだ、綺礼？」
「ああ、そうだな。そのことを踏まえてあえて言おう、……王よ、生理がこないのです」
綺礼の口調ががらりと変わった。普段信者たちへと用いる淑女の声色である。しかし髪をかきあげながらあげた綺礼のその顔は、にいっと邪悪な笑顔を浮かべていた。かつてこの部屋で英雄王に見せたような愉悦の表情であった。その時この女は恩師を謀殺すること

を心に決めたのだ。
「は？　何をたわけたことを、貴様死んでいるのだからそのようなものくる訳が……あれ？」
余裕綽綽だった英雄王の顔が不意にひきつった。面白がっていたその眼差しは、不安げに左右をさまよっている。助けてくれる誰かを探すような眼差しだったが、そんな誰かなどもちろんいるはずがなかった。
「そう、月経と言われるものがこないのです、私の王よ。自分は死んでいると思って気にしておりませんでしたが、考えてみればおかしいのです。だって爪や髪は伸びているんですよ？　フケや垢だって当然のように発生しているのに。王にはなにか心当たりはありませんか？　ちなみに私には腐るほどあります……」
「き、綺礼」
ふふふ、と聖母がもつようなあどけない微笑みがギルガメシュにたじろいだ。女に怯えに近い感情を抱いたのはこれが初めてだったが、そのことに気付くことも出来なかった。綺礼はそんなギルガメッシュの様子を気にすることもなく甘えるような仕草で英雄王ににじり寄った。
「ギルガメッシュ、我が王よ、王が下された情けは私の中で実を結んだようです……さてどうしてくれる？」
また口調をかえて、綺礼は男の股間の急所をむんずと鷲掴みにした。うおっとギルガメシュがうめいた。
「貴様のこの節操のない“コレ”の所為で計画は台無しだ。ああ、お前も楽しんだだろうなどと言ってくれるなよ？　令呪を使いたくなるではないか？　確かに聖堂教会の代行者には不徳が許される……私の父とて神父でありながら信徒の女に子を産ませているからな。だが父と女である私は違う。お前も知っての通り我が宗派は男尊女卑の傾向がある。神の花嫁たる修道女が他の男の子を妊娠するなど、醜聞以外のなにものでもない。私は教会の威光を守るためにも還俗せねばなるまい」

「貴様、産む気か？　だがそれは」
「わかっている。あの泥によって受肉した英霊とあの泥によって生かされている死人の間に生まれる子供が“真面”であるはすがない。だが私に生まれいづる命を否定することはできない。それは我が信念に反する」
綺礼は愛おしさを込めたかのような仕草で己の腹部をなでた。
「それにこの子はまだ胎児だが、お前の血を引くだけはあって、今もあふれんばかりの魔力をすでに放っている。英雄王の子は無事生まれれば地下聖堂に収納するはずだった者たちと同量の魔力を父にもたらすだろう」
「……我の子？　そうか、そこにいるのは我の……子なのか」
言峰綺礼は己を孕ませた男へ艶然と微笑みかけた。
「そう、私達の子です、王よ」

誤算（後書き）

英雄王の性格が間違っている……と思うのですが、上手く書けないのですよ。精進いたします。

真夜中の少年（前書き）

注意、英雄王がちょっと下品です。そして場面展開が唐突です。書きたい場面だけ書いております。

真夜中の少年

冬木駅前パークは新都における最も高い建築物である。その屋上はヘリコプターの滑走路を備えていて、上空を飛ぶ飛行機が夜間誤ってビルに接触しないように鉄柱が突き出し赤い小さな光を瞬かしている。

その赤い点滅の上に少年は立っていた。否、君臨していた。崖下に人口の星空を見降ろし、激しく吹き荒れる疾風に動じることなく楽しげに深夜の街を見つめている。その眼差しは暖かかったが、それは格下のモノへと向ける慈悲の眼差しだった。

それはカジュアルな、しかし高級ブランドの服に身を包んだ年齢は十二、三歳になろうかという紅顔の美少年であった。黄金の髪と乳白色の肌をもったまるで無性体の天使であるかのようなあどけない美貌に、だが第二次性徴の兆しははっきりと見えなんとも言えない色香を放っている。

「……本日も事もなし……と。じゃあ、今から帰還しま～す。ああ、お腹すいた。マスター、夜食にホットケーキ作って。バターとメイプルたっぷりで、あとホットミルク。はちみつ……だとちょっと諄いから黒糖いれてね。大丈夫、ボク育ち盛りだから寝る前に消化できます」

冬木市においてどこよりも高い場所に一人佇む少年は、まるで目の前に見えない誰かが存在するかのように話しかけている。返事をもらえたようで無邪気な微笑みが途端に苦笑に変わった。

「ええと、褒めてもらえるのは嬉しいんだけど、そういういい方だとあっちのボクがすねてますます戻ってこなくなるよ？　ボク、サーヴァントは出来ても、“お父さん”は出来ないから。ボク、この件に関しては関係ないから。ううん、違うんです。「本当に我の子か」とかそういうイチャモンつけたいわけじゃなくて、そんな……、ボクは綺礼を信じているよ？　でもほら、ボクはまだ子供で自

分としてはファーストキスもまだなつもりなんです……いやだよ、そんな連帯責任ッ！」
頭を抱えておおうと苦悩する少年。やがてあきらめの溜息をついた。
「まだ怒っているの、綺礼？　うん、それはあっちのボクが悪かったよね。あの場所は出す場所であって決して入れる場所じゃないよね。大丈夫、あの人も反省している……多分。はい、帰ります。ホットケーキ、お願い」
最後の言葉が終わる前に少年は何のためらいもなく一歩を踏みだした。その先には何もない。あるのは虚空だけ。引力は小柄な少年を引きずりこみネオンの海へと落下させていく。だが少年の顔に恐怖は欠片も存在しない。突風が彼の体をくるりと反転させ、彼は空を見上げる形になった。
空には満月がたったひとつ。今宵は月の光が明るすぎて星は見えない。
……銀色の髪の少女が降ってきそうな夜だ。何の根拠もなかったがなんとなくそう思った。
その日の朝、目が覚めたら“我”は“ボク”だった。ギルガメッシュにとって、この日常のはじまりはつまりはそういうことである。そんなことといわれても事情のわからない人には見当もつかないだろうけれど、別に説明しているわけではないので、別にいい。
これは所謂現実の確認というやつである。朝、目が覚めたら“我”ではなく“ボク”だった。もちろんこれは己の意思ではない。そういうことは“ボク”が決めることでなくて、あっちのもう一人の“我”が決めること。一人の人物の人生を絵画に例えることがあるならば、あっちは完成品、こっちはまだスケッチの段階の下絵、どっちが『ギルガメッシュ』という作品として上位にあるかは明白なのだった。
「まったくあの人にも困ったもんだよ」
受肉したために霊体化できないため『他人に認識されなくなる外

套（彼の宝物はすべて逸話をもつ前の原型なので無名のものが多い）『をはおったギルガメシュは人間離れした飛翔力で民家の屋根の上を飛びながら現在の我が家というべき場所に向かっていた。

そこには（認めたくないが）彼の子供を胎に宿した女が彼の帰りを待っている。

「英雄色を好むを地で行くのもいいけれど、場所と空気は読んで欲しいな……」

ギルガメッシュは今日何度目かわからないため息をついた。自分が“出現”する発端となったいさかいを思い出したのだ。

全てはギルガメシュの未来の姿である“あの人”とそのマスターである言峰綺礼の性に対する価値観の相違にあった。

彼のマスター、言峰綺礼は修道女である。その本性は生れついての欠陥者であり、矯正しようのない悪に属するが、同時に完璧なまでに清純で道徳的な聖女でもあった。その矛盾する二面性が彼女を長年苦悩の中に溺れさせていた。半年前にどうしようもない現実を受け入れたといえそれまで二十年以上培ってきた価値観は簡単には覆らない。つまり彼女はいまだにセックスは結婚してから、中絶は殺人です、な昔堅気の道徳概念に属する人種だった。対して“あの人”はこの世の全てを手中にした英雄王である。生前はその傲慢を憂いた神々が彼のために特注の『彼と対等の実力を持った男』を作成したほどの暴君ぶりだった。もちろん性に対しても奔放であちらこちらに手を出すのはいいほうで、気まぐれに結婚式に乱入して花嫁が気に入れば拉致してお持ち帰り……などということを日常的に繰り返していた男だった。

そんな二人が何の因果か運命か、一緒に暮らし始め、肉体関係が成立してしまった。

最初の数か月は、綺礼が全面的に譲歩していたために二人の関係はこの上なく良好だった。彼女は処女ではなかったが病弱な夫との性生活は無きに等しかったらしく、ほとんど何も知らなかった。ギルガメシュは嬉々としていろいろと教え込み、綺礼は綺礼で教わっ

たことは完璧に会得しなければ我慢できないという質だったものだから数か月後には彼女はギルガメシュにとってこの上もなく相性のいい相手となってしまった。

麗しくも惨めな騎士王への執着が薄れたわけではないが、これはこれで素晴しい、手放すなど考えられないという感じだったのだが、その官能的な日々は或る日突然終止符を打たれてしまった。

産婦人科で己の妊娠を確かなものとした綺礼は自分の信じるところの道徳概念に基づき、ギルガメシュとの性交渉をきっぱり拒絶したのだった。綺礼が属する信仰において妊婦がその神聖なる胎内に新たな精を受けるなどということはあり得ないことであった。

突然の拒絶に内心動揺したギルガメシュだったが、そこはそれ慢心王の異名をも得る男であったので、そのうち自らの肉体のうずきに耐えきれずあちらから求めてくるだろうと高をくくっていた。なにせ女に肉の悦びというものを教えてやったのは己なのだ、そう長時間我なしでいられるはずがないと思っていたのだが、言峰綺礼は女の身で人修羅の代名詞である代行者に選ばれた人間であった。肉体のうずきなど、それはそれでとすぱっと切り捨てる精神の強さは当然持っている。

結局のところ禁欲に耐えられなくなったのは英雄王が先だった。他で相手を見つくろうという選択は彼にはない。自分の舌に合わせて味付けされた最高の料理が目の前にあるというのに、何故わざわざジャンクフードを買いに行かねばならないのか？　売春が非合法となった現代のにわか娼婦など話にもならない。女であることだけで価値があると勘違いしている愚か者共の目の前に財を積み上げ、目の色を変えて媚びてくる様を嘲うことは楽しんでも情けをかけてやる気には到底なれないというものであった。

故に英雄王は強情な己のマスターに最大級の譲歩をしてやった。本人としては譲歩のつもりであった。

彼はこう提案したのである。「孔はもう一つあるではないか」……と。

重ねて言うが言峰綺礼は古風な道徳概念の持ち主である。彼女は最初何を言われているのかわからなかった。自分を抱きしめた男の手が臀部をなで、その奥底に指先がたどりついてからはじめて相手の言いたいことが分かった。そういう行為があることは知っている。たとえば男性同士での性交渉では必然的にそうするらしいとは知っている。でも自分がそれを行うということを考えたことは一度もない。

「……ふるえておるな、怖いのか？　案ずるな、ここでもすぐによくなる……」

「……ッ、変態ッ！」

耳元に甘くささやく男の腹に拳をたたき込むことを綺礼はためらわなかった。

（……あれで本格的に拗ねてしまったあの人が若返りの薬を飲んで、ボクに“ギルガメシュ”を押し付けて、今にいたるんだよな……）

少年であるギルガメシュは、はあっともう一度ため息をついた。まあどんなに強情張っても自分の子供が産まれる時期が来たらあの人は戻ってくるだろう。それまで自分はマスターであり子供の母親である彼女を守っていればいい。ギルガメシュが今日みたいに冬木の土地を見回っているのは、お腹のふくらみが目立ってきた綺礼の代わりに冬木の土地の管理者代行のそのまた代行をおこなっているからだった。

「……！？」

もう少しで家にたどりつこうとする時、突然感じた違和感にギルガメシュは立ち止った。冬木市全体に張り巡らせた魔力の捜査網にひっかかりを覚えたのだ。それは異質な存在、もしかしたら魔術にたずさわるモノが冬木に侵入してきたという明らかな異変だった。

「……お腹すいているのに」

忌々しげに吐き捨ててギルガメシュは踵を返した。

足もとに“王の財宝”の黄金の歪みがひとつ生み出され、その中

から緑色の革靴が浮き出てきた。ギルガメシュは空中に飛んでレア物のスニーカーを何の未練なく脱ぎ捨てると、その革靴に履き替えた。それは『千里を一瞬で渡る靴』。数々のおとぎ話にて活躍する魔法の靴の原型であった。くるりと一回転して民家の屋根におりると、にいっと口元に亀裂のような笑みを浮かべた。

「訪問目的は何かなあ？　返答次第じゃいじめてやる。食べ物の恨みはおそろしいんだよ？」

それから少年はまさしく音速の速さで侵入者の元へと向かったのだった。

真夜中の少年（後書き）

次回、半オリキャラ登場。ヒント　平行世界って設定便利ですね。
そしてＦａｔｅには大人の男が必要不可欠だと思います。

ここではないどこかで（前書き）

十一日の地震すごかったですね。私の住んでいるところでは五日ほど電気も水も出ませんでした。辛かった。今もあの苦しみに耐えている方たちに頑張ってといいたい。さて、今回は別の世界での出来事です。

ここではないどこかで

ねがはくは花のもとにて春死なむ

また春が来た。

妻が死んでから、何度目かの春が来た。

それは春まっさかりというにふさわしい暖かい日のことだった。一人の男が、盛りを過ぎぼちぼちと葉桜となっている桜並木の丘をゆっくりと上がっていた。時刻は正午を少し過ぎたころ、昼食の頃合いなのか、周囲に人影はない。男は長い坂道を一人でもくもくと登っている。

三十代半ばの、たくましい体格をした長身の男である。日本には珍しい白髪と褐色の肌、この平和な国ではめったに存在しないような鍛え上げた肉体、修羅場を幾つもくぐったと思われる力強い眼差し。ラフな白いシャツとジーンズ、肩に掛けたボストンバックという、一見近所に買い物に出かけた帰りのような簡素な姿で、しかし男は五年ぶりの祖国の地を踏んでいた。

男の名を衛宮士郎という。魔術師である。

封印指定の烙印を押された異端の魔術師であった。

封印指定、死刑宣告に等しいその烙印を受ける魔術師には二通りある。「珍しいもの」と「迷惑なもの」である。大抵はどちらかに属するがゆえに封印指定魔術師になるのだが、彼は珍しくもその両方の条件に当たる魔術師だった。固有結界という希有な魔術の使い手であり、秘匿するべき神秘を使い本来ならば一線をきすべき俗世に干渉するという最大の禁忌を犯した。ゆえに彼は魔術師達の総本山である魔術協会『時計塔』から指名手配を受けていた。士郎はそれでも魔術の行使をやめなかった。

五年の間、彼は追っ手から逃げ続け、今まさに追い詰められようとしていた。

だが士郎はそのような己の危機状態をまるで知らぬかのようにゆっくりした足取りで坂道を上がっていった。やがて彼がたどりついたのは長い長い石段だった。

柳洞寺に続く石段である。士郎は見上げて、こみ上げる懐かしさに苦笑した。

「あいかわらず参拝客の信心を試すかのような長さだな、いや変わらない」

士郎は軽く首をふってから十代の頃、友達に会うために何度も上った柳洞寺の石段を登り始めた。

（・・・・・・さて、一成の奴はいるかな？　出来ればこのまま会わないで済ませたいものだ。巻き添えにはしたくない。俺はふらりと旅に出て、どこかでそれなりにうまくやっている、そう思ってくれればいい）

もし自分が魔術協会や聖堂教会からの追っ手に打たれたのなら、彼らは「衛宮士郎」の痕跡をそうやって消すだろう。二十年ほど前この柳洞寺で死んだ言峰綺礼という神父の存在がこの冬木から消えたように。

幸いなことに柳洞寺の境内には誰もいなかった。士郎はどんどん奥へと足を進めていき、本堂の裏側にある墓地にたどりついた。ここには衛宮の名をもつ墓があり、そこには義父と妻が眠っている。

質素な墓は五年の歳月など微塵も感じさせない初々しさで士郎を迎えてくれた。それは誰かが定期的にこの墓を掃除していてくれる人物が存在するということだった。それが誰だか士郎は知っている。

「・・・・・・藤ねえ、ありがとうな。でも旦那がすねるからほどほどしとけよ」

士郎はありったけの優しさを込めた眼差しで「衛宮」の名が刻まれた墓石を見つめた。

（・・・・・・・・・・・・・ありがとう、私幸せでした。本当に今、私ほど幸せな女はいないわ。だからもういいんです。貴方は行って、行って夢をかなえて・・・・・・私のために捨ててしまった

理想を）
ふいに亡き妻の最後の言葉が士郎の脳裏によみがえった。あれはこんな風に暖かい春の日のことだったと思う。
「ただいま、桜。ただいま、親父。・・・・・・・ただいま、遠坂」
「お義姉様と呼びなさい」
士郎が振り返るとそこには真紅のコートをまとった黒髪の美女が不機嫌な顔で立っていた。その手には和紙に包まれた満開の桜の枝と水の入った桶を持っている。
「それはどこからへし折ってきた？　公道に植えてある桜もまた公共物なのだが・・・・・・・いやはや遠坂の頭首が窃盗行為とは幻滅した」
士郎は皮肉な笑みを久しぶりに再会した昔馴染みに向けた。その微笑みは遠い昔にこの冬木で出会って別れたある男の笑みに酷似していたが、それを本人が知れば全力で否定することだろう。
「そんなわけないでしょう？！　ちゃんと花屋で買ったわよ！・・・・・・・ッ、もしかして道ですれ違った人達が私のことじろじろ見ていたのは・・・・・・・ッ」
「リンゴ園に八百屋で買ったリンゴを持ち込む。当然何も知らない通りがかりの人はそれは近くの木からもぎ取ったものだと思うだろう。当然の認識だ。遠坂の呪いは健在のようだな」
「うるさいッ、何あんた、しばらく会わないうちに、なんでそんなにアーチャーが進行しているのよ！」
「・・・・・・アーチャーが進行って。俺はアイツとは違うよ。正義の味方にはなれなかった」
「類似品よ」
士郎の苦笑を切って捨て、士郎の義理の姉、遠坂凛は妹の眠る墓に持ってきた桜の枝をそっと横たえた。士郎に見せるその横顔には先刻の士郎に負けない愛しみに満ちている。
「ありがとうな、遠坂」
「・・・・・・士郎に礼をいわれる筋合いはないわ。桜は私の妹

だもの。なにさ五年もの間この子を置き去りにしてどこで何していたのよ」
「・・・・・・・知っているくせに」
「知っているわよ。衛宮士郎の捕獲指令は遠坂にも届いているから。・・・・・・・士郎、貴方は馬鹿よ」
「ごめんな遠坂、いやな役おしつけて」
「誤るな、ほんと馬鹿。もう少し粘りなさいよ」
「うん・・・・・・・ごめん、でもここらで潮時だ。俺だって死にたくはないよ。でも今の俺は毒みたいなもので存在するだけで周りを傷つける。・・・・・・・生きるために殺して殺して、殺したことで仇としてまた追われて・・・・・・・これ以上怒りと憎しみを生み出す原因になるなら俺はもう俺を許せない」
「だからここで終わらせるの？　私に貴方を殺させるの？　ひどい人ね」
「いや、自分の決着は自分でつけるよ。俺はただ・・・・・・・・・大切な人たちに最後に逢いたかった」
士郎は凛に背を向けて来た道を引き返して行った。後ろから攻撃されるかもしれないという恐れは、すでに死を決意している士郎にはない。むしろそうしてくれればいいと思ったこともあった。封印指定をうけた魔術師の師であることで遠坂凛には多大な迷惑をかけてしまった。自ら不肖の弟子を打ったのなら士郎が傷つけてしまった遠坂の名誉は挽回されるかもしれない。
（でもそれは俺の甘えにすぎない。桜の姉である遠坂に妹の夫だった俺を殺すことは出来ない。わかっている・・・・・・・）
士郎の脳裏に赤い弓兵の背中が浮かび上がった。空っぽの心に偽物の理想を詰め込んでどこまでもかけていった自分ではないもう一人の自分。
・・・・・・・・・・・・・・・ついてこれるか？
そう問いかける背中を思い出す。結局あの男より年上になっても追いつけなかったあの背中。

（貴方は行っていいの）そう妻は言った。（私のために立ち止まってくれてありがとう、私は幸せだった、幸せだったから、安心して貴方を行かせられます。士郎さん、貴方は必ず必ず戻ってきてくれると信じられるから。私、ここでちゃんと待っています。だから貴方は行っていいの）

その言葉に押されて一度は捨てた理想を追った。あのエミヤシロウにはなれない、正義の味方にはなれないとわかっていたけれど、すこしでも夢の端を掴みたかった。

ならば衛宮士郎は後悔などしない。なんとしても貫きたかったのなら、それは衛宮士郎の欲望なのだ。欲望のままに生きた者に後悔する資格などない。

「じゃあな、遠坂」

「そうね、さようなら」

その挨拶があんまりにも穏やかだったので、士郎はあれと違和感を感じた。それと同時に体を貫く衝撃。痛みではなく違和感というべきソレ。

「と、遠坂・・・・・・？」

士郎は自分の体を見降ろし、ちょうど心臓にあたる部分から剣先が生えているのを茫然とした。士郎が知る物よりも細く小さなそれは、だが間違いなく”宝石剣”と呼ばれるもの。

「これは・・・・・・」

「士郎、桜が死んで、貴方が冬木を出て行った十年前、”私達”にはこうなるんじゃないかってわかっていた・・・・・・ルヴィアは貴方が自分に惚れればいいって言ってたけれど、結局士郎はずっと桜のものだった。姉としては嬉しいわ。だからこそ桜の夫に「自殺」なんかさせないわ」

刺された場所からゆっくりと黒いシミが広がっていくのを士郎はなすすべなく見つめるしかなかった。

「これはね、私達、私とルヴィアの十年の研究の成果よ、間に合ってよかったわ。覚えている？　昔貴方に投影してもらった宝石剣

は並行世界から魔力を取り出した。これはその反対、取り出すのではなく送り込むのよ。この剣で刺されたものをどこかの並行世界に送るの。いいじゃない、死ぬのも消えるのも同じよ、この世界から貴方がいなくなるってことには変わらないもの」

「遠坂・・・・・・ッ」

「士郎、これは師としての命令、そして義姉としてのお願い、・・・・・・もうちょっと粘りなさい。あきらめるなんて士郎らしくないわ。じゃあね、さようなら、衛宮くん」

もうほとんど黒いシミに覆われた士郎は、凛へと手を伸ばそうとして、もはや己には腕がないことに気がついた。そして黒いシミはあごにまでいたり、やがて視界を闇がふさぎ・・・・・・・・・・・・・・。

そして衛宮士郎という男はその世界から消滅した。

ここではないどこかで（後書き）

というわけでＨｅａｖｅｎｓ　Ｆｅｅｌに酷似した平行世界から衛宮士郎（三十代半）参加。ちなみに愛妻桜は本編のＨｅａｖｅｎｓ　Ｆｅｅｌの士郎とのラブエンドを迎えるが体は壊れたままで五年ほどで他界。士郎は定年後のサラリーマンのように「若い頃、いろいろあってあきらめてしまったあの夢をもう一度」な感覚で正義の味方（のようなもの）を目指して結局封印指定に。不完全燃焼なおっさん。ちなみに切嗣より年上で原作開始時は四十代になる予定。次回、宿敵の神父と同名の妊婦（一回り年下）と出会う。

その夜（前書き）

アパートの水道管の修理の立ち会いのため半日拘束。家にいなきゃいけない、水は使えない。……一話書き終わった。

その夜

その夜、帰ったらホットケーキが食べたいと彼女の王が言ったので、綺礼はホットケーキのタネを作って台所でギルガメシュの帰りを待っていた。もちろん市販のホットケーキミックスなど使わない。小さな王様は大きいのに比べれば温厚な性格だが、だからといって自分が王であることをどうでもいいと思っているわけではない。遠慮はするが、基本的に高級志向は変わらない。そもそもギルガメシュは生れながらの半神であり、王族なのだ。ここ最近贅沢を覚えた成金などではない。彼にとっては最高であることこそが通常だ。

だから綺礼はちゃんと薄力粉とベーキングパウダーを使って、ついでに溶かしバターやらバニラ・エッセンスも持ち出し基本かつ贅沢なホットケーキを作った。そして後は焼くだけという段階になって大分時間がたつが未だに金髪の少年は帰ってきていない。

「遅い・・・・・・」

そろそろここを引き払って新しい拠点に移らなければならないので、今夜はその相談がしたかったのに、とカソックに身を包んだ綺礼は思う。もうすぐ物心ついた時から身にまとっていた僧服ともお別れであると思うとさすがの綺礼もなんともいえない心持になって、意味もなく服のしわをなでた。

教会の一角にある小さなキッチンは常任している主任司祭専用のもので、本来ならば父から聖杯戦争の監督役の任を一時的に引き継いだだけの綺礼は聖杯戦争終了と共にこの教会を引き払わなければならないのだが、綺礼は本部から派遣された次の主任司祭を泣き落して自分だけ冬木教会に居座ることに成功していた。

偉大なる先達であった璃正神父を尊敬していた後任者は、その娘が父の私室を他者が使用するのを嫌がって泣くことに感ずるものがあったのか、こころよく綺礼を一人にしてくれた。ゆえに現在の教会は、本来の主人である神父が近くに家を借り、車で通っているの

に対し、前任者の遺族でしかない綺礼は今も教会で暮らしているという本末転倒なことになっていた。
・・・・・・件の璃正神父の私室が金ぴか人外によって占拠され、その寝台の上で彼の娘が種づけされていたと知ったら、彼はショックのあまり憤死するかもしれない。
そう、彼女は身ごもっていた。そろそろ五ヶ月になる。
綺礼はエプロンの上から己の腹部をなでた。ゆったりとしたカソックのおかげでいまだ何の特徴を見いだせないが、触れば不自然に膨張した腹部に誰もが気付くことだろう。
「そろそろ還俗しなければならないか。いや、おしくはない。結局私は代行者にはなれても司祭にはなれない」
教会に必要なのは神父。女の綺礼では神父は名乗れない。ただそれだけの、どうあがいても変えようのない事実。
この世の中には女の僧院長もいることはいるが、それは教会そのものが修道女達で構成されている修道院だけである。教会にはまず神父、修道女はその下に就くのが常識であった。能力の前には性別など些細なことであるという男女平等精神はごく近年に生まれた思想であり、そもそも綺礼が属する宗派は男尊女卑の傾向がある。法王、または上位職たる枢機卿には成人した男子しかなれないという絶対前提はおそらく今後も覆ることはあるまい。
もちろん裏組織である聖堂教会は性差別などという悪習はとうの昔に捨て去っている。人修羅の別名で呼ばれる代行者という殺し屋に求められるのは、ただ神の怨敵を滅ぼすための実力のみである。そういう意味では言峰綺礼は父璃正の後継者にふさわしい実力を兼ね備えていたが、問題は何も知らない一般の信徒たちの意向なのだ。
「そう、まして未婚で身ごもり、父親の名は明かせぬとなれば」
己の本性を知った今は、それは失笑ものの現実だった。平穏よりも破壊を望み、破滅に歓喜する、まさに邪悪の名にふさわしい自分がよりにもよって母親になる。
己は悪なのだと知ったのだから、悪らしくしようと思っていたの

に。
父親を亡くしたばかりの自分を思いやって、ほとんどこちらの言いなりになっている神父をだまして、いまだ災害の傷が心身ともに癒えない可哀そうな孤児たちを生き地獄にたたき込んで、妹弟子に父の仇が己であることを隠して、そうして周囲の全てを欺いて次の聖杯戦争を待つことが己の望みであったのに。
だからといって綺礼には胎の中の小さな命を殺そうという意思はなかった。生まれようとしている命を己の都合で殺すことなど綺礼には出来ない。やろうとしていたことも聖職者としてのキャリアもすべて台無しにしたわが子への苛立ちはあっても憎悪はない。言峰綺礼は基本的に誰を愛することもないかわりに誰かを憎むこともない女なのだ。少なくとも衛宮切嗣という男を知るまではそうだった。だからこそ初めて知った切嗣に対する憎悪は甘美でもある。どこまでも執着してしまう。
そんな女の子供に生まれるなんて、かわいそうな子だ。多分、いや間違いなく綺礼はこの子を愛せない。もしも愛したならその時、綺礼は間違いなく我が子をこの手にかけるだろう。
かつて夫だった男も、父親も、その死を「私が殺したかった」と嘆いた。今でも時々思ってしまう。あの人たちをこの手で殺めてしまいたいと思った・・・・・・ それが本当に実現したのなら自分は”幸福”というものがなんなのか理解することができたのではないか・・・・・・と。
もしかしたらこの子は綺礼に今度こそ、その喜びを味あわせてくれるかもしれない。今は何とも思えない細胞の塊がこの胎から出て産声を上げた時、自分が何を思うのか綺礼にはわからなかった。
「幸せか・・・・・・」
綺礼は腹部をなでながらお腹の子供にそっと話しかけた。
「お前の幸せは・・・・・・？　聖杯の呪いの泥によって生をうけたに等しいお前の幸福とは一体何なのだろうな？　まずは腹を満たすことか、赤子は無心に母の乳房を求めるものだ。そう、私もか

つては無心に乳房を求めるだけの赤子だったのだろう、今はもう覚えてはいないが」
無常さをふくませた苦笑を浮かべた綺礼の耳に、住居区域に通じる勝手口が開いて閉じる音が聞こえた。
「ギルガメッシュ、戻ったのか」
綺礼は立ち上がって彼女の王を出迎えるべく歩き出した。
「おかえり、ギルガメシュ、遅かったな。帰ると言ってから一時間も何をして・・・・・・」
いた、という最後の言葉は廊下ではち合わせた少年王が引きずっている異様なものの存在のせいで発音できなかった。
「だだいま。綺礼。ホットケーキもう焼いちゃった？」
いつものように明るいほがらかな笑顔で廊下を歩いてくる金髪の少年はその手に鎖の端を持っていた。その先にはおよそ成人男性ぐらいの大きさの物体、例えるならば包帯代わりに鎖をまきつけて作成したミイラ、というより全身を鎖に巻かれた成人男性そのものがつながれている。ギルガメシュの少年とは思えない腕力で軽々と引きずられているそれは、もごもごと微妙に動いており、ミイラではないようだった。いや、綺礼の常識でいえばミイラだってたまには動いて食べる。断言はできない。
「ホットケーキはまだ焼いていない。焼き立てを食べたいだろうと思って・・・・・・いや、それよりも、それは・・・・・・何？」
「ふふ、そうですよね、ホットケーキはやっぱり焼き立てじゃないと！　わかってますね、マスター。コレですか？　お土産です。後で教えてあげますから、まずはホットケーキ焼いてください。ボク、もうお腹ぺこぺこで。ああ、コレの分はいりませんよ」
「なるほど、わかった」
何がわかったかというと自分がホットケーキを焼かなければならないことと、少年王が”コレ”と呼ぶ物体にいわゆる「人権」を認めなくていいということである。
だから誰にも分け隔てなく接することに定評のあるシスターは何

のためらいもなく、今来たばかりの道を引き返し、キッチンへ戻って行った。

その夜（後書き）

そして彼は彼女と出会った（笑）
第四次聖杯戦争が行われたのは十一月らしいので半年後（五月頃）、
間違っていたら正確なデータが欲しいです。

閑話（前書き）

今回はあまりにも進展がない……。アンチ切嗣ではありませんが、切嗣のような戦い方してた奴が敵討ちの対象になっていないのは納得できない。そいつらが持ち込む昔の諸行を士郎に知られてたくなくて何人か口封じしていても驚かない。

閑話

「アレ、上から落ちてきたんですよね」
「落ちてきた？」
冬木教会のキッチンに付属している小さなカウンターに腰かけた少年王は、夜中にも関わらず旺盛な食欲で二段重ねのホットケーキを完食して満足げな息をついた。綺礼はホットミルクを飲み干した後のマグカップにミルクパンで煮出したミルクティーを注ぎながら首をかしげた。ちなみに少年王はこの場合、黙って飲むが、青年のギルガメッシュは汚れた器を再利用したことに腹を立てるだろう。そこら辺の態度を他者の心の奥を暴くことに秀でた綺礼はしっかりと分けていた。そしてその通りに小さなギルガメッシュはホットミルクを入れた後のマグカップにミルクティーをいれるマスターの横着を許した。
熱いマグカップを持って一口すする。完璧である。どのように完璧かといえば”ギルガメッシュの舌”にとって完璧といえよう。少年は満足の息をもう一度ついた。
この修道女は、どっかの心は剣で出来ているらしいメシ使いのように料理が特別うまいというわけではない。彼女はただ相手好みの味付けをすることができた。
何故かというと言峰綺礼はいろいろと欠けたところのある人物であり、つまるところ内面の不具者であった。そして例えば目が見えない者が必然的に他の五感、つまり嗅覚や聴覚を常人より鋭利なものとするように、綺礼もまた内面の別の場所、いわゆる感知する力が常人より優れていた。
綺礼は何を食べても美味しいと思ったことはない。だが何が美味しいかは知っている。それを再現することもできる。目の前の人物を観察し、食の好みを推察し、それを提供することが簡単にできる。

それは不具者であることを隠して生きてきた綺礼にとってある意味生きることに直結する行為であった。他人がうまいと思う味も不味いと思う味もどちらも同じなら、うまい方を用意すれば「おいしいね」の言葉に「そうだね」と返せば事足りる。ゆえにギルガメッシュと暮らし始めるまで綺礼がつくる料理は全て父親の舌にあわせてつくられており、現在はギルガメッシュこそが綺礼の味付けの基準であった。

例え姿かたちは変わっていても少年も『ギルガメッシュ』であることには変わりなく、共に過ごす生活もはや半年。綺礼は彼の好みを完璧に把握していた。

綺礼はミルクパンからミルクティーの残りを自分のマグカップにそそぎ、自分もカウンターの一席に腰をおろした。

「飛んで降りてきてという意味？」

「違いますよ、文字通り”上から落ちてきた”んです。ええと、なんて言ったらうまい表現になるのかな・・・・・・うん、”放り出された感じ”ってのが一番適切かな。飛んでたわけじゃなくて、落下してました。「このうっかリン口」って叫びながら」

「コノウッカリン・・・・・・？　スラングだろうか？」

「さあ？　母国語はこの国みたいだから方言じゃないんですか？　でも、重要なのはそこじゃないです。後で見に行ってもらえれば綺礼にも分かると思うけど、アレ、人間じゃないです。いや、人間なんだけど、人工的につくられた人間ていうか、人間の魂が入っている人形っていうか・・・・・・わかります？」

「ホムンクルスではないと？」

「違います。ホムンクルスは人間をベースに”存在を改良”したモノでしょう？　あれはホムンクルスの製法でより人間に近くなるよう”存在を改造”してます。つまり人間をつくるか直したかったかしたんだけども、材料が足りなかったり直せないほど壊れていたりしたから別の材料で元の状態に酷似したモノを作ったとか、そんな感じですか」

「・・・・・・？」

「つまり人間だけど、”造ったモノ”だってこと。確実に魔術師関係だし、あれほどの技術は絶対封印指定魔術師が絡んでます。この間みたいに「衛宮切嗣は冬木の戦闘で浅からぬ傷を負ったらしい、あの『魔術師殺し』を今ならしとめられる！」とか安易に考えて冬木に忍び込む三流のおバカさんと一緒にするべきじゃないと思って。教会に連れて来るのはどうかと思ったけれど、放置も出来ないし」

「そうか、違うのか。残念だ。あの男が過去の自分の所業を隠匿するために愚かな挑戦者を秘密裏に処分して山に埋めたと知った時は、とても愉快な気持ちになれたのに」

「あの人、なんで堂々と本名で冬木に居座ってんでしょうねえ？　自分がどんだけ恨まれているか知っているでしょうに。魔術師殺しですよ、魔術師ゴロシ。当然身内殺されて恨んでいる奴らは大勢いるだろうし、打ち取ったら一気に名があがるだろうし。以前はアインツベルンの庇護下にあったから表だって狙われませんでしたけどね、アインツベルンは彼を見限ったんでしょう？　普通なら身を隠すべきだ」

「その点は大丈夫だ。聖堂教会を通じて魔術協会へ勧告してある。自ら聖杯を壊したとはいえ一応最後まで生き残った暫定的な勝者と言える男なのだ。それを弱ったからといって餌食にするようでは魔術師の品を疑える、とな。遠坂家の当主襲名にも口を出させた。なぜならば普通の魔術師なら若干八歳の小娘に五代続いた高品質の魔術回路が与えられると知って黙っていられるはずがないからだ。魔術回路の継承をめぐって先代の子と弟子が殺しあうなど、魔術師の世界にはよくあること、だがそれほどまでに貴重かつ重要なモノだとしても、手に入れるためには命すら危ういリスクがあるとすれば話は別となろう。同じ魔術師なら買収も説得もできるが、代行者の中には魔術師と話せば己の魂が穢れると本気で信じている奴もいる。魔術師ならば聖堂教会を怒らせそのブラックリストの上位に乗ることは避けたいはずだ。よって導師の遺産が凛につつがなく継承され

るためには聖堂教会の後ろ盾が不可欠だし、それをわかっておられたから導師は私を凛の後見人に指名したのだろう」
「ふうん」
ギルガメッシュは不満げな生返事を返した。
「何かな？」
「つまりそれって、綺礼があいつをかばったってこと？　それ気に入らないな。マスターはあいつが嫌いだと思っていた」
「嫌いなのではないよ」
にっこりと修道女はほほ笑み、少年の顔を覗き込んだ。
「”嫌い”ではなく”憎い”・・・・・・私はあの男が憎い。私の欲しい物を持っていながら捨てることのできるあの男が、捨てるくせにまた新しい物を手に入れるあの男が、たまらなく憎い。あの男がこの世界のどこかにいるのだと思うだけで、呼吸が苦しくなるほどに」
胸元に両手をあてて、恍惚とした表情で憎しみを語る修道女の顔は未だ微笑みをたたえていた。それはまるで片思いの恋を語るようだとギルガメッシュは思った。
「だからこそ、あの男は誰にも渡さない。彼を殺すのは私の呪いでなければならない。もっと苦しめばいい、恐怖すればいい。今のぬるま湯のような幸福につかればつかるほどそれから離れた時の冷たさは奴を苛むだろう」
綺礼の衛宮切嗣への憎しみはここにきて感極まった。あの男はあの災害によって帰る場所を無くした子供を引き取ったという。なぜそんなことができるのだろう。自身が余命いくばくもないことは己こそが一番知っているだろうに。
子供を捨て、子供を得る。自身の命があとわずかしかないと知りながら親を亡くした子供に”父”と呼ばれようとする。
そのなんと罪深い甘え。許されないことをしたのなら許されるべきではないというのに、なお償おうとあがくその傲慢。
そして彼は『魔術師殺し』を打ち取って自身の名をあげようと冬

木に乗り込んできた若い魔術師を殺した。殺して秘密裏にその遺体を処理した。このことが公になったのなら魔術教会は衛宮切嗣に冬木から撤退し、身を隠すように命じただろう。従わなければ今度こそ両キョウカイの庇護下から外れ、彼は狩られるだけの獲物になるが、彼はそれに従うわけにはいかなかったのだ。魔術と何の関係もない養子の子供を同行させることが許されるはずがないのだから。

恒久平和を実現させるためだと数多くの命を葬り、今は自分の周囲を守るために夜中山中で死体を埋める男を綺礼は嗤う。結局、お前は何がしたかったのだと。

「・・・・・・なんにせよ、魔術師殺し目当ての三流ではないのだとしたら冬木の管理者代行としては捨て置けない。尋問すべきだな。もっともただの観光だったら目もあてられないが」

「観光客は真夜中に命綱なしのバンジーなんてしないと思うけどなぁ」

「それはそうだ」

ちょうどよく二人のマグカップが空になったので、綺礼とギルガメッシュは椅子から立ち、不審人物を問い詰めるべく地下聖堂へ向かった。本来なら孤児たちを閉じ込めて生命力を吸い取ろうと用意していた隠し部屋が目的の場所であった。そこに例の人物は鎖でミイラになったままで放置されている。思いのほか食事とその後の会話に時間がかかったので、もしかしたらあの人、トイレがやばいかもしれない、とそんな埒もないことを一瞬考えてしまったギルガメッシュだった。

「ああ、マスター。地下に降りるんだから、上着を着てね。体を冷やしたらだめだよ」

「ありがとう。お前は本当に気がきくギルガメッシュだ」

「・・・・・・・・・・・・・・マスター、それちょっと文法違うと思う」

閑話（後書き）

ところで子ギルが青年ギルガメッシュを嫌っているって公式の設定ですか……？青年ギルガメッシュがバリバリの両刀っていうのも公式設定なのか！？

彼女のメフィストフェレス（前書き）

王さまとシスター、何故かラブラブ。何があった……。

彼女のメフィストフェレス

綺礼が室内用のカソックを脱ぎ、外見は同じながらも防弾処理と呪術防御を施した戦闘用のそれに着替え、黒鍵を仕込んだ上着を羽織り、彼女が地下聖堂への入口にたどりついた時、そこにいたのは見慣れた金髪の少年ではなかった。

「遅いぞ、上着を着るだけで何分使うのだ、これだから女は」

どこで入手したのか、まるでヴィジュアル系バンドのヴォーカルのステージ衣装のような純白のなめし革のスーツをまとった男が、手を腰に当て心底偉そうな態度で立っていた。

ギルガメッシュはどこに居るのだろう。ボクも着がえてきますねと言って自分の部屋に行ったはず、などと綺礼は思った。無理らしからぬことであった。

「ギルガメッシュは？」

「ここにおるだろうが！？」

不思議そうに首をかしげるマスターに数ヶ月ぶりに青年になった英雄王は思わずつっこんだ。つっこまずにはいられないほど彼女は純粋な疑問の表情を浮かべていたからだ。流石に寝台を共にし、その胎に己が子を宿した女に「どちらさま？」的な表情で見つめられて動揺しない男はいないだろう。

「冗談だ、ギルガメッシュ。久し振りだな」

「久しいということはあるまい。幼年体とはいえ、我は我ぞ。つねに貴様と共に在ったではないか」

「ほう、そこら辺の認識は双方に差異があるわけだ。幼いお前にとって成長した己は“あの人”と称するほどかけ離れた存在のようだが、お前にとっては過去の自分は自分と同一視できるほど身近なのだな。すでに経験しているか、これから経験するかの違いか」

「貴様、またくだらないことを考えているな」

「そうだな、悪癖だ。何事にも納得できる理由が欲しくて仕方が

ない。だがそれこそが私の根源といってもいい。そう、答えを得るために生きてきたのだから、これからもそうするだけだ。さて、というわけで、私は答えを知りたい。何故、今“英雄王”に戻ったのかね？」

「知れたこと。『王』になる前の幼年体ではなしえないことをしてやるためよ。幼少期の我とて、“ギルガメッシュ”には違いないが、あれは王になる前の、まだ世界中の財を集めていない頃の我だ。この手でつかんだ宝具ではない“王の財宝”の力を最大限に発揮することはできん。今からあの雑種を尋問するのだろう？　我の財の中には他者の記憶を映像として映し出す宝具が複数ある。使ってやろう。ハッ、我の慈悲にむせび泣くがいいぞ」

綺礼は詐欺を疑う目つきで己がサーヴァントを見つめた。

「親切だな、ギルガメッシュ」

「ふふ、貴様のためではない。胎の子のためよ。いいか、決して貴様のためなどではない。だが貴様がこれを貸しととるのは勝手だ。いや、施しか？」

「そうだな。感謝している」

綺礼は笑顔でうなづいた。この場に青年のギルガメッシュがいる理由を納得したからだった。

ようするに「幼年体より我の方が優秀である」といいたくて舞い戻ってきたのだ、この王さまは。なんのかんのといって少年のギルガメッシュが青年のギルガメッシュに鬱積とした思いがあるように、このギルガメッシュも過去の己にコンプレックスをもっているようだった。かたや、己が英霊と昇格される元となった数々の冒険や朋友との出会いが自分自身の行為ではなく、自分の未来という現在の自分ではどうする事も出来ない所で、すでに終わってしまっていることへの不満。もう一方は英雄王として英霊として座にたどりついたのが自分であるにも関わらず、幼く未熟であるはずの過去の自分の方が他者に求められているという不安。

なんだ、文句があるのか、そんな威嚇するような英雄王の視線を

綺礼は柔らかい微笑みで受け止めた。
　ギルガメッシュの不安と強がりを綺礼は理解する。誰よりもその感情の苦しさを知っている。だってそれは綺礼の現状そのままの心だ。自分の本質を自覚しない綺礼は周囲の期待に答えることで“言峰綺礼”という人間を作り上げてきた。他人が優しくしてほしいと思っているから優しくした。騙されたくないと思っているから誠実に接し、見下されたくないと願う者の前では遜った。そうやって生きていた頃の綺礼はまさしく聖女のような女だった。でもそうやって作り上げた殻というべきものを脱ぎ捨てた今の綺礼は他者の苦痛に嗤う醜悪な汚物でしかない。
　父上が今の私を見たらどう思うだろう。
　それはついに来ることのない未来だったが、綺礼はその答えを知っていると確信していた。きっと父は驚愕し、嘆くだろう。そして懇願する。昔の“綺礼”に戻ってくれと。
　そこには愛しかないだろう。娘を愛するがゆえに父は彼女を“更生”させようとするだろう。それが娘の心を殺すに等しい行為だとはつゆほども思わないだろう。綺礼は知っている。父は正しい。正しくないのは己だ。
「ギルガメッシュ」
「なんだ」
「おかえりなさい」
「何？」
　目の前の男が驚くのがわかった。少しおかしかった。
「お前にはおかしなことかもしれないが、私にとってはこの数ヶ月お前は不在も同然だった。だから戻ってきてくれて嬉しい」
　だって綺礼を誘惑してこんな楽しい地獄に連れてきてくれたメフィストフェレスはあの少年ではなく、この目の前の青年なのだ。親しい態度だがマスターとサーヴァントの最後の一線を越えてこない少年より、その紅の瞳で綺礼を暴いた悪魔が欲しい。
「……そうか、まあ当然のことだな」

頭一つ分背の高い男が自分の頭をぐちゃぐちゃとかきまぜるのを綺礼は快く思った。
それはかつて綺礼が羨望していた“真っ当な幸せ”というものなのだろう。しかしそれを与える男は無慈悲な王であり、与えられた女は心が欠けた聖職者だ。双方今のこの時にどちらかの命が理不尽に奪われても、その損失に舌打ちしても嘆くことはない。
それを理解しながら、けれど彼女と彼はまぎれもない共犯者の眼差しを交わした。
「時にギルガメッシュ」
「なんだ？」
ギルガメッシュと微笑みあっていた綺礼は彼の足もとに視線を落とした。ギルガメッシュもその視線の先を追う。
「それはなんのために必要なのだ？」
そこには教会に子連れでくる信徒のために女子トイレにおいてある簡易便器、いわゆるおまるといわれるものが鎮座していた。白鳥の形をもったそれはつぶらな瞳ですましている。
「うむ、成人用が欲しかったのだが、これしかなかったのでな。サイズに不満があるが仕方あるまい」
「ええと、……使うのか？」
「そんなはずなかろう、これはだな……」
ギルガメッシュは胸を張り、それから首をかしげた。
「あれ？　いや、持ってこなければいけないような気がしたのだ」
「元に戻して来なさい」
ぶつぶつと不満をつぶやきながら、それでも英雄王はおまるを元の場所に戻しにいったので、さらに五分ほど時間がつぶれたのだった。

彼女のメフィストフェレス（後書き）

は、話が進まないッ

エミヤシロウ（前書き）

この話を書くにあたって書きたかったもの…

1・女言峰綺礼

2・アットホームな黒幕サイド

3・綺礼より年上の衛宮士郎

4・いわゆる原作知識を綺礼がもっている……言峰士郎が好きだ。

エミヤシロウ

深夜、暗き闇の中に三つの人影があった。窓なき地下聖堂にある光源は床に置かれた一つのアルコールランプのみ。かすかなそれに照らし出され、立ち尽くす人影は揺れる影法師のようだった。

三人のうち、明かりを受け影法師を生み出していたのは金色の髪と紅の瞳をもった青年だった。彼はこわばった顔で地下聖堂の祭壇を睨みつけている。否、祭壇の前方にて無数の鎖に四肢をからめとられている白髪の男を睨みつけている。そして最後の一人である黒髪の女は青年の隣に崩れ落ちるように座り込みながらうつむいていた。その表情は前髪と闇に隠れて見えないがその口元は亀裂に似た笑みをたたえていた。

その身体はよくよく注意して見れば細かく震えている。笑いだしたくなる衝動を必死にこらえているのだ。

拘束された白髪の男は昏睡しているのか、その瞼は閉じられぴくりとも動かないでいる。

先ほどまでこの地下聖堂では、一人の男の半生という叙事詩が語られていた。偉大なる英雄王の宝物庫から取り出された一つの宝具、他者の記憶を引き出し、映像として映し出すという能力をもつ小さな鏡が、拘束された白髪の男のこれまで見聞きしてきた事柄を映し出していた。記憶から作成されたそれは記憶同様に曖昧なものであり、本人が忘れたり勘違いしている部分は修正されずそのままである。しかし断片的な記憶であろうともその価値と衝撃は計り知れないものだった。

エミヤシロウ。

それがこの男の名前であった。エミヤシロウはこの世界の住人ではなかった。なんと並行世界から来たという。それだけで魔術にかかわるものとしては見過ごせない事態だというのにこの男は……。

「なんという、幸運……ッ、そしてなんという不運……！　素晴

らしい……ッ」
床に座り込んでいた女、言峰綺礼は耐えられないと身をよじった。
「並行世界の聖杯戦争の勝者が、あの男の息子が、“私”を殺した男が、この世界に来て早々私に捕獲されるだなんて、なんという滑稽な結末だ！？　主は私に“私”の仇でも打たそうというのか！？」
あははとお腹を抱えて笑う綺礼を、金髪の青年、ギルガメッシュは苦々しい顔で見た。
「男だったではないか……」
「ああ、ギルガメッシュ、そうだな、男だったな！　でもあれはまぎれもなく私だったではないか？　お前が見間違えるはずがないだろう？　ちゃんとお前もいたではないか、一瞬だったが知り合っていたぞ。しかし向こうの世界のお前は一体何をしていたのだ？愛しい騎士王が再び現界したというのに音沙汰なしか？」
「知るか。知らぬが、泥ごときに飲まれ小娘の傀儡になり下がった女に興味を無くしたのだろうよ」
「お前は気まぐれだから」
楽しそうに笑いながら綺礼は親しみを込めたような眼差しを今も目を覚ますことのない白髪の男に向けた。男の年齢は本来義父である衛宮切嗣と同年代だろう。荒れて痩せた髪と少しこけた頬が男の過ごしてきた年月がどんなものかを物語っていた。血は繋がっていないはずなのに父親に似ていると綺礼は思った。目を開けたところを見たい。眼差しも切嗣に似ているのだろうか。
「それでは王は騎士王の最後になんの遺憾もないのか。かの人のマスターでありながら取るに足りない女のために彼女を手にかけた男にも」
「たわけが、そんなはずがあるか」
ギルガメッシュの美貌が憎悪に歪み、彼の背後の空間にも黄金の歪みが生じた。三十ばかり現れた輝く刀身を背に黄金の死神は断罪者の嗤いを浮かべた。

「雑種の分際で我の女に手をつけた罪は重い。たとえこの世界での罪ではないとしても許し難い。しかもこの男は“贋作者”――――、我の一番嫌いな存在だ。本来なら苦痛と共に己の分というものを教えてやるところだが、このような下郎とは視線を交わすのも耐え難い。疾く処分してくれよう」

「それは困るな」

「なんだと？」

意外な反対にサーヴァントは主を見た。王に意見する女を睨む英雄王の眼差しは苛烈だったが綺礼は特に恐れたりはしなかった。親しみをこめて肩をすくめて見せると、ギルガメッシュは舌打ちした。邪魔をするなという視線は何か言いたいことがあるなら早く言えという意味に変わった。

ギルガメッシュ本人は認めないだろうが、今の綺礼はギルガメッシュに対して他の並行世界の綺礼よりも優位な立場にあるのだ。何故ならこの世界のマスターは彼に『子供』という財をもたらす女だからだ。ギルガメッシュは不遜な王であるが、自身が『英霊』という『複製品』であることは知っている。そもそも本当の、本物の『ギルガメッシュという英雄』は今も英霊の座に在る。英霊召喚とはその英霊の座から引き出した英雄の情報を魔力を材料にして複製することをいうのだ。だから今ここに存在しているギルガメッシュが死んだところで、彼が経験した記憶は記録として座に還るだけ、『ギルガメッシュ』には何の影響ももたらさない。もしも次の召喚があったとしても“ギルガメッシュ”はこの世界での聖杯戦争で自分がしたことなど何一つ思い出せないだろう。それは新しく造られたギルガメッシュなのだから。

だが子供は違う。

なぜならばこの女を抱いたのは今、ここに存在する己なのだから。この世界以外に数多の並行世界があり、多くの聖杯戦争に英雄王が召喚され、女に産まれた言峰綺礼を抱き子供が産まれるとしてもそれらは己の子ではない。今、この世界の目の前にいる女の胎に宿る

胎児こそが己の子である。
それは英霊として存在するものにとって目もくらむような価値だった。
「処分しないのならばどうするのだ。魔力でも搾り取るか？　こんな一般人と対して変わりない魔力量しか持ちえない雑種、単体では使い物になりそうにない。洗脳して使役しようにも投影魔術は魔術師本人の心理状態によって完成度が変わるのだ。操られて出来るものではない。脳髄だけ取り出して投影専用に杖にでもするか」
「ギルガメッシュ、お前は時間旅行を題材にしたフィクションは好きか？」
「急に何を言い出すのだ」
「うん、先ほど昔見た映画を思い出した。車を改造して時間を移動する機械を作った老人と青年が過去にさかのぼって騒動を起こす話だ。過去と現在を行き来できるため、彼らが過去で騒動を起こすたびに現代が様変わりするのだ。たとえば青年の両親になる予定の男女の諍いの原因を作ってしまって、結局彼らが結婚するという『未来』を改変することになり青年自身が消滅しかかる、とかな」
「む、それ知っているぞ。テレビで見た」
「そうなのか？　それは僥倖。話が早い。私にとってもあれは面白い映画だった。話自体は感動も笑いもしなかったが、ひとつだけ、過去を変えて現代に戻った時の周囲の人間たちの反応に笑った。彼らは本来の未来が書き換えられていることにちっとも気付かず、女は別の男を夫とし、産んだはずの息子を知らないという。過去と未来はドミノ倒しのように孤立しているようで連結している。一つの出来事を変えてしまえば未来も変わってしまう。そして未来がどのように変わるかを予測することは、おそらく過去を改変した本人にも出来ない。……さて、ここからが本題、とある男がいる。男は若い頃、命がけの恋をした。その娘のために死んだ義父との大切な約束を捨てても構わないほどに、彼女に笑ってもらうためなら命さえ惜しくないほどに。献身の結果、いろいろ辛いこともあったが彼ら

は両想いになり、華燭の典を挙げた。娘には笑顔が戻り彼らは幸せだった。数年間だけだが」
「なるほど」
ギルガメッシュは綺礼が何を言いたいのかわかった。その顔には悪だくみを楽しむ子供のような笑みが浮かんだ。
「ならば許そう。マスターよ、存分にこの下郎と戯れるがいい。愉悦に対しては綺礼は偏食ゆえな。食える時に食っておけ」
「ありがとう、貴方」
寝台の中でしかしないような甘い囁きで感謝をのべてから、綺礼は無造作にエミヤシロウの元へ歩み寄った。今も男の瞼は閉じられたままだが、その沈黙が昏睡しているからなどではないことをこの場にいる全員が知っていた。
意識のないふりをして必死に情報収集と逃亡の隙を探っているエミヤシロウに、言峰綺礼は微塵の警戒の気配もなく寄り添い、自分のそれより若干高い場所にある両頬にそっと手を添えた。
優しく髪をすき、耳元に唇を当てて囁いた。
「……男は後悔などしなかっただろう。女を愛したことも、その女が救われるために起こったことがどれほどつらいことでも、それを“なかったことにしたい”などとは思わないだろう。だが、それはその出来事が『終わってしまったこと』だからだ。“やり直すこと”が間違いなのであって、「もっと早く彼女の苦しみに気付いてあげられたのなら」という反省は常に男の中にあっただろう。おめでとう……貴方の願いはようやくかなう。ここは貴方のいた世界と細部はともかく概ね変わりはない世界だ。遠坂の家には二人の女子が生まれ、その第二子は乞われて他の魔術師の家に養子に行った。その魔術師の家名は、言わなくてもわかるだろう？」
それは貴方が愛した女ではないが、限りなく同一の存在だ。それ以前に貴方は幼い少女があのような仕打ちをこれから十年も受け続けるという現実を肯定することは出来ない、そうでしょう？
エミヤシロウの心に、修道女の囁きは毒のようにしみわたる。彼

は思った。ああ、認めたくないこの現実の中で一番認めたくない事実、この女はかつて自分が殺した神父と同じ根源をもった存在なのだと。

「貴女は望むままに彼女を救うだろう。……でも、本当に後悔しない？」

シロウは目を開いて自分を見つめる修道女を見つめた。

その瞳は、かつて少年だった己に戦争のはじまりを告げた男と同じ色をたたえていた。

エミヤシロウ（後書き）

逆行モノ好きだ。原作知識ありの転生モノ好きだ。でもあれってインサイダー取引みたいな不正行為だとは思っております。

外来種（前書き）

自分自身でもよくわからない話を書いていると思っております。
出産した後の育児編は新しく作ろうと決意。

外来種

それは三人の王たちの宴。武力ではなく盃にて覇を競う戦。
彼らは胸を張り、願望機たる聖杯をその手につかむ正当を高らかに歌い上げる。
一人の王は嗤う。正当などわざわざ問うこともない。そもそもそれが『宝』であるかぎりそれは己のものなのだと。何故ならば彼はかつてこの世の全てを手中にした王なのだから。
一人の王は笑う。だだ通り過ぎるだけの賓の身を、真に一つの生命としたい。それは夢をこの手でかなえるための第一歩。夢とは己で見るもの、他者に与えられるものではない。
そして最後の王は胸を張って告げた。
「私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望機をもってして、ブリテンの滅びの運命を変える」
それは今はどこにもない王国に君臨していた三人の王の物語。

ようやく拝めることが出来た鉛色の瞳は、やはり彼の義父によく似ていた。
信念を持った瞳だった。こちらを睨む様があまりに純粋で可愛らしく、思わず抉ってしまいたくなる。
「桜を救うのが、間違いだって言うのか……ッ！？」
「間違いだなんて。罪もない幼い少女がこれからも十年近く辛い目に逢い続け、挙句の果てに望まぬ罪を犯してしまうまで追いつめられるだなんて本当に可哀そうなこと。それを阻止することが間違いだなんて、誰が貴方にそんな酷いことを言ったの？　私はただ、後悔をしないのか、と聞いたのです」
「……何が、後悔なんか、するかッ……！」
「間桐の家は落ちぶれたといえ御三家の一角。それに二百年前から君臨する御老体はすでに人間をやめてしまったバケモノ。知って

いる？　間桐の歴代当主は子孫に伝えるべき魔術刻印を持たないのだよ。いや、持たないのではない、“貰っていない”と言うべきか。当主とは名ばかり、他の魔術師達に間桐という家系がまだ存在していることを示すだけのお飾りにすぎない。彼は身内とはいえ“魔術師”にお飾りなどという生き様を強制できる実力をもった規格外というわけだ。まあ、ここ数代は衰えて当代などは自分が魔術師である自覚さえ乏しいと聞くが」

「間桐臓硯のことならよく知っている。……俺の実力じゃ、奴を倒すのは難しいってことなど百も承知だ、だけど、それは桜を救うことを諦める理由にはならない！」

「……なるほど、感嘆すべきその決意。主はきっと祝福なさるでしょう。ですが、間桐桜を救いだしてそれから貴方は彼女をどうするのか？　遠坂の家に連れ帰るの？　そして物語のヒーローのように名も告げずに去る？　それもいいだろう、だが貴方も魔術師ならば魔術にかかわる者たちがいかなる人種か知らぬわけではないでしょう？　主家たる遠坂を支える分家筋の者達は確かに当主の娘が受けた仕打ちを憤り、養子に出したことを悔やむでしょう。ですがそれは“養子先の選択を間違えた”ことを悔やむのであって、決して仲の良い姉妹を引き離した事実そのものを後悔することはない。彼女はまたどこかの魔術師の家系に養子にやられる。そしてそれを凛は阻止出来ないだろう。遠坂の魔術を受け継げるのはどちらか一人だけなのだから。そして優秀な魔術属性を持って生まれたものは魔術にかかわらずには生きていけない」

「くっ……」

「では彼女を連れてどこか遠くへ逃げるか。そして衛宮切嗣と幼い貴方のように静かに暮らすのもいい。ああ、それはいい。きっとその家は笑顔に満ちているだろう。幸せな二人だ。二人だけの小さな幸せ。父に逝かれ母に狂われ妹は消える……幼いあの子はどう思うだろう」

「やめろ……ッ」

「ああ、すまない。……きっと、貴方は何もかも承知の上で後悔しないといっているのだから、大きなお世話だったに違いない。さあ、行きたまえ。汝、なすべきことをなせ。その確信を祝福する」
ジャララ、と鉄がこすれる音がした。士郎は己の四肢をからめ取っていた銀の鎖が音を立てて空中を流れながら、つまらなそうな表情で右手を挙げている金髪の青年の背後に吸い込まれていったのを見た。自身を吊り上げる鎖に体重をかけていたため、士郎は思わず冷たい石造りの床に膝をついた。
突然の解放に半ば茫然と床を見つめる男に、もはや何の関心もないのか黒い修道女は彼に背を向けて歩き出している。金髪の男もそれに無言で続いた。彼女の足が地上へと続く階段を昇り始めてようやく士郎は声を発することが出来た。
「何を、何を考えているんだ……ッ！？　アンタは“言峰綺礼”なんだろう！？」
士郎は混乱していた。どう考えてもこの対応はおかしい。師であり義姉でもある遠坂凛の手によって並行世界に送られたはずの衛宮志郎は気がつけば、文字通り“夜空のど真ん中”にいて大きな月を見つめていたのだった。もちろん次の瞬間には重力の掟に従い落下する羽目になった。いきなりすぎる展開にパニックになりそうな内心をうっかり属性の師への罵倒で押さえつけ、体中の魔力を搾り取ってどうにかミンチ肉になるのだけは阻止出来た。しかし安堵したのもつかの間、突然現れた金髪の少年に鎖で拘束され有無を言わさず連行されるという憂き目にあった。
鎖の隙間から見た周囲の風景は、すこし差異はあるものの見間違えようもない自分の故郷であった。そして少年がたどりついたその場所を忘れようがなかった。
冬木教会。自分が初めて殺した男が主任神父を務めていた因縁の教会。キレイ、キレイと少年が連呼しているのを聞いて背に戦慄が走った。やがてやってきたのはゆったりとしたカソックをまとい、癖のある黒髪を束ねて横に流している二十歳そこそこに修道女だっ

た。
　あの時は信じられなかったけれど、今は確信している。どうしてこのような差異が起きているのかはわからないがこの“女”が“言峰綺礼”なのだ。そして垣間見た彼女の年齢からいってこの世界での『第四次聖杯戦争』は終わって間もないはずだ。開催前ならばよかったが、士郎はここへ連行される途中に更地になった冬木市民会館の跡地を見ている。
　ならば桜は、と士郎がこの世界にいるかもしれない妻と同じ名前の少女を思ったのは半ば本能だった。心を空にして武家屋敷の縁側で空を見上げている自分自身よりも、今はまた生きている義父よりも、冷たい地下室で蟲に犯され続ける彼女を思った。
　救ってやらなければと、全身全霊が叫んだ。
「そういえば、名乗ってなかったか。貴方は“私”と旧知のようだったから失念していたようだ。そう、私は言峰綺礼という。一応性別は女で男だったことは生れてこのかた一度もない。彼はギルガメッシュ、私のパートナー」
「ちなみに貴様を最初に見つけた美少年は我だ」
「美少年……？」
「異議立てするか」
「特にしないな」
「で、あろう」
「……そういうことを聞いているんじゃない。アンタが言峰綺礼なら、その目的は聖杯の中身をこの世に誕生させることのはずだ。なのにアンタは俺が桜を救うことを止めないという。桜が救われるということは桜がアンリ・マユを宿さないということだとわかっているはずなのにッ！　何を考えている！？」
「何を考えている？　私が何を考えているのか、それは貴方にとって重要なことなのかな？」
「あたりまえだろうが」
「本当にそうだろうか。私が何を考えているか、その内容次第で

貴方は間桐桜を救うことを断念するとでも？　いいえ、何をしても貴方の目的は変わらない。ならば私がこれから何をするかなど、貴方にとって判断材料にすらならない無価値なことです」

修道女の眼差しは優しく、まるで一生懸命に宿題にとりくむ子供を見守る母親のようだった。

「だが問いには答えよう。私が貴方を解き放つ理由、それは文字通り間桐桜を救わせるため。本来の世界には存在しない異分子たる貴方が歪める、本来あり得ない結果が見たい。……そう、私は貴方という“外来種”をこの世界に解き放ちたい。それはとても楽しいことだろうから」

「外来種……？」

「外来種とは異なる生態系を持つ土地からやってきた来訪者たる動植物のことだ。その中でもその生態が従来の種族を絶滅の危機に導く物を侵略的外来種という。ほら、まるで貴方がこれからすることそのものではないか？　本来なら誰も知らないはずの未来を知る貴方はきっと自分の好きなようにこの世界を作り変えることが出来る。侵略的外来種のように“そうなるはずだった未来”を食らいつくし絶滅においやることが出来る。……私は理不尽に滅ぼされるものが好き。だから貴方がこの世界を踏みにじる様を見てみたい」

「……ッ……！」

「その行為に悪意があろうがなかろうが、それは問題ではない。だから貴方の行動の結果が『悪人言峰綺礼は退治され、それから皆はいつまでも幸せに暮らしました』でも一向にかまわない。ああ、それからもう一つ。私は幼いころ父に『自分のして欲しいことを他の人達にしなさい』と教えられたものだ。それは倫理観の根本にいたる真理だと思っている。人を殺すのは何故いけないか、それは人が殺されたくないからだ。死にたくないから殺すのがいけないのだ。ならば殺すものは殺されることを肯定したと見なされる。……ねえ、貴方が貴方の都合で間桐桜の運命を変えるというのなら、私も私の都合で誰かの運命を変えてしまってもかまわないのでしょう？　よ

もやそれは自分だけの特権で、私には資格がないなどとは、私には『幸せ』を求めることなど許されないなどとは言うまい？　ああ、それはいい。貴方が間桐桜と共に姿を消した後、誰の運命を捻じ曲げるかじっくり考えるとしよう」

くすりと笑みを浮かべ言峰綺礼は今度こそ振り返ることなく衛宮士郎の視界から消えていった。

外来種（後書き）

さて、本当に後悔しない？

ランプの貴婦人

看護師の祖として高名なフローレンス・ナイチンゲールにはいくつかの尊称があるが、そのひとつに『ランプの貴婦人』というものがある。これはナイチンゲールが看護師たちを統括する多忙の身でありながら、自ら夜回りを欠かさなかったという逸話からきていた。明かりがランプやロウソクでしか得られなかった時代、夜は今よりも深く、暗黒の中で負傷と熱の苦しみで眠ることのない兵士たちに遠くからやってくる小さな明かりとゆっくりとした足音がどれほどの安堵をもたらしたことか。

その逸話にならったわけではないが、言峰綺礼は教会で引き取った孤児たちの住まう場所を夜毎巡回するのを日課にしていた。腰には吊るすタイプの小さな懐中電灯を下げて、いつもの修道女の装いである。所々に非常口への誘導灯が光るだけの暗闇の中をゆっくりとした足取りで歩いていた。

ギルガメッシュはもちろん側にはいない。数ヶ月ぶりに青年になった英雄王は地下聖堂から戻った後、綺礼の私室に備えられたワインセラーに直行している。まだ地下聖堂には白髪の男が置き去りにされているというのに、さすが英雄王、豪胆なことである。

それはこんな風に一人きりになる綺礼にも言えることだったが、彼女はあの衛宮の息子を正確に見抜いていた。義父と違って彼は綺礼を殺すためにこの教会の一角で眠りに落ちる子供たちを巻き添えにして「必要な犠牲だった」とうそぶくような男ではない。

だから綺礼はなんのためらいもなくいつもの日課を行っている。といっても、この巡回は綺礼にとってたいした意味があるわけではない。それは聖職者がそうあるべきという、ただの義務だった。

現在、冬木教会には約七名の孤児たちが暮らしている。半年前は十数名いたのだが、その約半数が養い親を見つけて教会を出ていったためその数である。そして、ここに住まう孤児たちは半年前に大

火災において心身ともに傷を負った子供たちであるが故に、時々家族の中で自分だけが生き残ったという精神への負荷に耐えられずに異常行動を繰り返すものが複数いた。真夜中に突然絶叫して外に飛び出すといったり、夢遊病を発症して無くなってしまった家に帰ろうとしたりという行為である。それらを早期に発見する為にも巡回は必要であり、必要ならばそれをなすことをためらわないのが綺礼である。夜中に起きるのが面倒臭い、辛いなどとは思わない。そういう感情とは無縁だ。

かつて綺礼はこの孤児たちを己がサーヴァントの餌とするために冬木教会に引き取った。予想外の妊娠のためにその計画は破棄され、綺礼は用意していた架空の引き取り先ではない本当の養い親を彼らのために捜す羽目になった。それは楽な作業ではなかったが、綺礼はもちろん憤慨したりはしなかった。綺礼は一生懸命に心に傷を負った少年少女たちを受け入れてくれる徳性ある者を探した。

内情を知る者がそこにいたならば困惑しただろう。罪もない子供たちを英霊の餌として文字通り生き地獄へ突き落そうとした修道女は、同じくらいの熱心さで孤児たちの未来を守ろうとしていた。その二つの行動をなんの矛盾もなく行えるのが言峰綺礼という女の、もっとも異常な性質であったが、そのようなことは世の凡人たちが知るはずもない。

実際、綺礼は計画が発動していた時も断念した後もかわらぬ優しさで孤児たちに接した。子供たちとっても教会の若いシスターはお母さんのような温かな人であり、家族を突然失ったという共通の体験において悲しみを理解してくれる同朋であった。この半年で半数近くが新しい家族のもとに引き取られていったが、彼らは全員優しいシスターとの別れを悲しみ、きっとまた会いに来ると誓った。自分たちが一歩間違えれば奈落へと続く穴の側に立っていたのだということに最後まで気付くことなく、まだ教会に残っている友達の幸せを祈りながら新天地に旅立っていった。その事実は綺礼を少しだけ愉快な心持にさせてくれたから、そう意味では綺礼は孤児たちに

親しみを感じていた。もっとも予定通り彼らが地下聖堂の隠し部屋で生きながら食われてくれたのなら、綺礼はもっと彼らを愛おしく思っただろうが。

まだ教会には七名の少年少女が残っており、皆一般家庭につれていくのは難しい者たちばかりだった。弟を置き去りにして一人で走ったために助かったことを悔いて自傷行為を繰り返す少年、全身の火傷のあとがひどく、年単位で整形手術を繰り返さなければならない少女、それから失明した少年には盲人としての生活の仕方を訓練させなければいけない。

それから、自分の母親は死んでいなくて、記憶喪失になってどこかで生きているという妄想に突き動かされ何度も脱走を試みる少女。

「幸子、こんな夜更けにどこに行くの？」

おそらく厨房からかすめ取った食料を詰め込んであるのだろう、パンパンに膨れたバックをもって窓を乗り越えようとしていた少女は背後から聞こえてきた声にびくりと全身を震わせた。おずおずと振り返るその顔には明確な恐怖があった。つぶらな瞳に瞬く間に涙の玉が浮かび上がっていく。

これがもう何度目に脱走だろうか。まだ六歳の少女には母親が死んでしまったということがどうしても受け入れることができないらしい。

「シスター、だって、お母さんが・・・・・・」

すがりつくような眼差しと声色。綺礼は出来るだけ悲しそうな表情で幸子と呼ばれた少女を見つめた。実際はその滑稽さに笑ってしまいたいが。

いつも笑顔の優しいシスターに悲しい顔をさせたことで、少女はぐずぐずと泣きはじめた。幸子だってわかっているのだ。母親がもうどこにもいないことなど。だが実際に遺体を見たわけじゃないという希望が母親に生存を妄想させるのだった。

「だってね、お母さんが・・・・・・」

幸子の脳裏に浮かぶのは『士郎』という名の少年の姿だった。他

の同じ境遇の子供たちが失った家族のことを思って泣いている時も、士郎君はただぼんやりと宙を見つめていた。なんにも覚えてないんだって、でもそのほうが幸せかもしれないわね。そんな看護師たちの会話を聞いたことを覚えている。

同じ病室で隣のベットだった士郎君は何にも覚えていないと言っていた。お父さんの顔もお母さんの顔も、兄弟がいたかも覚えていないと言っていた。だったら幸子のお母さんもどこかで生きているんじゃないか、お母さんもどこかの病院のベットで何も覚えていないと言っているのではないか、幸子はそう思ったのだ。

ある日、見知らぬ大人がやってきて、士郎君に息子にならないかと言った。病室に入ってきた時、他の子供たちには目もくれず士郎君の所にいったから、最初から士郎君だけに逢いに来たのだろう。士郎君はその言葉にうなずいて、そして彼に手をひかれて出て行った。

そのこと自体に幸子は何かを思うことはない。孤児である自分たちには保護者が必要なのだし、士郎君が一緒に暮らしてもいいと言った時、あの大人の男の顔には隠しようのない喜びがあふれたのだから、きっと士郎君は大事にしてもらえるだろう。

幸子がぞっとしたのは男に手をひかれて病室を出ていく士郎君の瞳だった。それまでは人形のように光のない曇った眼差しに確かな光が宿っていた。男にむかって微笑みのようなものを向けていた。幸子には理解できない感情だった。

だって士郎君は私と同じで、お父さんもお母さんも死んでしまったはずなのだ。忘れてしまってもちゃんといたはずなのだ。あの人は新しいお父さんかもしれないが本当のお父さんではないのに。お父さんが死んでしまったのだから、あんな風に笑うのはおかしい。何もかも忘れているからだろうか・・・・・？

その時も幸子の胸には母親がどこかで生きていて、自分を探しに来てくれないのは記憶を失っているからだという考えがあった。そしてその考えと目の前の少年の表情が合わさった時、幸子をとてつ

もない恐怖が襲った。
　もしかしたら士郎君が新しい家族に連れて行かれたように、お母さんは新しい娘を紹介されてその子とどこかに行ってしまうかもしれない。幸子のことを忘れてその子のお母さんになってしまうかもしれない。
　何もかも忘れてしまった士郎君。忘れてしまったのに自分の家族のことを知りたがらない士郎君。新しいお父さんをあっさりと受け入れた士郎君。
　自分のお母さんも同じだったらどうしよう。なくなったものを諦めて新しい物を大事にしていたらどうしよう。幸子はまだここにいるのに、別の誰かのお母さんになってしまったらどうしよう。
・・・・・・・それから幸子の脱走癖が始まった。どこにいるかわからないが、それでも捜さなければならない。知らない誰かと幸子のお母さんが本当の親子になってしまう前にお母さんを取り戻さなければならない。
　優しくしてくれるシスターや、黙っていなくなるたびに真剣に怒ってくれる同室の子にはひどいことをしていると幸子にもわかっている。
　でも唐突に恐怖が襲ってくるのだ。そうなると自分でもどうすることも出来ない。
「だ、だからお母さん、捜さなきゃ、さっちゃんのお母さんやめちゃう前に捜して・・・・・・だって、見つけたら思い出してくれるから、さっちゃんのこと思い出してくれるから・・・・・・！」
　幸子を膝にのせて優しく髪をなでてくれるシスターに何度目になるかわからない自分のマグマのように吹き出しあふれそうになる心をぶつけていく。シスター以外にはこんなことは出来ない。同じ孤児仲間に自分の母親はどこかで生きているのだと主張しても不愉快にさせるだけだ。彼らだって心の底では同じことを考えているのだ。自分の家族だと言われている遺体は何かの間違いで、家族は本当はどこかで生きていて、きっと自分を捜しているのだと。

泣きつかれて眠ってしまった小さな少女を彼女に割り当てられた部屋へと運び、寝台に寝かせた彼女の涙でこわばった目元を濡れたハンカチで拭いてやると、綺礼はまた巡回を開始した。念のためにもう一回りしたが、今夜はこれ以上の異変はないようだった。

綺礼は自室に戻るために踵を返し、そしてふいに足をとめた。

「時に、彼女の言う『シロウクン』はやはり『衛宮士郎』のことなのだろうね？」

呟くように発せられた彼女の問いに、誰もいないはずの背後の闇の中から低い男の声で返事がきた。

「・・・・・・さあな、正直あの時期のことはよく覚えていないんだ。同室だった子たちの顔もぼんやりと記憶しているだけだ。ただ隣の子は両方とも女の子だったよ、それだけは間違いない」

「そうか。まあ、貴方と『衛宮士郎』は別の存在だ。まったく同じ環境で生きているとは思わない。実際貴方の世界とこの世界には私という差異がもうあるわけだしな。・・・・・・それで感想はあるかな。自分も昔、無意識の行動で、一人の少女に強烈なトラウマを植え付けていたかもしれないという可能性について？」

おそらくは敵である魔術師に無防備な背中を見せている綺礼は、だが緊張の欠片もない柔らかい微笑みを浮かべて振り返った。案の定、地下聖堂で別れたはずの衛宮の息子がそこにいた。堅い表情で闇の中からこちらを睨んでいる。

「かわいそうな子だ。とっくに失われたものが、まだどこかに残っていていつか自分の元に戻ってくるんじゃないかという希望を捨てることができず、一歩も前に進めないでいる」

「他人事みたいにいうんだな。あんたのせいだろう、あの火災は」

「向こうの私はそういったかのかな？　深く考えもなしに嫌悪感だけで聖杯を破壊した衛宮切嗣ではなく、自分があの火災の元凶だと・・・・・・そう本当に思っていたのなら、ずいぶんなロマンチストだな、男の私というものは」

「・・・・・・ッ、親父はッ」

「”ああなるとは知らなかった”と言いたいのでしょう？　それは事実でしょう。でも少し考えればわかるはず。五人の英霊を吸収して現界した魔力の塊、それがあの時点での聖杯だった。そして私の王が見た限りでは騎士王は聖杯の正体をしらなかった。ゆえにそれを破壊する動機などもちあわせていなかった。・・・・・・令呪の効力は英霊本人の心構えで大分効果が変わる。令呪で命じても命令された英霊本人が抵抗するのなら、その効果は半減する・・・・・・。わかるでしょう？　今回の聖杯が完全に破壊されずに街に被害が出たのは、ひとえに衛宮切嗣と騎士王との間に信頼関係がなかったためです。おそらくは”破壊しろ”という令呪に彼女は必死に抵抗した。だから不完全な形でしか聖杯を破壊すことが出来なかった。もし騎士王が己のマスターを信頼していたのなら、意味はわからずともその令呪にしたがっただろう、なれば聖杯は完全に破壊され街に被害は出なかった・・・・・・私はそう考えるのだが、異論はあるだろうか。」

「・・・・・・・・・・・・・・ぅくっ」

「そんな可愛らしい顔をするな。いじめているわけではないの。すべては推測なのだから・・・・・・もっともこれだけは言えるが。この第四回聖杯戦争において”聖杯”が選んだ”勝者”は間違いなく衛宮切嗣だったと。私は彼の願いを聖杯が”叶えようとした”場に共に居た。そして彼がそれを拒絶した瞬間にも立ち会った。その後、私は・・・・・・いや、それは今は関係のない話だ」

それから綺礼はそういえばと呟き、じっと衛宮士郎を見つめた。

「貴方は何故まだここにいる？　間桐桜を救いだすのではなかったの？　私としてはとっくの昔に間桐邸に奇襲でもかけているのかと思っていたよ」

「お前と・・・・・・取引がしたい」

「取引？　貴方が、この私と？」

何か面白い冗談でも聞いたかのように綺礼は笑った。それに対して真剣な表情で異世界からの来訪者たる衛宮士郎はうなずいた。

「ああ、魔術師としての、等価交換を前提とした取引が俺の望みだ。無い物は他から補うのが魔術師だろう？　俺ももう情熱だけで突っ走る若造じゃない、わかっているんだ、俺には『間桐桜』をあの家から連れ出すことは出来ても、桜を『遠坂桜』に戻すことは出来ない。・・・・・・・でも、それじゃだめなんだ。それでは桜を救ったことにはならない。桜の願いは家族のもとに戻ることなんだからな。・・・・・・だから俺はあんたの力を借りたい。報酬は払う。それがどんなものでも」

「五十点だ。発想はいいが、交渉の仕方が雑すぎる。何が何でも欲しいものだと相手に知られたら値を吊り上げられるのは目に見えている。そして私は信用していい存在なのかね？」

「信用はしない。だが言峰綺礼がどんな奴かは知っているつもりだ」

「だからそれは私ではないというのに」

軽く首をかしげながら綺礼は笑った。いいだろうと呟く姿は士郎に遠い昔を思い浮かばせた。あの神父もたびたび教会に押し掛ける士郎をこんな眼差しで見たものだった。

「間桐桜を遠坂桜に、しかと引き受けた。たった今より我等は共犯者だ。共に自らの欲望のために本来来る未来を作り変えよう・・・・・・だが、わかっているね？　その意味が」

「わかっている。俺が今からすることは本来訪れるはずの未来への横やり、つまりカンニングみたいなものだっていうんだろう？そして不正をするものは他人が不正をしたときそれを糾弾する資格がない、と」

「その通り、ことが終ったあかつきには貴方に私の不正を肯定していただく。否とは言わせない」

「・・・・・・わかっている。だが聞かせてくれ。あんたの不正の内容を」

苦々しい顔で呻くように士郎はつぶやいた。それがどんなものであれ、士郎の進む道はもう決まっている。それでも自分が犠牲にす

るモノを直視したかった。それから目をそらさないことが彼の最後の矜持であった。

「ああ、いいとも・・・・・・、私の望みは『衛宮士郎』を『言峰士郎』にすることだ」

予想したこともない言葉に士郎は眼を見開いた。思わず目の前の修道女をまじまじと凝視してしまう。

そんな士郎に綺礼は、楽しそうに、本当に楽しそうに笑って見せた。

「同じものが二つあるようだから、私としては手に入れるのはどっちでもいいがね」

推定無罪（前書き）

か、会話しかしていない……（汗）

推定無罪

「そう、私としては衛宮切嗣から『息子』とやらを奪ってやりたいだけで、小さい方でも大きい方でもどっちでもいいのだが、やはりここはおとぎ話をならって小さい方を狙うべきか？」

「なんでさ！？」

「宝物が入っているのは小さい方と相場が決まっている。大きい方は大抵禍だ」

そうだろうと目線を向けられ士郎の顔が引きつった。

「……そんなこと、出来るはずがないだろう……？」

ほのかな懐中電灯の明かりの中で、修道女はやわらかな微笑みを見せている。

「そう、おそらくは出来ない。士郎少年はすでにあの男に好意をもっているのだし、たとえこれから私が彼の耳に衛宮切嗣のこれまでの所業を吹き込んだところで、彼の心からその好意が消えることはないだろう」

「だったら」

「そういえば貴方は、久宇舞弥という名に聞き覚えはあるだろうか？　私は士郎君に彼女の話をするつもりなのだよ。戦場で死にかけていたところを衛宮切嗣に拾われた少女の話を。そう、彼女は衛宮切嗣に命を救われ、彼を育ての親とし、魔術の師とした……そして彼女は衛宮切嗣の理想に共感し、彼の悲願成就のために自分を使い潰すと決め、それを全うして半年前この冬木で死んだ。ただそれだけの話をしよう。何一つ偽りなど口にしないと誓う」

久宇舞弥。その名を士郎は知らない。義父であった切嗣は自分の過去を一切語らずに死んだからだ。だから士郎は義父が聖杯戦争のマスターであったことも、実の娘がいたことも知らなかったのだ。

「そして私は彼にこういう。“貴方はきっと久宇舞弥のようになるだろう。衛宮切嗣の理想に心酔し、彼の理想を継ぐだろう。あの

男はそれを狙って貴方を息子としたのだから”……と」
「ばかな、そんな戯言を、“俺”が信じると思うのか！？」
「別に信じる必要はない。というよりも私はその時の記憶を私の仕業とわからないように忘れさせるつもりだ。……そう、五年ほどたったら自然に記憶がよみがえるように甘い術をかけておく」
「……ッ！」
「何もかも忘れた少年は、きっと月の奇麗な夜に誓うだろう、父の理想を引き継ぎ自分も正義の味方になると……「爺さんの夢は俺が代わりにかなえてやる」だったかな？　そしてあの男は死んで、少年は約束を守るために日々努力して、ある日、ふいに思い出す。昔、知らない女によって今現在の自分の状況が予言されていたことを。それを誰かの手によって忘れさせられていたことを」
「貴様……ッ」
士郎はその企みの邪悪さに眩暈がしそうになった。この女はからっぽだった自分を満たしてくれた理想を最低な方法で貶めようとしている。
「彼の記憶は誰が消した？　たとえどれほど未熟でも自分が魔術によって記憶を封じられたということは理解できるでしょう。そして己の周りに魔術師は一人しかいない。その一人はすでに鬼籍に入って弁解することなどできない。……推定無罪という言葉がある。罪を犯した証拠も犯さなかった証拠もない、だから犯さなかったのだろうという判定だよ。この場合にぴったりな言葉ではないかね？
自分自身の意思でしたはずの決意、だがもしかするとそれは“そうなるように巧妙に誘導された結果”かもしれない……そんなことを一瞬でも思ってしまえば私にもつけこむ隙があるというもの。きっと彼は今度こそ私の言葉を聞いてくれる。あの男がどれほど冷酷に悪辣に人を殺してきたのか……どれほど狡猾に他人を騙してきたかを……。全てを知った後も、彼は自身が『衛宮切嗣の息子』であることを誇り続けると思うかね？」
士郎は後ずさろうとする自分を抑えなければならなかった。

「どうして……」
士郎はうめくようにつぶやいた。
「どうして、あんたたちはそれほど切嗣を憎むんだ……？」
「言峰神父とやらの内心は知らないが、私のは強いて言えば逆恨みだ」
理不尽な理由をほがらかに主張する綺礼の眼差しは、幼子に語りかけるかのように暖かかった。
「私はあの男が嫌いなのだ。あの男の生き方そのものに吐き気がする。あの男に心酔する輩も大嫌いだ。つまりお前にも吐き気がする」
「……」
にこにこと聖女のような笑みを浮かべて言うことではない。この女、あっちの神父よりもタチが悪いと士郎は思った。苦味をかみしめるような士郎の表情に綺礼は楽しそうにくすくすと笑う。
「ああ、その目はどこかで見たことがある……、聖杯の女もそんな眼差しを私になげたものだ。“お前に彼の何がわかる”とでも思っているのだろう？　だが愛していれば相手のことが理解できるということではあるまい。逆に大切に思っているからこそ妄信してしまうことがあるだろう。人は自分で思うより自身を理解していないものだよ。私も自分がどういう存在なのか、願望機に指摘されなければ直視することも出来なかった。そう、自分ではどうしても気付けないモノ、どんなに目を凝らしても見えないモノがあるのだ、その時には決して。貴方もまたソレから目をそらしている――――では切開をはじめよう。……衛宮士郎、問おう、貴方は何故彼の差し出した『ビラ』を受け取らなかった？」
「え……？」
士郎の脳裏にもう戻れない故郷の記憶が電光のように鮮やかに甦った。冬木市。音のしない住宅街。玄関に警察の黄色いテープが張られた民家。そして……『駅前でビラを配り続ける男』。なぜ知っているのかなどとは聞かない。自分の記憶はすでに暴かれている。

「あの宝具は記憶している映像を映し出すだけで、その時の本人が何を考えていたのかを知るとは出来なかった。だから私が知ることは二つ、貴方がいつも彼を避けていたということと、避けていながら意識していたということだけ。そして貴方は彼が配るビラを一度も受け取ったことがない。お人よしの反応としては異常だ。だから私はこう推測する……貴方はビラの内容を受け取る前から検討がついていた。だからどうしても受け取りたくなかった」

蒼白になっている士郎の態度はまぎれもない肯定であったから、綺礼は微笑みながら彼の心を切開し、彼が心の奥に押しやっていた過去を取り出していった。

「ならば彼が出現した時期と照らし合わせれば、おのずとその内容は見当がつくというものだ。貴方は間桐桜の味方であり、“間桐桜を殺せばアンリ・マユに食われずにすんだ人たちの味方”ではなかった。……そんな貴方が「家族の死の真相を求める目的」で配られるビラを受け取れるはずがない。間桐桜に寄生していたアンリ・マユが民家を襲った時、彼はきっと何かの事情で一人だけ別の場所にいたのだろう。そして彼が帰宅した時、おかえりなさいをいってくれる家族たちは根こそぎ消えてしまっていたのだろう」

だから彼は毎日毎日ビラを配る。配らずにはいられない。

ああ、と士郎はうめいた。記憶の中の男は最初は一人でビラを配っていた。だが一月たつ頃には彼の周りには複数の人影があった。同じ目的の人たちが思い思いにビラをくばり、情報提供を訴えている風景を思い出す。

いくら魔術協会と聖堂教会がともに神秘の隠匿をしたとしても、百人以上の人間が遺体もなく消えたのだ、その損失を一般人に納得させることなどそれこそ第四次聖杯戦争の大火災を再び起こし、全てを燃やしつくすことでしかかなわないだろう。実際、両キョウカイの隠蔽工作は完全に成功したとは言えず、その事件はなかなか忘れ去られなかった。

納得することが出来ないと彼らはいう。どうして自分の家族が突

然失われてしまったのかどうしても納得することが出来ないと。あたりまえだ、どう納得するというのだ。
そしてそれを両キョウカイはあえて調整せずにほっておくのだ、“遺族”が全て事件に納得したなど、そのほうが不自然だから。
“あの人たちはああやって、いつまでもやってくるはずのない真実に呼びかけ続けるのか”……そう思うと胸がつぶれそうだった。だが士郎にはどうする事も出来ない。魔術師らしく彼らの心を捻じ曲げることも、正義感らしく真相を暴露することも、何も。
“桜は今幸せ？”……妻は姉の問いに「はい」と答えた。その答えは間違っていないだろう。間違ってはいないが、本当に一片の迷いもなく幸福だったといえば嘘になる。
「彼等を何故救ってやらなかった？　出来るだけ多くの人を救いたかったのだろう？　わざわざ飛行機を乗り継いで紛争地帯などに行かなくてもすぐそこに救いを求めている人々がいたではないか？
貴方は知っていたはずだ。貴方が冬木の大火災を忘れないように、彼等もまた家族を守れず、自分だけ生き残った惨めさを忘れないと……」
修道女の放つ、優しい口調の断罪の言葉。
「でも貴方は“彼等を救うのは嫌だった”……違うだろうか？
彼等を救うということは彼等が望んだものを与えるということだ、つまり真相を。その時、彼等は貴方の主張する『間桐桜は悪くない』という意見を受け入れてくれるか、貴方には確信が出来なかった。間桐桜を仇と思い憎悪を向けてくるかもしれなかった。だから、貴方は彼等をそのままに放っておいたのだ。自力でその苦悩から抜け出してくれるのを願ったのだ。もしそうだとしたら貴方は私情で自分が救うべき者とそうでない者をわけたということではないのか。その判断ははたして公平といえるのか？　……全てを救いたかったが取りこぼすものがあった。だから小数を殺して多数を生かしたと“貴方たち”はいう。だがその切り捨てる小数を自分の都合で選んでいたとしたのなら、これほどの傲慢が他にあるだろうか」

彼等に近づきたくなかった。いつだって目線を合わせないように通り過ぎた。娘はまだ五歳だった、三日後が結婚記念日だった……そんな言葉は聞きたくないし、桜には聞かせるわけにはいかない。そんなことを知ればやさしい彼女は自分を責める。桜のせいじゃない、桜は悪くない……悪いのは。

「……」

だがそんな『明確な悪の存在』が何になる？　“そんなもの”ではあの人たちを救うことは出来ないのに。

そうだ、悪をどんなに糾弾して断罪しても、それは誰かを救うことにはならない。それをもう士郎は知っている。苦しい状態から肉体だけ救いだしても、その人物の心が惨劇の場から動けないのなら何の意味はないのだ。自分があの黒い炎の世界から抜け出せなかったように、セイバーがカムランの丘に引き戻されるのと同じに。

真実を知りたいという彼等の願いは、この苦悩から救われたいという悲痛な欲求にちがいなかったというのに、士郎は彼等の願いをついにかなえてはやらなかった。目をそらして、逃げて逃げてとうとう違う世界まで来てしまった。

「……」

唇をわななかせ、しかし士郎の口から言葉が発せられることはなかった。何かをいいたい、何かをいわなければいけないと思うのに、いうべき言葉が見つからない。

「さて、自身の心の暗部を程よく覗き終わったところで、もう一度問おう、衛宮士郎。貴方は本当に後悔しないのだな？　間桐桜を救うために私に『衛宮士郎』を差し出すのだな？　並行世界の自分という……まぎれもない『他人』を」

推定無罪（後書き）

次回、衝撃的な展開……にはならない。

言峰士郎（前書き）

今回は難産だった。
仕上がりに納得できないけれど、今はこれが精一杯……。

言峰士郎

さあ、問答を始めよう。かつてこの冬木で三人の王が行ったように。

それは剣ではなく信念をかかげて戦う戦。

かつてある男がこう問われた。

大洋に二隻の船が浮いている。

片方の船に三百人。もう一方の船に二百人。総勢五百人の乗員乗客と、あとは貴方。仮にこの五百一名を、人類最後の生き残りと想定しよう。

“二隻の船底に、同時に致命的な大穴があいた。船を修復する技術を持つのは貴方だけだ。片方の船を修復する間に、もう一方の船は沈没する。さて、貴方はどちらの船を直すだろうか？”

当然、三百人の方だと男は答えた。

“貴方がそう決断すると、もう一方の船に乗った二百人が貴方を捕らえて、こう要求してきた。『こちらの船を先に直せ』と。さあ、どうする？”

「衛宮切嗣は二百人を殺した。自分自身の手で。それが彼なりの誠実というものだとでもいうのだろうか。……では貴方は？　貴方も彼等を自身の手で殺すのだろうか？」

「わからない。今となっては……お前は？　お前としてはそんな時はどうするんだ？」

「私？　私ならば、もちろん三百人が乗っている船を修復する。二百人の中の優秀そうな者たちを複数見つくろって修復のやり方を説明しながら。私の技術を覚えた一人が自分たちの船に戻ってそっちの修復をはじめ、他の者がその先の作業を覚え次々に船に帰還して修復を受け継げば、最小限の時間差で二隻の船は修復が可能だ」

「……そういう意味の問題じゃなかったと思うが」

「それが落とし穴なのだ。この問題は『どちらかを見捨てなければならない』という考えにたどりつくように幾つものひっかけがある。船を修復する技術が自分しか持っていないとか、一方を修復してからもう一方を修復するのは不可能だとか、二百人のほうに『こっちを先に直せ』と要求されたとかな……。そもそも全てが曖昧なのだ。二百人もの人間がいて、しかしその全員が助けてくれと要求することしか出来ない無能なのかね？　残りの三百人もそうだ。彼等は自分たちが救われるために二百人もの人間が死ぬのを黙って受け入れるのかね？　彼は何故『船を修復するやり方を教えるから、自分たちで頑張ってみてくれ』といえないのだ。船を修復する技術を持っているのが彼一人だったとしても、未来永劫、彼以外の誰もその技術を覚えられないと確信しているのか？　そこまで彼は自分以外の人間に絶望しているのか？」

「……」

「衛宮切嗣が何かを間違えていたというのなら、それは彼の「自分が世界を救わなければならない」という使命感、いや脅迫観念ではないだろうか。衛宮切嗣にとって世界は“自分が救わなければならないモノ”だった。他人に救ってもらうものではなかった。何故ならば彼はそのユメのためにありとあらゆるものを犠牲にしてきたからだ。世界が彼の関係のないところで勝手に救われてしまったのなら、彼のこれまで払ってきた対価はどうなる？　それこそ無意味になるだろう。中身が空っぽの自動販売機に全財産つぎ込んだようなものだ。己の理想のために切り捨てた者たち、彼の理想に殉じてくれた者たちに報いるためにも彼は自身の手で世界を救わなければならなかった」

その気持ちは私にもわかると修道女は笑う。今までしてきたことが全て徒労であったと気付くことの恐怖は綺礼には痛いほどに理解できる。私たちはその本質こそ正反対でありながら、どこまでも似ていた。

諦められないのだ。支払ったモノが大きすぎるのだ。贖うことが

できると思わなければ彼は生きていくことが出来なかった。
“あがなう”という言葉には二つの意味がある。罪をつぐなうこと、ある物と引き換えに別の物を得るという意味だ。
「……それは冬木の大災害の生き残りである貴方にも言えること。貴方は“自分だけ助かった”という罪をあがなわなければならなかった。だから私はこう思うのだ。貴方は救いたかったから救ったのではない、救わなければならなかったのだと。……信念を持つのは素晴らしいことだ。だがその『信念』が負の感情から生じた場合、人は思考的に盲目になる。ゆえに私は確信する。エミヤの理想が破綻したのは、彼が“正義の味方”になろうとしたからだと」
「……なんだと」
“自分が正義の味方になる”という前提があるがゆえに彼の理想は歪むのだ。そもそも“正義の味方”とは何者の名だ？　この世の誰が『正義』とは何であるかを具体的に知っているというのか。貴方は真の意味でソレを理解していたというのか。そこに私情や偏見がなかったと断言できるのか。人は変わる。価値観や常識さえも時とともに変わっていく……ならば貴方とて変質するのだ、どうしようもなく。自身で止めようもなく。だが貴方はそれから眼をそらしている。何故ならばすでに代価を払っているからだ。“あがなえない”という事実を直視出来ない。だから自身が変質したことにより歪んだ理想に最後までしがみつく。昔は優しかったからと自分を殴る恋人を見限れない女のように」
「お前は……何が言いたい」
「わからない？　その理想を捨ててみろと言っているのだ。理想を捨て、死んだ者たちへの負い目を捨て、衛宮切嗣への憧れを捨て、約束を捨てろ。今まで積み上げてきたものを捨てろ。貴方は誰も救わなくていい。そんなことをする理由はどこにもない。……それでも士郎という男は「困っている誰かのために何かをしてやりたい」と思うだろうか？　そのために生きるだろうか？　自分が正義の味方を目指していることは、巧妙に誘導された結果であり、自分が罪

悪感を感じている者たちは全て幻覚だったと聞かされても、衛宮士郎という少年は“正義の味方”になることは素晴らしいことだと思うだろうか？　私はそれが知りたい」
「それは……難しい。とても難しいことだ」
「無理ならば、それはそれ、それだけのことだったということ。それ以外のものを持っていないからと必死にしがみつく信念に、藁以上の価値があるとでも？」
綺礼は優しい仕草で立ち尽くしている白髪の男に近寄ると、彼の頭部を優しく胸に抱いた。
「さあ、答えて。『言峰士郎』になるのはどちら？　私が手に入れる『士郎』はどちらなのだ？」
「俺だよ」
士郎は疲労の色の濃い苦笑を浮かべた。
「俺がお前の家族になる……、お前の言うとおり、全てを捨てる。どうせ桜のために一度は捨てたものだ。“桜”と比較できるものじゃない。たとえこの世界の桜が俺と何の関係のない存在だとしても……」
彼女は士郎がはじめて自分のために欲した女なのだ。それを見捨てることは出来ない。
「そして後悔はしない？」
「ああ、あんた、本当に悪魔みたいな女だ。見たくないものを目の前に突きつけてきやがって……、後悔だと？　するに決まっているだろう……ッ！　今までだって後悔していた。考えないようにしていただけだ。俺が決めたことに皆を巻き込んで、俺の決定を周囲に押し付けて、なのに失敗したからって肝心の俺が後悔するなんて許されないだろうが。後悔してしまったら、俺はセイバーみたいにやり直すことを考えてしまう。“なかったことにしたい”と願ってしまう。アーチャーのように過去の自分を憎んでしまう。……“なかったことにしたい”と願ってしまう」
きっと今宵の選択も、いつか後悔するだろう。その選択をした自

分を殴りつけたくなるほど嫌悪するだろう。
「でも、後悔するかもしれないということは、行動しない理由にはならない。結局いつだって俺は自分のやりたいようにしかやれない奴なんだ」
士郎の行動には、結局「他人」が存在しないのだ。いつだって自分の選択でしか行動できない。理解されなくても正しいと思ったことを貫いて、だからこそ赤い弓兵は過去の自分を憎むしかない。断罪すらも自分自身の手で行わなければ我慢できないその傲慢がいっそう滑稽だ。
「きっと俺は間違っている。後悔もする……だが、やめない。それが今の俺の答えだ」
「よろしい。その答えは私の共感するところだ」
綺礼は抱きしめた男の頭を優しくなでた。まるで宝物を手に入れた子供のようにぎゅっと抱きしめる。
「今まで私の周りには自分の行いが正しいと信じる人間しかいなかった。信念を持てない者の苦痛など誰も知りはしなかった……だから貴方を手に入れられてこんなに嬉しいことはない。ああ、素晴らしい。欲しいものが手にはいったのはこれで二度目だ」
誰に聞かせるわけでもないその囁きは、いつか誰かが言った言葉に似ていたので、士郎の心を一瞬の焦燥が通り過ぎた。それを振り払うために思わず士郎は自身を腕に抱く修道女の腰に手をまわし、彼女を抱きしめた。
「俺は、あんたの何になればいいんだ……」
「兄に。父上が生前養子縁組をしていたことにしよう。その手の偽装工作は御手の物だ」
「そうか」
「兄上」
「うん」
「兄上」
「ああ」

今宵から自分は言峰士郎になる。この女の家族になる。家族といっても双方の認識には大きな隔たりがあるだろう。師である遠坂凛は死んだ言峰璃正を「息子を誇りに思っていた」と回想し、息子だった言峰綺礼を「孝行息子だった」といっていた。兄弟子を毛嫌いしていた凛がそういうしかなかったのなら、本当に彼等はそんな理想的な家族だったのだろう。でもそれは互いの本性を隠して、あるいは気付かずにいた結果なのだとしたら、今の彼女にとって家族とはどのようなものか。

だがどのようなものであったとしても、士郎は士郎なりの家族の在り方を貫こうと思った。

つまり、今この時から言峰士郎は言峰綺礼の味方になるのだ……と。

「……綺礼。……なんか、腹のとこ異様に膨れているけれど、病気かなんかか？」

「いいえ、兄上。妊娠は病気ではありません」

今、五ヶ月ですという義妹の言葉は、驚愕のあまり半分失神しかけた士郎には聞こえなかった。

手酌酒に飽きた英雄王が己の女を探しにやってきて、彼女がどこぞの雑種の腕の中にいるのを発見するのは三十秒後。

初夏の朝日が昇るまで二時間という夜明けに、かくして士郎は新しい世界で新しい家族を得て、ついでに生死の境をさまよったのだった。

言峰士郎（後書き）

ようやく話が動き出します～。
次回、遠坂凛（九歳）登場！

新居にて（前書き）

すまない、皆大好きアカイアクマは次です。
そしてこの前まで「もう少しで二百いくかも～」と思っていたのに
何故か今三百……はっ、アニメ化かのせいか！　それとも全ては
言峰士郎か！？

新居にて

衛宮士郎がこの世界に来て約一月がたった。この世界で言峰士郎となった彼が最初にしたことは図書館に通いつめること、つまり情報収集である。

いや、最初というのは正しくないかもしれない。彼はその前に刃物で刺されたり、それを義妹に霊媒治療で治してもらったり、新しい身分を作ったり、いつの間にか洗礼を受けていたことにされて愕然としたりしていたが、それは巻き込まれた状況であり彼の本意ではない。

引越しもした。修道女であった言峰綺礼は正式に還俗し、聖職者ではなく一般の信徒と同じ立場になった。必然的に教会は彼女の住居ではなくなったため、彼等は新しい住居へと移動した。それは教会の近くに存在する洋館で、第三次聖杯戦争の参加者が聖杯戦争の拠点として建てたといういわくつきの建物だった。細いながらも霊脈の上にたつその場所を、十年後の聖杯戦争に再び参加する決意をしている言峰綺礼は選んだのだ。

そして、彼女はそこで子供を産み、黄金の英雄王と共にその時を待つ。

あわただしい日々がようやくおさまって暇な時間が出来た士郎は、今日も午前中を図書館の片隅で古新聞をあさり、午後は自分にあてがわれた書斎で言峰璃正の遺品である資料から歴代の聖杯戦争の記録や、聖堂教会側から見た魔術協会の実態を調べていた。

これは彼がこの世界を第二の故郷とするために必要不可欠なことであった。

この世界は彼の元いた世界に酷似しているが、差異がないわけではない。そもそも彼の新しい家族となった女の存在がイレギュラーだ。他にはないなどと思えるはずがない。

冬木市立図書館は一地方の図書館としては蔵書が豊富なほうで、

希少本はもとより新聞も全国紙から地方紙まで半世紀前からのものまでそろっている。さすが歴史だけは古い土地だけのことはある。そして二週間ほど通いつめた後、士郎が出した結論はいろいろ細かい違いはあるものの、この世界もまた概ねかつての故郷たる世界と同一の存在だということだった。

だが図書館の蔵書で得られる知識など、所詮は表の世界の、万民に公開してもかまわないと判断された情報にすぎない。士郎は裏の世界、魔術師たちが構成する神秘の世界に生きる者である。そのための知識は義妹たる綺礼に提供された資料ではあまりにも足りなかった。

「それはやはり遠坂に頼るしかないでしょうね」

台所というより厨房と称するほうが適切な、石造りの調理場で今夜の料理の下ごしらえをしていた綺礼は兄の疑問にそう答えた。もはや妊娠を隠すこともなくなった綺礼は濃紺色のマタニティドレスを着ている。柔らかい布を押しのけるように存在を主張する腹部に寒さよけのためか若葉色のカーディガンが巻かれていて、外見だけを見ればそれは幸福な若奥様であった。

背もたれのない丸椅子に座りながら蒸し餃子の皮にせっせと具をつめていく綺礼の横で、粉よけのためのエプロンをつけた士郎は丸い小麦粉の塊をめん棒で平らにのばしながらため息をついた。

「やっぱりそうか」

「ええ、魔術協会の支部は日本にも存在しますが、そもそも協会は神秘の隠匿と魔術師の保護を目的とした相互組織であり、兄上のような協会に所属していない魔術師のためになにか便宜を図ってくれるとは思いません」

「だよなあ」

話し合いながらも二人はお互いを見ていない。士郎は器用な手つきで次々に餃子の皮を作っていき、綺礼も次々に具を詰めていく。せっかくなので大量に作って冷凍保存しておくのである。主婦の知恵であった。

「遠坂か……。だけど、いきなり行ってここ最近の魔術師たちの情勢を教えてくれって言っても門前払いされるだけだろう。いや、今の俺は言峰璃正の息子なんだし、親父さんは遠坂の先代当主と交流があったと聞くし、その線で攻めるか？」

「無理です」

妹はにっこりと笑った。

「言峰の性をもっているからこそ門前払いどころか、ガンドです。私は凛に嫌われています。最後にあったのは時臣師の葬儀の場でしたが、「二度と顔を見せるな」といわれましたから」

何が楽しいのか、にこにこと嬉しそうに告げる妹に、兄は深く息を吐いた。

「……いや、アレはお前が悪い。遠坂が怒るのは当たり前だおふくろさんもあんなになっちまって、頼れるのはお前しかいなかったんだ。それなのにちょっと拒絶されたくらいで後見人降りちまって」

「いいではありませんか。禅城の老夫妻は彼女の母方の祖父母です。よろこんで後見人を引き受けてくれましたよ？　“彼女の父親を守れなかった自分はもう凛に顔向けができない”と嘆いて見せたら向こうから申し出てくれたほどです。凛も赤の他人の私よりも彼等の方がいいと思うでしょう」

「心にもないことを」

士郎は血の気が失せた少女の顔を思い出した。父の葬儀を自身が悲しむ場ではなく、課せられた義務として果たそうと踏ん張っていた少女。彼がかつてあこがれた女と同一の存在は幼い身体で、しかし彼の知る彼女自身をすでに持っていた。

確かに彼女の言峰綺礼に対する態度はお世辞にも後見人にたいするにふさわしいものではなかった。だが綺礼にだってわかっていたはずだ。“あんたにしてもらうことなんか、何にもない。あんたがいなくたって遠坂の家と母さんは私が面倒みるわ”……その少女のつたない憎しみは甘えの裏返しだということを。凛は綺礼を信

用していたわけではないだろう、だが父親を守ってくれなかったことに怒りを覚えるほどには信頼していたのだ。
だから父親が死んでしまったことに、一人だけ生き残った綺礼に憤っている。そしてその憎しみを隠さないで綺礼にぶつけたのは、彼女がそれを受け入れてくれると信じていたからだ。
だが綺礼はその甘えを逆手にとった。受け流すべき言葉に大げさに嘆き、彼女を遠ざけた。
「心外です。あれは兄上のためにしたのですよ。凛がつらい思いをしているとしたらそれは貴方のせいだ」
「……わかっているよ」
最後の一枚を作りおわった士郎は粉だらけになった手を布きんで拭い、エプロンをはずした。
「少し出かけてくる。手伝いはもういいな？」
「はい、お気をつけて。アポイントメントなど取ろうなどしたら居留守を使われますよ。確実にするなら他の人間を狙うことです」
「そうする」
肩をすくめてから士郎は調理場を出て行った。代わりに黄金の髪の青年がやってきて入口の近くで彼等はすれ違った。お互い目線も会わせずに通り過ぎる。
「やれ、表面上ですら仲良くやれないのかね、お前たちは」
「雑種はどこへ行くのだ？」
「兄上は凛が気にかかるようだよ。時臣師の葬儀の時もやたらと話しかけてうっとおしがられていた」
「いや、お前の眼を通して見ておったが、あれは確実に幼女趣味の男を警戒する眼差しだったぞ」
「おやおや……、ん？　ギルガメッシュ、もしかして昨日のアップルパイの残りを探しているのか？　それならもうないぞ」
「なんだと！？」
冷蔵庫の中を物色していたギルガメッシュはぎょっとした顔で振り返った。

「なぜないのだ？　お前が食ったのか？　なぜ我を誘わん！？」
「いや、今兄上が全て持って行った。多分凛と食べるつもりではないかな？」
「おのれ、あの雑種め」
英雄王は歯ぎしりして悔しがった。雑種など視界にいれるのも不快だったため視線を意志的にそらしていた。そのために彼がもっている物に気付かなかったのだ。
「空腹なのか？　ではもう餃子を蒸すとしよう。軽食をそれでですまして夕飯は別の物を作るか」
「どのくらい待つのだ？　我は今すぐ食いたいのだ」
「すぐできる。とっておきの中国茶を入れてあげるから我慢しろ」
「……思うのだが、お前は我とアレに対する扱いが違わないか？　我は王ぞ、なにゆえアレには敬語で俺には“我慢しろ”などというか！？　我は侮りには死をもって応えるぞ？」
「どのような理由であれ彼を我が兄としたのだ。それを敬わないなど、私が受けた教育ではありえない。そして私はお前のなんだ？　恋人か？　主人か？　いいや、王を楽しませるための道化だ……そして道化とは王を嘲笑して罰せられない唯一の身分なのだ。それを誅するなど王の器量が問われるな」
「端女の分際で王の器量をはかるか」
黄金の王から噴き出した怒気は触れただけで火傷をしそうなほどに苛烈だったが、綺礼は気にしなかった。戸棚から蒸籠をいくつか取り出して作業台に並べていく。
「それこそが道化の存在意義ならば。さて、海老が入っている餡と豚肉が入った餡と野菜だけの餡の三種類があるがどれを食べる？　それとも食べないのかね？」
「うむ、むろん全部だ。早くするがいい」
子供のような素直さで殺気を消し去ったギルガメッシュはいそいそと椅子に座る。その顔にあるのは美味なるものに対する純粋な期待の色であった。

本人は認めないだろうが、結局尻に敷かれている英雄王なのだった。

新居にて（後書き）

次回、今度こそ遠坂凛登場。
ただしプチ鬱注意。

遠坂邸（前書き）

プチ凛、プチ鬱注意。
後、最後は意味のないイチャイチャ（笑）
葵夫人にふくむところはありません。でも家の綺礼は淑女の英才教育を受けた女です。父親の趣味で。

遠坂邸

遠坂稟は言峰綺礼が嫌いである。

初めて出会ったときから嫌いだった。一目で恋の奴隷ならぬ、嫌悪感のとりこになったといってもいい。一目惚れという言葉があるのなら、一目嫌いという言葉があってもいいんじゃないかと凛は思っている。何故一目見て相手に惚れこむことには専用の言葉があって、嫌うことにはないのだろう。世の中にはそっちの方が多いと思うのに。

四年前、魔術師らしく己が工房で日々研究にいそしむ父が突然一人で外国へ旅立ったことがあった。行先はイタリアにある遠坂の別宅であるらしい。連れて行ってくれればいいのに、お仕事だというのなら別宅で桜とおとなしくしているのにと頬を膨らませる凛に、母は苦笑して貴女たちは学校があるでしょうと宥めた。それから十日ばかりで父は帰宅したが、弟子となったあの女を連れていた。

足首までおおったカソックの裾を少し持ち上げて西洋風の挨拶をする修道女は素晴らしく優雅で、凛には父が彼女を気に入っているのが一目でわかった。父は“常に余裕をもって優雅たれ”という遠坂の家訓を身に刻んで生きている。そんな父にとってヨーロッパの修道院で本格的な礼儀作法を学んだ綺礼はこの上もなく好ましい女性に思えただろう。彼の妻である葵は良家の子女ではあるが、それでも“お嬢様”の域をでない女だ。指導というより扱きというべき教えを切り抜けた綺礼と比べるとどうしても見劣りしてしまう。それは葵の欠点というより、プロフェッショナルとアマチュアの間にあるどうしようもない技術の差のせいであった。

だが幼い凛にはその態度が母や自分への攻撃に思えた。ただでさえ父の一番弟子になるという夢を奪われたのだ、気に食わない女は憎い女になった。

だが、それでも凛は言峰綺礼という女を認めてやろうと思ってい

たのだ。
師である父に対する献身、魔術の習得に対する尽きぬ努力は彼女を嫌っている凛にすら文句をつけられないものだった。凛が危惧したように父に取り入って母との仲を裂くこともなかった。聖杯戦争で父を守り切れなかったことは許せないが、綺礼もまた心無い魔術師に監査役である父親を殺されているのだ、精一杯であったことは認めてやってもいい。綺礼のこれからの頑張り次第ではいつかは許してやってもいい……。
凛はそう思っていた。なのに綺礼は聖杯戦争が終った途端、あっさりと遠坂家に、凛に背を向けたのだ。もう用済みだと言わんばかりだった。その薄情が凛は許せない。
「そうよ、あんな女に頼らなくたって私はちゃんとやっていけるんだから……！」
綺礼と最後に会った一月前、父の葬儀で父の形見として渡されたアゾット剣を見つめながら、暗い自室の中で凛は決意を新たにする。
そうだ、新たな後見人には実の祖父母である禅城の老夫妻がなってくれた。彼等ならば凛に対して誠実であってくれるだろう。あんな本当は何を考えているかわからない元姉弟子なんかよりも。
なのに凛は安心できなくてこんなところで一人で父の形見を握りしめている。その不安は周囲の者たちの新しい遠坂の当主対する態度にあった。
遠坂凛は遠坂家六代当主なのだ。かの者は遠坂に属する者たちの頭、彼等が従うべき主である。だがそれを理解している者たちの何と少ないことか。
凛とて自分がまだ未熟なことは十二分に理解している。遠坂家の魔術刻印を受け継いだとしてもそれを使いこなせるまでには何十年もかかるだろう。父がそうしたように時計塔に留学する必要もあるだろう。けれどもどんなに未熟でも凛は遠坂の六代当主、霊地冬木のセカンドオーナーなのだ。ならばいかなることがあっても自分の許可なく事が起こってはならないはずだ。

しかし現実は違った。まだ十歳に届かない少女は周囲の者たちにとって先代の遺児にすぎず、後見人にいたっては娘の産んだ孫でしかない。誰も凛を気にかけることなく物事をすすめ、彼女のところには事後承諾どころか報告すらないということがままあった。皆が口をそろえて“今は学ぶことに専念しろ”という。そうすべきだと凛にもわかっている。わかっているのだが……。

もどかしさに苦悩する少女に自室のドアをノックする音が聞こえた。

凛はアゾット剣をクローゼットの中にしまい込むとドアへと向かい、来訪者を迎え入れた。

「凛ちゃん」

ドアの外にいたのは障害をおった娘を心配して同居している祖母であった。やさしい祖母に凛は懐いていたが、物心ついた頃から変わらない呼び方と笑顔が今は忌々しい。

「……なんでしょう、おばあ様。私、今頭痛がして休んでいたのですが」

「すみません、でもちょっと今、言峰さんがいらしていてね」

「え……」

かっと冷えた頬に血が上るのがわかった。それを悟られたくなくて凛はわざとぶっきらぼうな声を出した。

「なんで、綺礼が遠坂の家に来るんですか、私もうあの人には用がありません」

「いいえ、来たのは綺礼さんではなくてお兄さんの方ですよ。今居間においでよ」

誰だ、それは。

ほんわり暖かくなった心がまた冷たくなったのを凛はぼんやりと感じていた。

（綺礼の兄？　そういえばお父様のお葬式のとき、そんなのがいた気がするけれど……）

少し話したような記憶もある。だけどその人が自分に何の用があ

るというのだろう？
「その人、私に何の用があるのですか？」
「ええと、遠坂にある魔術関係の蔵書を見せてくれないかと頼みに来たんですよ。遠坂の秘術にかかわらない一般的な物でいいそうよ。言峰さんのお兄さんだし、どうぞ、かまいませんよって私、言ったのですけどね。あの人、当主は凛さんだから凛さんの許可がなくちゃダメだって言い張って……。ごめんなさいね、ちょっと出てこれるかしら」
「……許可。私の」
その言葉はすうっと凛の心にしみこんできた。何を考える暇もなく凛は頷いていた。
「はい、おばあ様。私、言峰さんに会います」
「そう？　いいのよ、頭が痛いのでしょう？　私が代わりにお相手いたしますよ」
「ありがとうございます、おばあ様。でも大丈夫です、これは遠坂の当主である私の仕事です」
少女の淡い微笑みの意味を祖母は理解しなかったが、凛はもうそのことで傷ついたりはしなかった。

その日、少女にとって特別な、劇的な何かがあったわけではない。言峰士郎が持ち込んだ彼の手作りだというアップルパイはとても美味しかったが、言ってみればだだそれだけのことだった。
美味しいアップルパイに凛ははしゃぎ、言峰士郎はまたつくってくると彼女に約束してくれた。
“士郎さんの方が璃正さんに似ているわ”、そんな凛の戯言に白髪の男は苦笑して“実は俺は養子なんだ”と返した。
ランプの明かりに照らされた浴室は柔らかい色に満たされている。
薔薇の香りのする乳白色の湯につかりながら英雄王は腕に抱いた女の腹部をなでている。

うんざりしたような女は、しかしなすがままになっている。
この明かりはギルガメシュの注文である。ギルガメッシュは電気の作りだす輝きよりも炎がもたらす暖かい明りの方が好きだった。なんといってもそれは彼が英霊ではなく一つの命として在った時からなんら変わることなくそこにあるのだから。時が全てを変質させようとも炎の優しい色合いは変わらない。
「まだ生まれんのか」
「もう少しだな、あと三か月ばかり……んぁ」
その時ギルガメッシュが別の部分を撫でさすったため、思わず綺礼は嬌声をあげた。
「……何をする」
非難を含んだ眼差しが注がれたが、ギルガメッシュはせせら笑った。
「あんな雑種を飼うことを許してやっているのだぞ。たまには我に感謝したらどうだ。そら、入れられたくないのなら腿を使え」
「あ……」
乳房を鷲掴まれ、綺礼は苦痛とも喜びともつかないため息をついた。湯船の中は入浴剤による白濁のために見えないが、ちゃぷちゃぷと波打つ音が水面下の淫らな動きを示唆している。
「あ……はぅ、あ」
「ふむ、時に綺礼よ」
ギルガメッシュは苦悩するような表情で愛撫にたえる女の耳元に唇をよせて、愛を囁くようにおぞましいことを聞いた。
「獲物がお前の仕掛けた罠にかかるまではあとどのくらいなのだ？」
はあと熱いため息をついた綺礼の瞳には確かな恍惚があった。
「早くて、三か月……」

遠坂邸（後書き）

次からは戦闘シーン書かなくてならないので大変です。上手く出来るかな……。

冬木大橋（前書き）

戦闘シーンがはじまるはずだったんです。信じてください（汗）
でも士郎が言峰士郎であることをどう思っているか書かないとこれからの話がわかんなくなると思って……。

冬木大橋

遠坂邸を訪問することが日課になってしまった士郎が、今日も借り受けた数冊の魔術書を持って遠坂邸を出たのは、夕暮れの色が完全に夜の黒に変色してからだった。ぜひ夕食を共にと凛の祖母に引きとめられた結果であった。凛本人は恥ずかしいのか目線をそらして黙っていたが、反対はしなかったので少しは嬉しかったのだろうと士郎は思っている。

何故ならば、こちらをちらりと見た少女の顔の、一見面倒だという態度に見え隠れする“本当は嬉しいの”とでも言いたげなはにかみがそれを雄弁に語っていたからだ。本人は無意識なのだろうが、こんな調子ではさぞや周囲の少年たちに混乱を振りまいていることだろう。さすがはアカイアクマ。

士郎は大型バイクのシートに収納していた漆黒のライダースーツを身にまとい、フルヘルメットをかぶって遠坂邸を出た。

「……う、結構遅くなったな」

三十すぎたいい大人である言峰士郎に門限などあるわけではないが、現在の士郎の立場から言えば魔術の時間である夜の活動は極力避けたほうがいい。さっさと帰るに限ると士郎は判断した。

深山町の奥に存在する遠坂邸と、新都の山頂付近にある冬木教会よりもなお奥深くに建つ言峰邸は、地図上でこそ近く見えるものの、実際に移動するとあっては徒歩では一時間以上もかかるほど離れた場所にあった。なんと言っても深山町と新都を結ぶ道は未遠川にかかる冬木大橋一本しかない。

そうなると、たとえば深山町の住人が冬木市唯一の港である冬木港から船に乗り込もうとするのなら、その人物はたとえ海辺の近くに住んでいてもわざわざ中心部にある冬木大橋まで行かねばならないということになる。

冬木市は地方都市であるだけあって、なかなか交通の便が悪いの

であった。主な交通機関は市営バスである。電車はそもそも隣の市に行くために存在しているといっていい。

以下の理由で必然的に市の交通のかなめである冬木大橋の渋滞は日常茶飯事であり、それを経験したことのない冬木っ子は皆無であった。

というわけで、その日言峰士郎が渋滞に捕まったのは運命でも何でもなかった。ただ単に帰宅する者たちが集中する夜の八時頃に冬木大橋を渡ろうとした士郎が愚かであったというだけの話だ。

「まいったな……」

士郎はヘルメットの中でため息をついた。今士郎が操っているのは綺礼が買い物や通院に使っている国産車ではなく、ギルガメッシュが気まぐれにオーダーした特注大型バイクである。本人はもう飽きているから勝手に使ってもかまわないとギルガメッシュのマスターである綺礼が太鼓判を押したので、士郎は英雄王に無許可でそれを乗り回していた。ギルガメッシュに借りをつくっているようで気に入らないところはあるが、無念なことにこの世界に来てまだ半年の言峰士郎は、今だ貯金ゼロ円の無職の男でしかない。つまりは現在の士郎は義妹である綺礼に養ってもらっている居候なのだ。元の世界からいくばかりかの金品を持ってきてはいるが、それでもこうやって高性能のバイクを乗り回し、衣食住に不自由しない生活をおくるには到底足りない。

ちなみに先日、凛に「ところで士郎さんはどんなお仕事をしているの？　綺礼のお兄さんだけど神父さんではないのでしょう？」などと無邪気に問われて大変胸が痛かったものだった。幸い“言峰士郎”として作成された士郎の新しい経歴は、ほぼ元の衛宮士郎のものに似せてあったので、士郎は幼い頃災害にあって両親と死に別れたこと、それから義父の養子になったこと、若い頃結婚したことと数年で妻と死別したこと、それから世界中の紛争地域や発展途上国を渡り歩いて、時に井戸を掘ったり、時には難民キャンプの護衛のために傭兵まがいのことをしていたことを何の違和感もなく話すこ

とが出来た。
現在は妹の初めての出産を手伝うために日本に滞在しているが、もしかするとこのままこの冬木で仕事を見つけるかもしれないということを告げると凛は嬉しそうにうなずいた。
「結局シングルマザーになるわけだし、心配なんだよ。綺礼もそれを望んでいるから、少しこの冬木に腰を落ち着けようと思って」
「そうね、そうした方がいいわね。しかしあの綺礼がシングルマザーねえ……。そんなこと、想像したこともなかったな。いったいどんな奴があいつを妊娠させたあげく責任とらずに逃げられるっていうのかしら。想像もつかないわ」
「いや、逃げたわけじゃないから」
真面目な顔で考え込む凛に士郎は苦笑するしかなかった。もっともこうして彼女の元後見人の話題を気楽に出せるようにはなってはいるものの、凛はまだ綺礼と和解どころか再会すらしていない。二人は未だ絶縁状態にあり、なにかきっかけがなければその関係が変化することはないだろう。
「……妹か」
言峰綺礼は衛宮士郎の天敵である。士郎はかつて監督役を名乗る神父との出会いを思い出していた。初めて出会った時、士郎はかの人を一目で自分の敵とみなしたのだ。そしてそれは事実だった。たとえ士郎の中に、彼のその一途な生き方への共感があったとしても、自分たちは互いの望みを否定しあわなければならなかった。
その覆りようのない真実が今こうして反転している。この現実は実に奇妙で優しい。
傷心につけこまれるような形で受け入れた“言峰士郎”は、しかしぬるま湯のような温かさをもって士郎を包んだ。実際、同居人としての言峰綺礼は完璧な女だった。それもそのはず、彼女は幼少の頃は父の巡礼につき従い、成長してからは修道女として規律に従い、嫁いでは病弱な夫の看病をし、つい最近は優雅たれが身上の貴族趣味の魔術師に弟子として仕えていたのだ。従者としての経歴は人生

と同じであった。
　与えられる温かい食事、常に清潔に整えられた住居、ときたま頼ってくれる細々としたこと、さりげない気遣い、そして何よりも帰るべき家と、お帰りなさいといってくれる人がいるということ。それらの目もくらむような価値を、士郎はちゃんと知っている。ならばどうしてそれをくれる綺礼を忌避できようか。惜しみなく与えられたモノに“真心”がこめられていないというだけで、感謝するに値しないと断言できるのか。
　それに気付いた時、士郎はどこか迷いのあった“綺礼の兄”という生き方を受け入れた。もとより報われなくても正義の味方であることをつらぬこうとしていた男だ、思う相手が思われる喜びを知らない女でも何の問題もない。士郎がそうしたいのだ。綺礼の側にいてやりたいのだ。言峰士郎が側にいることで悪でしかない言峰綺礼が、己の知る神父とは少しでも違う結末を迎えられたのなら、これほど嬉しいことはないではないか。
「やれやれ、これは、亀どころかナメクジの歩みだな……綺礼に一応連絡入れるか」
　士郎はヘルメットを外すと、ライダースーツのポケットから携帯電話を取り出した。片手だけで器用にアドレスの自宅の番号を呼び出した士郎は、通話のためのボタンを押そうとして、ふいに感じた懐かしい気配に驚愕した。
「あ……」
　後方の歩道に誰かがいる。あまりにも意外な、あまりにも懐かしいその気配に、士郎は自分の心と体が凍りついたのを感じた。
　隙間なくみっちりと車体でふさがっている車道と違い、夜の歩道には人影がなかった。しかし今、誰もいなかったはずの歩道に人がいる。男だ。ゆっくりした足取りで士郎の方に歩いてきている。
「あ……」
　口の中が渇いている。喉も乾いているのに士郎の顔にはしっとりと汗が張り付いている。だが士郎には拭うことなどできるはずもな

い。
少しでも何かが動けばそれだけで全てが破綻してしまいそうだった。士郎は睨みつけるように携帯の画面を見つめ、小さなボストンバックを担いだぼさぼさの髪の男が自分の脇を通り過ぎるのに耐えた。
男は彼に気付かない。いや、それは正しくない。そもそも、その男は士郎を知らない。士郎だけがその男とよく似た存在を知っている。だから見知らぬ二人の視線は最後まで交差することなく、男は士郎に背を向けて新都の方向へ歩み去って行った。
「……爺さん」
音なく唇だけを動かし一度だけ呟くと、士郎は自宅へと電話をかけた。
「……綺礼？　今、冬木大橋で切嗣を見かけた。俺の記憶通りのことがこの世界でも起きるのだとしたら、切嗣は冬木港から船に乗って一月は帰ってこない。……ああ、確認はした方がいいな。でもそれが確実になったらお前の言う“状況”の条件はそろったってことなのか？」
色よい返事がもらえたのか、会話が終わるころには士郎の青ざめた頬には色が戻っていた。携帯電話をしまい、ヘルメットをかぶりなおした士郎には先ほどまでの緊張の残滓はほとんど消えていた。
「ようやく助けに行ってやれる……桜」
士郎は決意を秘めた瞳で前を向いた。たとえ彼に気付かず背を向けて去っているその男が士郎にとってどんなに懐かしく、切ない哀愁をかきたてる人でも、自分にはもう別に守るべき者がいる。だから追ってはいけない。どんなに彼を救いたくても。
士郎はこれから起きることを知っている。
これから彼が向かうアインツベルンの常冬の城は決して彼を迎え入れることはない。娘との再会をもとめて凍死寸前まで森をさまよい歩き、だがそれはかなわず、彼は虚しさだけを土産に冬木に帰還するのだ。そして義父の帰りを待ち焦がれていた少年にさも心躍る

冒険をしてきたかのようにふるまうのだ。
士郎はこれから起きることを知っている。
士郎の小さな姉妹はそんな父の姿を知らぬまま父親を恨んで生きてくのだ。郊外の森の奥に深くに建つ、主の消えたアインツベルン城に一人残されたホムンクルスの侍女が教えてくれたことだ。聖杯の少女は、自分を捨てた父親にはもう新しい子供がいるのだと、だからお前のもとに戻ってこないのだと聞かされながら生きていく……。
士郎は知っている。知っていながら彼を追わない。
「さようなら、切嗣。……俺は兄貴だから妹を守らなきゃ」
新しい家族とこれから産まれてくる命を士郎は守ると決めた。異質に生まれたため誰にも受け入れられず、誰かを受け入れることも出来ない一人ぼっちの妹。そんな女を母として産まれてきてしまう子供。
男に抱かれて子を身ごもろうとも妻にも母にもなれない、それが綺礼の自分ではどうする事も出来ない欠陥だというのなら士郎がそれを補うのだ。盲目の者のために点字があるように、綺礼がまっとうに生きるために必要なものを士郎が用意するのだ。そうすれば綺礼も綺礼の子供も生きていけるのだし、そもそも本来の“言峰綺礼”という存在が自分の望みのためにこれからやらかすことを考えれば士郎の献身は歴とした正義の味方的な行動と言える。
やがてようやく停滞していた周囲の車たちが動き出し、士郎もまたバイクのエンジンをふかした。
結局、士郎は一度も振り返らなかった。

会話が終ったあとも女は奇妙な表情で電話機を見つめていた。
それ自体は何の変哲もないアンティークな電話機である。プッシュホンではなくダイヤル式の、一昔前ではどこでも見かけていただろう黒電話だが、今の綺礼にはそれが得体のしれないオーパーツの

ように思えた。
「どうした綺礼？」
いつまでも電話機を凝視しているマスターにギルガメッシュは疑問を投げかける。
「誰からの電話だったのだ？」
「兄上からだ。衛宮切嗣は予想通り姿を消すらしい。奴が冬木港から出航したことが確認できれば、これで条件は全てそろう」
「にしても浮かない顔よな？」
「……いや、これはそれとは別件なのだが。ギルガメッシュ、お前ならどうする、例えばある品をめぐって値段の交渉していたのだが、到底支払えないだろうと思って吹っ掛けた値段だというのに、すかさず相手が耳をそろえて目の前に積み上げてしまったのなら？」
「よくわからんが、売ってやるつもりはなかったのか？」
「なかった。どっちかというとその相手が“力ずくで奪う”あるいは“盗む”という思考にたどりつくよう誘導しようと思っていた」
「だが、そ奴は言われたとおりの金を用意してきたのだろう？そこまでされたら売ってやるしかあるまい」
「そうだな」
綺礼は頷いた。うっそりとした顔に穏やかな微笑みが浮かびあがった。
「売ってやるしかないのだろう」

冬木大橋（後書き）

次回予告はしないことにした（笑）

形見分け（前書き）

ちょっと改行してます。
読みやすくなったかな？

形見分け

これはまだ言峰士郎の義妹が修道女の姿でいた頃の話である。

妹の還俗を三日後に控え、教会を去るための準備として士郎と綺礼は父、言峰璃正神父の遺品を段ボールに詰めていた。遺品の整理自体はすでに娘である綺礼本人の手で終了している。だからそれは整理というより、戸籍上は言峰璃正の養子となった士郎に義父である璃正神父のことを説明する儀式と言ってよいものだった。

父を物語る綺礼のその声は、尊敬している父親を説明しているとは思えないほど感情のこもらない淡々とした口調だったが、士郎には綺礼が本当に父を敬っていたのがわかった。

娘が語る璃正神父は信仰に生きた人だった。神を信じ、善であれというその教えに忠実に情熱的に歩み進んだ男だった。彼はたとえ挫折したことがあったとしても、その苦しみと怒りを新しいエネルギーとして消化出来る、そして前に進む動機と出来る男だった。

戸籍上の義父となる男を士郎は好ましく思った。これならば彼の息子を名乗る時も胸を張れるだろう。シャツの奥に押し込んだ彼の形見のロザリオをなでながらそう思う。

最初士郎は、生前つねに彼の胸元にあったというそのロザリオを受け取ることを辞退したのだが、綺礼に押し切られた。綺礼の胸にはもう母親の形見だというロザリオがかかっている。二本をつけるのはおかしいし、しまい込むのは父親に申し訳ないというのだ。

「でも産まれてくる子供に必要だろう？」

「ギルガメッシュがそれを許すとでも？　バビロニアの英雄王の逸話を知るものならば彼がどれほど神を嫌っているかわかるものでしょう。生まれた子供に洗礼はするつもりですが、アレが譲歩するのはそれだけです。それだけでも王にとっては破格の慈悲ですよ？

日曜の礼拝に連れて行くのも無理ですね。まあ、礼拝に来ないか

ら信心がないということでもないし問題にはならないでしょう。ちなみにご存知かもしれませんが、凛も桜も洗礼を受けています」
「そういやそうだった。遠坂家って信徒の家系だったっけ……」
「はい、そもそも遠坂家は隠れキリスタンの家系です。魔術ともその関係で接触したらしいですね」

荷物の整理が終わったので、二人はお茶をいれて休憩することにした。二人が飲む紅茶は士郎が入れた。士郎は以前とある貴族の屋敷で執事として働いた経験があり、紅茶をいれる技はプロの領域にある。優雅な仕草で温めたカップに琥珀色の液体をそそぐ兄を妹は感心した眼差しを注いだ。
それから紅茶とクッキーを持って二人で中庭のベンチに座った。

「見事なものですね……うん、温度といい、味といい、この茶葉の特徴をあますことなく出しています」
「お褒めにあずかり光栄。でもできれば「美味しい」って言って欲しかったな」
「申し訳ありませんが、私は何かを美味だと思ったことがないのです。多分好みというものがないのでしょう」
「……いや、でも好物とかあるだろう？　ほら中華とか……マーボー的な物とか？」
「中華ですか？　それは一時期は八極拳の修行のために中国に滞在していましたから慣れ親しんだ味ですが、好きというわけでは……。どちらかというと幼い頃父と巡礼のために巡ったヨーロッパ方面の料理の方がなじみ深いですね……？」
突然隣に腰かけた兄が手で顔をおおって震えはじめたので綺礼はびっくりした。
「あ、兄上？」

「……奇跡ってあるんだな」
「え？」
「綺礼」

突然がしっと肩をつかまれる。こちらを見つめる士郎はこの上もなく真剣な表情をしている。

「お願いだからこれから外食する時は俺を誘って欲しい。ぜひ俺と一緒に俺の選んだ店に行って欲しい。そもそも外食しないで欲しい。そして中華飯店にふらりと迷い込まないで欲しい。たのむ」
「……かまいませんが。もともと外食の習慣はないですし、これから子育てで忙しくなるのでますます縁遠くなるでしょう。兄上は外に食べに行きたかったのですか？　ならば父上がよく行っていたイタリア料理の店があります。そこの石窯で焼いたピッツァが美味しいらしいですが、今度行きますか？」
「ううん、お家でご飯サイコー」

ぐっと親指を立てる言峰士郎。一体何だというのか。何故そんな何かをやり遂げた男の顔をしているのか、綺礼にはとんとわからない。目の前の白髪の男は見えない何者かに感謝をささげている。あ、奇妙な踊りを踊りはじめた。

「……」

綺礼は話題を変えることにした。お堅い修道女である綺礼は、邪悪には耐久性があっても変態行為にはなれていない。

「さて、兄上。これからのことを話し合いましょう。間桐桜を間桐から連れ戻すにはいくつかの解決しなければならない問題がありますが、まずは間桐の事実上の当主、間桐臓硯です。彼は決して間

桐桜の解放を承諾しない。ならば間桐臓硯は死ななければならない」

ひとつ咳払いをしてから言峰綺礼は義兄にそう告げた。感謝の舞を舞い終わった士郎は普段の顔でうなずいた。

「それに異存はない」

「勝算は？　兄上一人であの怪物に勝てますか？　私はこのような身ですので助力は正直難しい。ギルガメッシュはあてにしてくださるな、アレは誰の思い道理にもならない男です。操ろうとすればその罪でこちらが危ない」

「ああ、そうだな、正直難しいな。あれから俺も成長したといいたいが、あの時の俺にはアーチャーの腕という反則的な武器があった。今の俺にはそれがない。つまり聖杯戦争の時より魔術師としては弱いんだ。情けないことだがな……。世界と契約すれば力が手に入るのだろうが、それだけはしたくない。死後“座”に納められれば桜のもとに帰れない。俺は桜に必ず帰ると約束したんだ。桜を救うために桜を裏切るのは本末転倒というものだ。……だから綺礼に期待している」

「おやまあ」

「言峰綺礼が楽しそうにしているから、何か俺が知らない解決法があるんだと思う。それに俺が気付かないから楽しいんだろう、綺礼？」

くすくすと修道女は笑った。

「ええ、兄上。解決法なら心当たりはあります。貴方の記憶の中、正確には貴方がかいま見た“アーチャー”の記憶の中に『固有結界』の行使の記憶がありました。兄上、貴方は固有結界が使えるのですよ。『無限の剣製（アンリミテッド・ブレイクワークス）』……認識したあらゆる“剣”を解析・製造・貯蔵する錬鉄の固有結界。発動のための言葉はすでに貴方の中にある

……」

「それは無理だ。たしかに理論としては俺はあいつと同じことができるだろうし、やり方は知っている。でも圧倒的に実力が追い付いていない。“正義の味方”になるために世界と契約までした“エミヤシロウ”ならばともかく俺には」

「足りないものは他から補う、それが魔術師。ええ、足りないのは魔力。ならば手はあります」

修道女はカソックの袖をまくりあげた。黄色人種特有の滑らかな薄い琥珀色の肌にびっしりと刺青に似た模様が覆っている。士郎は眼を見開いた。それに見覚えがあったからだ。

それは間違いなく令呪だった。かつて若き衛宮士郎の腕にも刻まれていた英霊を制する為の聖痕。

「それは……令呪なのか？　ッ、そうか、あいつが桜を治療した時につかった……！」

「そう、言峰の魔術刻印ともいえるこれは、かつての聖杯戦争で使われなかった令呪の集合体なのです。通常、サーヴァントを失ったマスターから令呪は消え去ります。だが上位者たる英霊に絶対命令を強制できるほどの代物がただ漠然と消えるはずがない。令呪はいったん聖杯によって回収された後、新たに再配布される。それでも使用されなかった令呪はこうやって監督役の元に……。今回使用されなかった令呪は、時臣師の二画、キャスターのマスターの三画、間桐の三画、私の二画ですが、私の令呪はまだギルガメッシュとつながっていますので、残りの八画と以前から存在する八画……計十六画の令呪がここに存在します。令呪はいわば無属性の純粋な魔力の塊なのです。その魔力の総量を想像できますか？」

そこでくっと綺礼が笑ったのは、間桐のマスターの令呪のうち二画が自分が彼に与えたものだったことを思い出したからだった。だ

が士郎はそれを知ることはない。彼女は兄となった男に全てを語るつもりなどないのだから。
自らの恩師の死についても、彼女は真相を話さなかった。遠坂時臣を殺害したのは間桐雁夜だと一般的には思われている。事実、時臣の遺体のそばに倒れていた妻、葵はそう思ってしまっていた。彼女は発見された当時すでに錯乱状態だったが、魔術の世界に生きる者たちは狂女となった葵の記憶を覗き見ることが出来た。その記憶に照らし合わせれば間桐雁夜には動機があり、実行すべき機会があり、サーヴァントという凶器を所有していた。疑う余地などありはしない。そしてわかりやすい容疑者の存在のために真犯人である言峰綺礼を疑う者は皆無であった。

「……これだけあれば固有結界を展開し、間桐邸そのものごと臓硯を殲滅することが可能でしょう。さあ、兄上、手を」
「い、いいのか、それは……大事なものなんだろう？」

士郎も魔術師の末席に連なるものである。魔術使いを名乗ってもその重要性を知らないわけではない。魅入られたように令呪を見つめ、おずおずと左手を差し出す。

「これは魔術刻印として機能しますが、結局は魔力の塊にすぎない。遠坂の宝石と同じです。使われるためにあるのです。……間桐桜を救ってやりたいのでしょう？」

かつて間桐雁夜に向けたのと同じ微笑みと同じ言葉で、修道女は義兄の顔を覗き込んで首を軽くかしげた。なにもかも見透かすような綺礼の笑みは甘く、貴方は正しいとをささやく悪魔のようだった。
子守唄のように優しい声色でラテン語の聖言を呟きながら、綺礼の細い指が士郎の左手の甲をなでる。士郎はもう抗わなかった。
鈍い痛みと共に十六画の令呪が一つ一つ綺礼から士郎の左腕へと

転写されていく。そこはかつて騎士王との絆が記されていた場所。その場所に新たな令呪が刻まれたのを士郎は見た。

「さあ、これで貴方は手段を得た」

「ああ……だが、間桐邸を襲撃するのか？　魔術の工房に侵入する危険性は代行者だったお前の方が知っているだろう？　それに間桐邸には桜がいる。最低桜を人質に取られるかもしれない。ここの世界ではどうかしらないが、俺の知る間桐臓硯は桜を操ることが出来た」

「その代行者として言わせてもらえば工房にこもった魔術師は貝のようなものです。周囲は硬いがこじ開けてしまえば中身は柔らかい。工房自体が魔術師を守る盾のようなもの、そして周囲を護衛に守られていながら、なお防弾チョッキを着て寝る者はそうそういません。“自分の工房に居る”という安心は一種の油断なのです。その油断している状態で殻ごと最大の火力で押しつぶすのが最善と思います。それから間桐桜に関しては、ちゃんと考えていますよ」

「うん、それで？」

「つまり魔術師は秘匿するものであり、世間に対する一般人としての顔を持たなければならないということです。間桐桜はちゃんと戸籍もある間桐家の住人であって、家畜ではありません。当然学校などに行かなければ怪しまれますし、遠坂家には不審に思われるでしょう。事実、彼女は小学校にちゃんと通っています。ならば間桐邸から彼女を一時期遠ざけることは可能でしょう。間桐桜と同じ学年の子供に幾人か心当たりがあります。一般人を装っているのだから、子供同士の遊びの誘いをすべて断らせるというのも問題がある。「あそこの家は娘を半ば監禁している」などと評判がたったらどうします？　事実だけにまずいですよね？　そして固有結界とは文字通り結界なのです。取り込まれた者が外部に対して干渉することはできなくなる」

「たしかに」

「間桐慎二を使うという手もある。どうやらあの子はまだ何も知らないようだ。ならばいかようにも使い道はある」
「慎二か……間桐臓硯を倒すことで、俺はこの世界の慎二を救ってやれるのかな」
「ええ、きっと。魔術の才能がないのに魔術師の家系に産まれてしまったのが彼の不幸です。それから解放されればもともと出来のいい子ですから」

しばらく己の思考に埋もれていた士郎は、やがて決意した表情で面を上げた。

「俺は間桐臓硯を倒す。……この令呪、使わせてもらう」
「景気よくどうぞ。使いきってもかまいません」
「ありがとう、綺礼。でも、本当にいいのか、全部って……桜の刻印虫を取り除くのにいくつか必要じゃないのか？」
「いいえ、兄上」

お手製のクッキーの最後の一枚を手に持って綺礼は艶然と微笑んだ。

「私、彼女の刻印虫を取り除く気など、まったくありません」

形見分け（後書き）

この話の士郎は桜ルートの士郎ですから、もちろん知らないままで終わったことがいっぱいあります。
遠坂時臣殺害の犯人、教会の地下聖堂の子供たち（スキャンダルなので聖堂教会が隠匿）、佐々木小次郎というアサシンが存在したこと、等。ギルガメシッユが前回の生き残りだという事もこっちくるまで知りませんでした。
その我々が知っていても士郎は知らない知識の中に「臓硯の本体は桜の心臓に寄生している」というものがあります。
……その事実なら原作の士郎はこの場面で知ったよという場合は誰か連絡ください（汗）

塞翁の幸（前書き）

朝、お気に入りは５００件だった……。投稿するためにマイページをみたら４９９件だった……。
喜ぶべきか悲しむべきか……。

塞翁の幸

『塞翁が馬』という逸話がある。

昔、中国の北方の塞に一人の翁が住んでいた。ある日、彼の飼っていた馬が逃げてしまった。周囲の人々は彼の災難を憐れんだが、占いを得意とする翁はこういった。

「これは幸いになるだろう」

数か月後逃げた馬は野生の馬を伴侶として連れて戻ってきた。それはそれは立派な駿馬だったので周囲の人々は翁を羨んだが、翁はため息をついてこういった。

「これは災いとなるだろう」

かくして彼の息子がその馬に乗ろうとして失敗し、大怪我をするという悲劇がおこった。周囲の人々は彼をまた憐れんだ。翁はいった。

「これは幸いになるだろう」

一年後、大きな戦が起こり、周囲の若い男たちは皆徴兵されていったが、怪我が癒えていない彼の息子は兵役を免れ死なずにすんだという。……このことから「最初は幸、あるいは不幸と思えたことも、最終的にどうなるかわからない」という状況を『塞翁が馬』というようになった。

……たしかに塞の翁にとってそれは幸であり、不幸であっただろう。しかし戦に駆り出されなかったことを塞の翁の息子は喜んだだろうか？　それはその戦がなんのために起こったかにかかっているだろう。もし、それがかつての騎士王が体験した様な『異民族の侵略から祖国を守る』などという、大切な者たちを守るための戦いだったのなら、彼の息子は戦場に馳せ参じられない己を責めたのではないか。愛するものを守るために周囲の若者たちが命をかけるのを、彼の息子はみじめな思いで見送ったのではないか。

塞の翁の幸が、彼の息子の幸になるとは限らないのだ。だがその

ことに気付く者はそういない、これはそういう話でもある。

間桐桜の体内に巣食う刻印虫を除去しないといったら、綺礼の兄はとても素晴らしい顔をしてくれた。そういわれることを半ば予想していたが、本当に言われるとは思わなかったという顔だった。

綺礼は少し愉快な気分になった。この兄はキイレゴトを本気でそうあるべきだと信じているところがあって、だから残酷な世界にいつも裏切られている。一瞥もされないことを“裏切る”と称することが適切ならばの話だが。

「わかってください、兄上が間桐桜を遠坂家にとどめ置きたいのなら、彼女は不具者にならなければならないのです。良質の魔力回路と魔術特性をもつからこそ彼女は間桐に養子にやられたのです。間桐から戻ったとてそのままならば新たな養子先をあてがわれるだけ。それが近隣とは限らないし、最悪ではそのまま二度と姉と会えないこともあり得る。ならば桜を間桐から解放すると同時に、桜の魔術師としての“価値”を徹底的に貶めないとならないのです。一番手っ取り早いのは魔術回路を傷つけることですが、魔術回路は肉体と密接にかかわっています。魔術回路を傷つけると肉体も傷つく。それは兄上の本意ではないでしょう？　ゆえに刻印虫は取り除かない……桜は間桐の魔術の属性を得たまま遠坂に戻った方がいい。魔術の属性を変えるなどいう大掛かりな改良は、二、三年で完了する術ではない。おそらく桜はまだ完全に間桐の属性になっているわけではないと思います。その状態で、また他家に養子に送られ、その家の魔術の属性へと変換させるなど、それこそ優秀な魔術特性など価値がなくなるくらい歪むというもの……。魔術師は合理性の塊のようなもの、多大な労力を使って得られるものが凡庸な魔術師でしかないのなら、最初から求めたりはしません」

「……やはりそうしなければならないのか」

士郎の溜息は苦痛に満ちていた。

「兄上、刻印虫自体はそんなに体に害があるモノではありません……その刻印虫の主人が自分自身である場合ならば。他人を主人とする刻印虫だからこそ宿主に害をもたらすのです。間桐臓硯が死ねば刻印虫は主を失い、宿主を新たな主とするでしょう。だから刻印虫自体は問題ないのです。寄生虫と違って成長したり繁殖したりはしませんしね」

もっとも間桐雁夜のように短期間で体中に刻印虫をうえつけられたのなら、異物への拒絶反応で命の危険もあるだろうが、桜はもともと間桐の魔術師を産み出す胎盤として間桐が欲した少女だ。間桐臓硯は桜を殺さぬよう最善の注意を払っていることは疑いない。

紅茶の最後の一滴を飲み干した綺礼はにいっと嘲笑するような笑みを浮かべた。

「それとも兄上は桜を元に戻してほしいですか？　お望みならば遠坂の連中が“これはよそに高く売れるな”と喜ぶほど完璧に“修復”してみせますが？」

「……意地悪なこと言うなよ。そんなこと、俺が望むわけがないだろ」

士郎の望みは凛と桜の姉妹が一緒に暮らせるようになればいいというささやかなものだというのに、それをかなえるためには桜が魔術師の世界において“欠陥品”の烙印を押されることを必要としている。魔術に傾倒する者たちが皆少なからず持つ“役に立たないモノ”へそそぐ侮蔑の感情を士郎はよく知っている。“エミヤシロウ”はある魔術以外は無能もいいところの魔術師だったのだ。

士郎は桜を幸せにしたい。それは桜が家族の元に戻ることで可能

だと思っていた。だが彼女の魔術師としての将来を奪うことでしか、彼女を今現在の地獄から解放できない。

今はいい。桜は家族の元に帰るべきだ。それは確信できる。

だが、将来は？　桜はどうやっても神秘の世界から逃れることはできない。かつての遠坂時臣の言葉ではないが、優れた魔術特性を持つ者は魔術とかかわらずに平凡に生きていくことはかなわないのだ。その逃れられない世界において、自分が侮蔑の対象だということは、どういうことか？　士郎はかつての親友だと思っていた男を思い出さずにはいられない。

間桐慎二……間桐の直系でありながら魔術回路を持たないで生まれたがゆえに、義理の妹桜に家督を奪われた少年。彼は決して無能な男ではなかった。周囲の人間が妬むほどの才能に恵まれていたし、天才肌だといってもよかった。そのまま表の世界に生きていれば、彼はエリートと呼ばれる存在になれただろう。

だが彼は魔術師の名門の嫡男として生を受け、魔術師になろうとした。しかし魔術師としては無能どころか、欠陥品であった。さっぱりとした性格の遠坂凛さえも彼が魔術師を名乗ることに嘲笑を浮かべた。魔術師としての彼は誰にも何も期待されていなかった……身内にさえも。その現実がどれほど彼を苦しめ、歪めたのか、“正義の味方”を諦めた言峰士郎には痛いほどわかる。

“この世界の誰が『正義の味方』になれたとしても、お前だけはなれない”……そう“衛宮士郎”がいわれたのなら、その言葉を受け入れることが出来ただろうか？　出来たはずがないのだ、だから士郎には慎二を憎むことはできない。桜にした仕打ちに憤っても……。

「うふふ、兄上が葛藤しながらしぶしぶ納得しようとして、やはり納得できなくて苦しんでいる様を見ていると心の中に温かいものが満ちていくようです」

そして綺礼にとっては兄の思い違いが心地よい。兄は桜のことば

かり考えているが、桜が刻印虫を身体に巣食わせたまま遠坂家に戻った時、その事実に傷つく者が他にいることを士郎は気づいているのだろうか？　綺礼の師である遠坂時臣は同等の魔術特性をもつ姉妹を、己の後継者と他家への養子に分けた。それは二人の素質に差があったからではなく、ただ単に姉の方が宝石魔術を扱うのに適していたという、ただそれだけのことだった。……端的にいえば、家を出されるのはどちらでもよかったのだ。決定は努力などという行動の結果ではない、生まれ持った素質という本人のどうする事も出来ないことで決まってしまったのだ。

そのことを敏い凛が知らないはずがない。“自分だった可能性がある”……それだけで魔術師として欠陥品となってしまった妹に罪悪感を持つには十分だ。そして魔術師であることに誇りを持つ彼女は、望まずとも必ずこう思ってしまうだろう……“私じゃなくて良かった”と。

そんな自分に気付いた時、かわいいあの子はどれほど自分自身を嫌悪することか。その時を思うと綺礼はとても楽しくなる。この兄はなんて綺礼を愉快な心持にさせてくれる男なのだろう。

綺礼は兄の頬を指でつんつんとついてみた。いつか新都の駅前にある街頭テレビでどこかの女優がやっていた行為だ。その時は何が面白いと思ったのだが、やってみると結構悪くなかった。

「……それは“幸せ”ってやつだよ。よかったな。頬、つつくなよ。ああ、なんかそんな顔で笑うシスターがいたような気がする。聖堂教会の聖職者って皆こうなのか……」

「そんなシスターが？　ぜひその人物と語り合ってみたいものです。この世界にもいるでしょうか？」

「やめろ、切実にやめてください。そして多分いません……いないはずだ、うん」

士郎は頭を抱えてから、何かに急に気がついたように綺礼を見た。

「そういや、綺礼って昔結婚していたんだよな？」
「なんですか、急に？　結婚はしていましたよ、二年で死別しましたが。よく知っていましたね。凛に聞いたのですか？」
「いや、向こうの神父が結婚していたことを向こうの遠坂に。ええと、その時に……その、子供とかいたのか？」
「いいえ、夫になった人は結婚した当初から病弱で、端的にいえば余命数年という状態だったもので、夫婦生活はハッキリ言って無いも同然でした。そんな状態で妊娠など出来るはずがないでしょう？」
「そっか……」

はあっとため息を士郎はついた。綺礼はぽんと手を打ちつけた。

「なるほど、つまり向こうの私には子供がいて、それが件のシスターなのですか？」
「う、なぜわかった！？　い、いや、確信があるわけじゃなくて、そうじゃないかと俺が思っていただけだ」
「性格悪かったのですか？　さぞやいじめられたのでしょうね」
「……なんでそんなきらきらした目で俺を見るかな……」

綺礼はカソックの上から膨らんだ腹部をなでた。

「なるほど、ギルガメッシュは男の子が生まれると決めつけていますが、娘が生まれる可能性もあるわけだ。おもしろいな、まだ胎内にいる胎児は封を開けていないワインのようなものという訳ですか。……コルクをぬいて口に含むまでその真価はわからないのに、人々はその前にそれの値段をつけなければならない。その一本がどのように扱われていたかで同じ当たり年でもワインの味は大分違うだろうに……過酷な環境に晒されて劣化したワインに大金を投じて

損をすることもあるというものだ」

そう、“そうなるだろう”と予想したことが本人のあずかり知らぬことでひっくりかえるのは、よくあることだった。今回の聖杯戦争のマスターたちの敗因の大部分はそれに尽きるといってもいい。

例えば遠坂時臣にとっての“衛宮切嗣”……もし彼がいなかったのなら、彼の愛弟子は彼を裏切ろうなどと考えなかっただろう。淡々と聖堂教会からの使命をはたすべく、忠実に彼に従い、命すらも掛けただろう。

そしてケイネス・エルメロイ・アーチボルトにとって　の“ウェイバー・ベルベット”……もし彼が征服王の聖遺物を盗み出していなかったのなら、彼は無事征服王のマスターとなっただろう。傲慢な魔術師と豪快な王は最初こそは反発しあうかもしれないが、王の深い度量は魔術師の頑なさを乗り越えるかもしれない。そうなれば一流の魔術師をマスターにもった征服王は容易に聖杯に届いたかもしれない。

そして衛宮切嗣にとっての“アインツベルン”……そもそも聖杯を汚染したアンリ・マユという英霊はアインツベルンが呼び出した英霊であった。それが聖杯に取り込まれた際の異変を、聖杯の担い手であるアインツベルンは本当に知らなかったのか？　そのようなことはあるまい。直接かかわっていない間桐臓硯すら異変を感じて四回目の聖杯戦争は傍観に徹しようとしていたのだ、敗北した英霊が吸収される小聖杯の作成をまかされているアインツベルンが聖杯の汚染に気付いていないはずがない。だが衛宮切嗣はもとより小聖杯であるアイリスフィール・フォン・アインツベルンすらその事実を知らなかった。……利用するつもりが利用されていたということはよくあることだが、まさに衛宮切嗣の場合がそれであろう。千年の純血を守ってきたアインツベルンが外来の魔術師を受け入れた理由、必勝を目指しながらイリヤスフィールという新たな小聖杯を作成した理由。それと聖杯の汚染をあわせれば、おのずとアインツベ

ルンの思惑は見えるだろう。
アインツベルンの目的は間桐臓硯と同じような“観察”であったといえるのではないか……ならば毒ガスが満ちているかもしれない洞窟に入るのは、人ではなく、鳥かごに入れられた小鳥である。そして役目をはたして瀕死になった小鳥が舞い戻って来たとしても、それに餌を与え続ける必要性など人は感じない。

「ああ、兄上のおかげでいい案を思いつきました」

にっこりと綺礼が笑ったので士郎の顔はひきつった。

“言峰綺礼の提案”が俺にとって“いい案”だった試しがないんだが」

「私を向こうの神父と同一視するのはそろそろ止めなさい。間桐臓硯を殺しても周りの人たちが「しかたがなかった」といってくれるようなネタが欲しかったのですよ。なんといっても今は聖杯戦争中ではありませんからね。間桐臓硯が死んだら犯人探しが始まります。私は兄上と違って桜を救うために何一つ失う気はありません。あの怪物を処分したことで処罰を受けるなどまっぴらです……ゆえに、間桐臓硯には『悪』になって欲しかったのです。ほら、自分が正義の側で、相手が悪なら、それは“相手にひどい事しても許される”ってことですものね？」

「……ノーコメントで」

元正義の味方はいやなこと思い出したという風情で顔をそらした。綺礼は空気を読んだりしなかった。

「そう、私は世間的に間桐臓硯を『悪』と認定させることを考えていたのですが、そんな必要はなかったことに今気付きました。私たち以外の誰か、たった一人でも間桐臓硯を悪と判断し、それに懲

罰を与えんと行動してくれるなら、私達はそれに便乗するだけでいいのです。きっとその某は臓硯に勝てないでしょうが、勝つ必要はそもそもない。間桐臓硯を害そうとしたという、その事実だけあればいい……我々は某が破れた直後に間桐臓硯を滅ぼし、その功績は某に謹んで進呈すればいいのです。いわゆる「その手に凶器のナイフを握らせて」というやつですね。兄上、お茶をもう一杯いれてください。ここからとても長い話をするのだから」

綺礼はカップを士郎に渡すとクッションを持ち込むために室内へと入って行った。

そして士郎は間桐雁夜という男の話を聞いた。

塞翁の幸（後書き）

またしばらくどう書けばいいか考えます。7月中には出産したいものです。

日傘と少年（前書き）

私生活でショックな事がありました……。
たとえていうなら「落花生を作ろうとして何の疑いもなく畑にピーナッツ（きっちり炒ってある）をまいていた」……そんな感じのボケをかましました。羞恥心は本当に人を無気力にしますね……。
ちょっと立ち直ったので短いの投稿。迷いながらやっております。

日傘と少年

北を海、他の方向を山に囲まれた地方都市冬木には、その地形にふさわしく坂道が多い土地である。当然山脈側へ近付くと坂は急になり、民家は少なくなるうえに周りの樹木たちが自然の壁となることもあって、それはあたかも緑のトンネルのようだった。

そのトンネルの中を一人の少年が歩いていた。十歳ぐらいの赤毛の少年である。冬木市市立小学校の校章の入った水着用ビニールバックを持って、素足にスニーカーを引っかけた少年の乾きかけの赤毛からは塩素の匂いが強くしている。

夏休みの最中、彼の通う小学校のプールは週に何日か生徒たちに開放されていて、彼は友人たちとその恩恵を堪能した帰りだった。

「あちぃ……」

その口には溶けかけのアイスキャンディがくわえられている。がりがりと水色のアイスキャンディをかじりながら、少年はうめいた。

「ん、やっぱ夏はガリガリ君にかぎるな。こんな日にバニラとか食べたがる奴の気がしれん」

彼は誰に聞かせることもない独り言をつぶやいた。

この少年の名を、衛宮士郎という。

士郎はゆだるような暑さの中、できるだけ日陰を選んでのそのそ歩いていた。午前のほとんどの時間を、友人たちとのプールでのばか騒ぎに費やしたので疲れていた。腹につめこんだ弁当を消化するのもだるい感じである。

「……ったく、うちの爺さんはいつ帰ってくんだよ。もう夏休み

終わっちゃうぞ」

士郎が今たどっているのは、自宅への道ではなく、家族同然に付き合っている藤村家への帰路である。現在、義父が不在なため彼は義父の友人である藤村雷画の家に預けられていたのだ。士郎としては義父が家を空けている間は自分が自宅を守るつもりだったのだが、周囲の大人たちがいまだ小学生でしかない少年の一人暮らしなど許すはずがなく、士郎は姉がわりの藤村大河に襟首つかまれて藤村の家に連れて来られたのだった。

士郎にとっては面白くないことだった。もっとも藤村の家が嫌なわけではない。

藤村の家は楽しいところだ。士郎と義父切嗣が暮らす武家屋敷も広いが、藤村の家はもっと広い。おそらくは冬木最大の面積を誇るだろう。例えば衛宮の家には土蔵が一つあるが、藤村の家にはそれよりも立派な蔵が三つある。橋のかかった池もある。高そうな鯉もいるし、使用人たちが住んでいるアパートのような離れもあるのだった。そして二人暮らしである衛宮家と違って、こちらはなんといっても人が多い。主に屈強な男衆がいつも何人か庭先や玄関先をうろついていたり、旅館にいるような着物姿の女中さんが何人もいたりする。そして、なんと藤村家の台所には料理長までいる。もちろん料理“長”というからには彼には部下の料理人が何人もいるのだった。

そんな藤村家は、とどのつまり冬木に代々根をおろす極道の家系であった。冬木市の大地主といえば遠坂家であるが、藤村は冬木市以外にも土地を持ち、遠坂家の所有する土地に立ち並ぶビルに入っている店にも少なくない影響を与えているのだった。本人たちは極道家業はもう廃業して真っ当な仕事をしているというが、それを信じる冬木市民は子供でもいないだろう。士郎も信じていない。

けれども士郎は藤村の人たちが大好きだった。極道と言っても一般の人達に無体はしないし、皆優しい。いつも誰かがいる賑やかな

場所で、旅館のような大広間で、皆と食べる御飯だって嫌いであるわけがない。でも士郎は出来る事ならば今すぐに自分の家に帰りたかった。義父が帰ってきた時、お帰りなさいと言ってやるためにはちゃんと衛宮の家にいる必要があると思ったのだ。もっとも姉がわりの「士郎がここにいることは切嗣さんだって知っているんだし、帰ってきたら切嗣さんはまっすぐここに士郎を迎えに来ると思うな」という言葉は、まったくもって反論出来るものではなく、どうしてそんなにも衛宮の家に帰りたいのか、士郎の心の中のもやもやは本人にもよくわからないものだった。

（一緒に連れて行ってくれって言えばよかったのかな……。だって……俺と爺さんが家族になって初めての夏じゃないか）

士郎は最初義父に素直に強請るつもりだったのだ。二人でどこかに行こうと。だが古ぼけたボストンバックに荷物をつめる切嗣の横顔は「ちょっと前に住んでいたところの知り合いに会ってくるよ」という軽い口調に反して真剣なものだったので、だだをこねることは出来なかった。切嗣が以前住んでいた場所を士郎は知らない。誰に会いに行くのかも知らない。そして義父がどうしてこの冬木に住もうと思ったのかも知らないのだった。以前それとなく聞いたがはぐらかされてしまった。

（爺さん、どこにいったんだよ……。ちゃんと戻ってくるのかよ）

士郎とて、それを気にすることが意味のないものだということは分かっている。大切なのは現在であり、過去は過ぎ去った時間でしかない。現在、士郎と切嗣は親子だ。血が繋がっていなくてもまぎれもない父と子だと士郎は思っている。まだ一年ほどしか共に過ごした時間はないが、自分と切嗣の間には確かな絆がある士郎は確信している。だが切嗣はまるで記憶を失った士郎と同じであるかのよ

うに、過去を見せない男だった。

「ん……？」

大分崩れかけているアイスキャンディを落とさないように苦心していた士郎は、目の前の道の真ん中になにか白い物が転がっているのに気付いた。小さく丸いそれは、士郎の見るところ開いたままの傘であった。

「うわ、危ないな。こんなところに傘があったら車がぶつかるじゃないか」

そこは一際大きな樹木の影になっている場所だったため、士郎は近くに来るまでその存在に気付かなかったのだ。自動車も通る道に障害物が転がっていたことに士郎は慌てて日傘に近づいた。拾い上げてみれば、日傘は近年めったに見ることのない木製の軸を持っていた。品物自体は古いものらしく、いささか変色しているようだが、大事に使われていたのだろう、傷などはほんの少ししかない。傘に貼られた布も光沢のある上品な純白で、布の縁に細かい銀糸の刺繍が施してあり、一目で高級品だとわかった。

士郎としては不法投棄されたゴミを拾ったつもりだったのだが、手の中にある物は到底捨てられたとは思えないアンティークである。士郎は思わず、あたりを見回した。捨てられたものではなく、落し物だと思ったからだった。それなら誰かこれを探している誰かが側にいると思ったのだった。

「あ、れ？　……ッ！」

士郎が見つけたのは探し物をしている人間ではなかった。“それ”を見つけた士郎の口元からアイスキャンディの最後の欠片がぽろ

りとこぼれ落ちた。
道路脇に植えられた大木の作りだした木陰に横たわっている『それ』は、どんなに自分の目を疑っても具合が悪くて倒れている人間に見えた。ふんわりとした純白のワンピースを着た成人女性に違いなかった。
士郎の背筋を冷たい悪寒がざあっと走り抜けていった。少年は慌てて“彼女”に走り寄った。こんな道端で大の大人が寝転がっているなど常時ではない。異臭はしないから出血はしていないだろうが、それでも交通事故かもしれないし、何かの発作かもしれない。件の日傘は彼女の持ち物なのだろう。倒れた時に手から落ちて車道の真ん中まで転がって行ったのだ。

「あ、あの、大丈夫……」

恐る恐る士郎はその女性を覗き込もうとしたが、その顔を見る前に不自然に膨張した腹部が士郎の視界に飛び込んできた。妊婦、という単語が脳裏に浮かびあがるより先に士郎は心の中で絶叫した。

（妊婦さんだよ、お腹すごく大きい！　ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ……これってあれか？！　“う、産まれる”なパターン！？）

通りすがりの小学生にはこの展開はきついではないか。思わずこの間テレビで見た映画を思い出した。いや、ここは嵐の中の山村じゃないので「お前がこの子を取り上げるんだ」などと無理なことを強制したりされない、多分。日々、義父のように誰かを救える人間になりたいと思って努力している士郎であるが、この状況は想定外である。迷子の幼児とか重い荷物を持て余している老人なら大歓迎なのに。

「き、救急車ッ」

士郎は慌ててあたりを見回した。公衆電話を探したのだが、もちろんこのような所にあるはずがなかった。携帯電話の普及と共に公衆電話の存在はだんだんと姿を消しているということもあるが、それでなくてもここは比較的山奥である。大部分は車で通り過ぎるだけだ。

「だ、大丈夫ですよ、俺、１１９してきますから、待っててくださいね」

具合の悪い妊婦さんを安心させようと士郎は女性に駆け寄って彼女の顔を覗き込んだ。

倒れている女性は薄い琥珀色の肌にびっしょりと汗を浮かべて、堅く瞼を閉じている。しかし士郎が覗き込むと、気配を察したのか、ゆっくりとその瞳を開いた。焦点のあっていない眼差しが空をさまよい、やがて士郎を捕らえた。

日傘と少年（後書き）

何の前兆もなく少年エミヤシロウ登場。
彼が出会った妊婦が誰かは察していただけると思っております（笑）

正義の対価（前書き）

士郎が正義の味方という言葉を知ったのは切嗣の死の夜なのか？
タイガーの昔話の中で士郎が学校の作文で「正義の味方になる」とか書いていたとか言っていたと思う。
後、勿論言峰母は捏造。

正義の対価

「え……」

士郎は茫然とその女の眼差しを受けた。夜の海のような深い黒だった。全ての光を吸いこんで、心まで吸い込まれそうな瞳だった。己の心臓にずぶりと見えないナイフが埋められていく幻影を少年は見た気がした。切開され、取り出されている、何かを。

だめだ、ととっさに思った。それはだめだ。止めてくれ。つきつけないでくれ。嫌だ。怖い。士郎はこの名前も知らない女が怖い。

「あ……」

士郎は思わず立ち上がって彼女から距離を取ろうとした。しかしお人よしの少年はすぐに自分の態度に罪悪感を覚えた。なぜ自分がそのようなことをしたのかはわからないが、こんなことは初対面の人間に対する態度ではない。

「え、えっと……」

巨木の木陰に横たわる女は熱のこもった瞳で黙って士郎を見つめていたが、やがてあきれたようなため息をついた。その仕草が士郎を緊張から解放してくれた。士郎もまた安堵の息を吐いた。

「帽子」

女はぽつりと呟いた。

「え？」

「ちゃんと帽子をかぶりなさい、少年。こんな暑い日に無防備に外出するものではない。見るところ日焼け止めも塗っていない。紫外線を甘く見てはいけない」
「なんでさ」

士郎は憮然として頭をたれた。女の言っていることは正論だが、そもそもその炎天下に道路で倒れているような人物にいわれたくはない。あんまりなそのずれっぷりに先ほどまでの意味のわからない恐怖は霧散してしまっていたのだが、士郎は気がつかなかった。それを知ってか知らずか、女は少し苦笑を浮かべた。

「なんだとはなんだ、失礼な。私の紫外線対策は完璧だった……ちゃんと日傘も」

そして士郎の手の中にある折りたたまれた日傘を見つけて、ああと息をついた。

「拾ってくれたのか、ありがとう。車にひかれたらどうしようかと思っていた。しかし拾いに行くのも億劫で……それに起き上がったら“水”が漏れてしまうから」
「水？　あ、あの、あのさ、具合悪いんだろ？　俺、今救急車よんでくるから」
「いいや、必要ない。これは具合が悪いのではないのだ。ちょっと“破水”しているだけだ」
「ハスイ？　それ、大丈夫なのか？」
「大丈夫、胎児を包む卵膜がやぶれて中の羊水が漏れ出ているだけだから。問題ない」
「よくわからないけど、それ、絶対大丈夫じゃないぞ！？」
「問題ないといっているのに、聞かない少年だ。ちゃんと家に連絡入れたからあと十分もすれば迎えが来る。そうすれば病院に連れ

て行ってもらえるから大丈夫だ。……ああ、予定日までまだ大分あったというのに、このような時に産まれてしまうのか？　まったくありとあらゆるものがとことん邪魔してくれる」

しみじみとした独り言を吐いてから、彼女は全てに興味を失ったかのように瞳を閉じて再び沈黙した。まるですでに士郎が立ち去ったかのような振舞いに、士郎はあっけにとられて彼女をまじまじと見つめた。

「お、おい……？」

おろおろと声をかけてくる小学生に、目を開けた女は鬱陶しそうな視線を投げつけた。

「なんだ、まだ何か用が？」
「なんでさ！？」
「大丈夫だといっている……君にそこにいつまでも居座られると迷惑なのだが。早々に立ち去ってくれると嬉しい」
「出来る訳ないだろうッ、俺、迎えが来るまでここにいる」
「……そうか。では好きにしろ」

聞き分けのない子供の我儘を、あきらめと共に受け入れたような女の態度には反感を覚えたが、士郎にはいわれたとおりに彼女をこのような所に寝かせたまま立ち去るという選択肢は最初からない。少年は横たわる女の横に座り込んだ。

「……」
「……」

眉間にしわを寄せて自分を睨みつける少年に女は再びため息をつ

いた。

「……少年」

「衛宮士郎」

「……」

「俺の名前。衛宮士郎。少年じゃない」

「そうか、では士郎少年。迎えが来るまで退屈なので、何か話でもしないかな？」

「……いいけど」

「では将来の夢でも語ってくれ。小学生らしく。四百字で」

「原稿用紙一枚ってことか……？　いや、いいけど、どうして将来の夢」

「一応これで母親になる身なのでな、近頃の子供がいかなる希望を未来に見るのか気になるのだよ」

「そおかぁ？」

なにか展開に唐突なものを感じた士郎は首をかしげたが、反対する確固たる理由もないので、つらつらと思っていたことを話し始めた。

自分を救ってくれた義父を尊敬していること。彼のように誰かを助けられる人間になりたいと思っていること。……義父が魔法使いであることはいえない。誰にも内緒だと誓ったのだから。

「なるほど」

嗤う様な面白がるような微妙な表情で、少年の夢を聞いていた女はくすりと笑みを浮かべた。

「つまり君は“正義の味方”になりたいのだ」

「正義の味方……？　うん、それいいな。たぶん俺がなりたいの

はそういうモノだと思う」
「だが困った。それは困難な道だ」
「わかっているよ。爺さんも言っていた。“誰かを救うことは誰かを救わないこと”だって……全ての人間を救えるなんてことはあり得ないって。でも俺は」
「違うよ、士郎。私がいっているのはそうではない」
女はいまだ士郎が握りしめているアンティークの日傘を見つめていた。
「その日傘は母の形見なのだよ。私の母はね、士郎、私を産んだことで命を落としたのだ」
突然の言葉に士郎がびっくりしていると、彼女はやわらかい微笑みをうかべて軽くうなずいた。
「別に驚くことではない。どんなに医学が発達しても難産で命を落とす女がいなくなることはない。……だが母の場合は少し特殊で、妊娠初期に己が難病であることがわかってね。子供を中絶して治療に専念すればまだまだ生きることが出来たのだが、“私”を産むことを優先して投薬を拒絶したのだ。だから出産で死ぬことは母自身が自分で選んだ道だと言える……君は母の行為を素晴らしいと思うかな？」
彼女は士郎から受け取った純白の日傘を弄びながら淡々と死んだ母親のことを語った。
「俺には分からないけど、お母さんは……お姉さんのこと大切に思っていたと思う」
「そうだね。きっとそうだ。彼女は自分の正しいと思ったことに

命をかけられる素晴らしい女性だった。私はそういう母を持ったことを誇りに思わなければならないのだろう」
「……思えないのか？」
「さて、どうだろう。私はその事実を父ではなく心無い他人に教えられた。彼はいった。“お前は母親を殺して産まれてきたのだ”と……。その時、私はそこまで母に愛されていたことに感動したと思うかな？」
「……」
「君の望みが難しいといったのはそういうことだ。母のしたことは素晴らしいことだ。だから私は彼女を責めることが出来ない。“貴女を犠牲にしてまで産まれてきたくなかった”などと口が裂けてもいえない。……たとえ本当はどう思っていても」
「……だって、それは」
「君は誰かを救える人間になりたいといった。だから聞こう、エミヤシロウ……君が救えば救われた者は真実、幸福になれるのか？　もし君が誰かを救うために何の代償も払わないのならそれも可能だろう。だがその救いのために君が傷つくのなら、それは君だけではない、その傷の“理由”となった人物の罪となる……君は、他人が傷つき、その“原因”が自分であると知ってその事実を受け入れられるだろうか？　その“借り”はどうしても返さずにはいられまい？　ほら、君の理想はもう破綻している。そんな心持で幸福になれるはずがない」

士郎は黙り込んだ。反論する術など士郎にはない。

「“救う”という行為はいわば施しだ。与えられた者を自動的に乞食にする。施されて生きるくらいなら自分の無力さを噛みしめて死にたいと思う者には侮辱でしかない……。だが君はその願いをかなえてやるつもりはないのだろう？　だったら君たちは敵対するしかない。……誰かの味方になりたいのに、その“誰か”の敵になっ

てしまうのだ」

女の眼差しは憐れみに満ちていて、士郎を落ち着かない心持にさせた。

「……だって、それは」

士郎は弱弱しく首をふった。それほど口達者でない士郎に出来たのはそんなことだけだった。

本当は、反論したい。怒ってそんなことはないと怒鳴りたい。俺は切嗣に助けられて心の底から嬉しかったのだといいたい。自分を救った時の切嗣の笑顔に自分まで報われたかのようになったのだと主張したい。だが言ったところでこの女はまた微笑むだけだろう。それでお前は真実救われたのか、その心は自分だけが救われたことは罪だと叫んでいないかと。

そうしたら士郎は“叫んでいる”と答えなければならないだろう。あの大火災で士郎は多くの人を見殺しにした。その結果衛宮切嗣に救われた。自分だけが救われたということは士郎の心に大きな傷を残している。その事実から士郎は目をそらせない。

ならば、それは。

……それこそが“誰かに救われて、幸福になって終わる”という結末などあり得ないという何よりの証明ではないのか。

苦悩する士郎を女は水溜まりでもがく昆虫を面白がる子供の表情で眺めていたが、やがてやさしい指先が汗に濡れた少年の髪を絡めた。

「ああ、迎えがきたようだ」

やがて士郎の苦悩など素知らぬ顔で、女がつぶやいた。

「え？」
「士郎、もしも君が君の望みをどうしてもかなえたいのならば、君はそのために対価を支払わなければならない……。そしてそれは“相手に対価を払わせる”ことでもある。助けるのはいい、だが“救い”という餌を施すな、それだけが救う者と救われる者とを対等にするのだから」

なんのことかと士郎が問う前に、彼の耳に凄まじいエンジン音とタイヤの摩擦音が聞こえてきた。慌てて後ろを振り返れば淡い色の軽自動車が猛スピードで士郎達のいる木陰につっこんでくるところだった。制限速度、なにそれ美味しいのとばかりに爆走するその軽自動車は神業のドライブテクニックで士郎達の元にギリギリで停止し、それから失禁しそうなほどの驚愕と恐怖で硬直している士郎を、これまた乱暴に開いた車体のドアが跳ね飛ばした。

「おおお、我の子は無事か！？」

中から飛び出て来た人物は衝撃に打ち崩れる士郎を何のためらいもなく踏みつけて、一目散に妊婦の元へと駆け寄った。痛みに悶える士郎は思った。ああ、お腹の子のお父さんなんだな、混乱している、無理もない……と。お人よしすでに極まれり。

「慌てるな、大丈夫だから。ただの破水だから」
「しかし、う、産まれるのであろうが！？」
「うん、産まれる。多分」
「ならば今すぐ病院へいくのだ……！」
「……だからそのために呼んだのだが。ああ、抱き上げてくれ。立つと羊水が漏れてしまうから」
「うむ」

なにやら金ぴかしているお父さんは、恐る恐ると言った感じでお母さんを抱きあげると、そっと軽自動車に彼女をのせようとして、うずくまっている少年に気付いた。

「なんだ、貴様は？　そんなところで何をしている？」

「……」

心底不思議そうな金ぴか男にちょっぴり殺意がわいた士郎だった。多分この男は自分を力いっぱい踏みつけたことなど気付いていなかったのだとわかった。

「お前が来るまで私を見守ってくれていた親切な少年だ」

「なんと、我の女が世話をかけたか、御苦労。駄賃をやろう。これでガリガリ君でも買うがいい」

腕の中の女の説明で状況を察したらしい金ぴかはごそごそと穿いているジーンズの後ろのポケットからマネークリップに挟んだむき出しの紙幣を取り出すと、唖然とする士郎の前にそれを捨てるかのように放り投げ、さっさと車に乗り込んでしまった。

「え？」

思わず地面の高額紙幣の束を見降ろしてしまった士郎の隙を突くかのように、軽自動車は来た時同様、神業的な急発進で道路を逆走していった。

士郎はその光景を茫然と見送るしかなかった。何もかも突然すぎてどう反応していいかわからなかった。

「なんだったんだ、今の？」

足元の紙幣の束だけが今の出来事が現実であると示すだけの静寂の中で、士郎はいつまでも立ち尽くしていた。

正義の対価（後書き）

次回、出産！
そしていよいよ、素人だからこそできる「秘技・実は裏設定はこうだったんだ、書いてなかっただけで」が発動します。
いや、伏線はちゃんとはっていたんだ。
感想の返事の中でだけどね！

冬木、ある男の死（前書き）

いきなりだとわかっている。
だが説明する気などない！

そして綺礼さん、ただ今出産中。
描写はない。

冬木、ある男の死

その日、一人の男が死んだ。

とうとうおしまいの日が来た。

いつか来るとは思っていた。ずっとその時が来るのを恐れながら生きてきた。

ただうずくまって臓腑をえぐるような恐怖に耐えるだけの人生だった。

最初に恐怖というものを知ったのは、いつだったろうか。間桐鶴野にはわからない。恐怖は常に己と共にあった。幼い頃から粉雪に埋もれるように怖れは彼の中に降り積もっていった。

自分の“父”を名のる老人がもはや人ではないと知った時も、自分が将来の夢など考える自由さえない身の上だと悟った時も、同じ境遇にいたはずの弟が彼を置き去りにして逃げおおせた時も、自宅の地下の暗闇で己が息子を産んだ女が蟲に食われていったのを見せられた時も。

（かわいそうに、のう鶴野。こうなることが分かっていたのに、この女は息子を連れて逃げようとしたのよ。泣きながら見逃してくれと懇願されたわ。魔術回路のない子など間桐には必要なかろうと。消えて二度と戻らない、どこか遠くで母子ひっそりと暮らさせてくれと……見捨てられたなあ、鶴野よ）

あの時も、心底楽しそうに語りかけてくる“怪物”……父、間桐臓硯の隣で吐き気をこらえながら蟲に食われていく妻だった女を見ていた。

“見捨てられた”……そうだ、彼女は自分を見捨てたのだ。弟のように。このおぞましい蟲であふれかえる飼育箱の中から逃げ出して、自分たちだけが幸せになろうとした。

愛して、想い合って結ばれた女ではなかった。年々衰退していく間桐の力をなんとか復活させようと、ただそのためだけに金で買われてきた女。ある魔術師が戯れで一般女性に産ませた娘は、魔術回路と魔術属性をもって生まれたが、すでに文句のない後継者を得ていた父親は彼女を魔術とは無関係に育てさせた。そのままだったなら彼女は父と異母兄の素顔を知らずに一生を終えられただろう。だがそこに堕ちた名門間桐が当主の妻を求めている、そのために大金を払うという噂が迷いこみ……彼女は何も知らされずに鶴野と見合いをすることになった。

実際、それは見合いというより“商品の確認”といったほうがいいだろう。まだ女子大生だった少女だけがそれを知らずに、興味津津と鶴野を見つめていたのを覚えている。

かつて、鶴野の弟雁夜も似たような理由で葵という少女と引き合わされた。兄よりも弟の方が優秀であり、雁夜が間桐の当主になると思われていた頃だ。もっとも葵の両親は娘を魔術師に嫁がせる条件として『娘の同意』を提示してくるほどには良心的だった。魔術師などという連中を理解しながら娘を嫁がせるほどには非情だったが。

結局、その出会いが弟を間桐から出奔させる羽目になったのは、臓硯にとっては誤算だっただろう。少女を真剣に愛してしまった弟は、だからこそ彼女と結ばれるわけにはいかないと決意してしまったのだ。己の初恋を実らせることが、愛する女を地獄に突き落とすことならば、なぜ彼女に愛を告げられるだろう。

そして弟は間桐から去り、鶴野は一人取り残された。雁夜が守りたかったのは愛した少女であり、臓硯に刃向い罰を受ける自分を震えながら見ているだけの兄ではなかった。

結局、臓硯は素質でも精神的な強さでも弟に劣る兄の方を当主にしなければいけなかった。一度失敗した彼はもう間違えなかった。

鶴野の妻となった女は、天使のような可憐な容姿と悪魔のような狡猾さをもった女だった。自分の美貌とブランド物にしか興味がな

く、平気で人をこけおろし、嘲笑する。鶴野は彼女に一片たりとも好意を持てなかった。だからこそ彼女は鶴野の妻になった。

……妻となった女が、自分の置かれた状況を悟った時の絶望の眼差しを今でも覚えている。その悲痛な色をたたえた瞳が次の瞬間、鶴野に対する軽蔑と憤怒の色に変わる様を。

どうして私を守ってくれないの。私をここから連れ出してはくれないの。

そう彼女はいう。そんなことできるはずがない。鶴野は弟とは違う。もはや鶴野は唯一の間桐の直系なのだ。人外と成り果てた臓硯が新たな子供を作れない以上、間桐の新たな魔術師を産みだすのは鶴野しかいない。逃げ出したところで成功するはずがなく、連れ戻されて死ぬよりもつらい目にあうだけだろう。

妻は鶴野に愛想を尽かした。それでも寝室を共にすることは彼らの最大の義務であり、妻に触れるたびに向けられる嫌悪の表情に鶴野は傷つき、憤った。やがて妻が身ごもった時、ようやくこの苦痛から逃れられると思ったのに……生まれた子供は魔術回路を持っていなかった。

あの時の、絶望。臓硯の落胆のため息に感じた恐怖。妻の憎悪の眼差し。誰もが鶴野を蔑んでいる。これが鶴野のせいであると思っている。

なにもかもが、鶴野に優しくない世界。希望などどこにもない人生。数多の悪意にさらされて、それでも鶴野が生きていたのは、結局のところ死ぬのが怖いからだ……と思っていた。

“彼女”と出会うまでは。

「貴方はもうすぐ死ぬ」

初対面の挨拶より先にそういわれた。冬木市立病院の待合室で会計の順番を待っていた時に、いつのまにか隣に座っていたのが彼女

だった。柔らかな癖のある黒髪を横に流した女だった。地味だが艶かしい雰囲気があり、豊満な胸部も相まって若いにも関わらず母性を感じさせる。

彼女は鶴野にはわからない異国の古ぼけた書物を読んでいた。こちらに視線を合わせることもなく、突然の隣人の発言に驚く鶴野に次の言葉を続けた。

「……そう宣告されたなら、貴方は最後に何をしたいですか？」

それから女は鶴野に微笑んだ。微笑んでいるが、その眼差しは冷酷なまでに鶴野を観察していた。鶴野はその眼差しに自分の右手を拳銃で吹き飛ばした男を幻像した。背筋に冷たいものが降りていく。蒼白となりかたかたと震え始めた鶴野の様子に気づいたらしい女は、だがそれ以上鶴野を追い詰めることなく、瞳に浮かべていた観察の色を消した。

「ごめんなさい。いきなり驚かせてしまったようですね」

母親が幼子に語りかけるような柔らかな口調だった。こんなにも優しく話しかけられたのは初めてのように鶴野には感じられた。

「いえ……」

初対面の、しかも若い女にすら怯える自分に恥じ入りながら、鶴野は頭をかこうとして右手を上げかけ、そして自分にはもう右手などないことに気が付いた。聖杯戦争中、突然間桐邸に襲撃してきた魔術師に襲われた時の負傷である。鶴野程度の魔術では傷はともかく、吹き飛んでしまった指などを復元することはできない。もちろん“父親”が彼を癒してくれるはずもなく、事故を装って民間の医療機関に駆け込むことしかできなかったのだ。

ああ、魔術師である、間桐の当主である己が、なぜこのような所に。その事実、その現実に吐き気がする。慣れ親しんだ感覚を気力で飲み込む男を女は興味深そうに見つめていたが、やがてゆっくりと破顔した。

「よかった」

「え？」

何がよかったのだろう、何を言っているのだろう、この女は？鶴野の人生にはよかったことなんて一つもない。何もかもが恐ろしくて、何もかもが煩わしくて、誰も信じることも愛することもできないのに。

「さっきの質問です。“貴方はもうすぐ死ぬ、そう宣告されたなら、貴方は最後に何をしたいですか？”……貴方にはちゃんと答えがあるようだ。やりたいことがあるのは、とても幸せなことだもの。だから“よかった”と……そう思いました」

「やりたいこと……？」

そんなもの、この間桐鶴野にあるはずがない、そう嘲笑しようとして、しかし鶴野は吐き気を耐えるような微妙な表情をつくった。自分自身の導き出した答えに、胃のあたりからこみあげて来るものがあり、それをこらえるのに精いっぱいだったからだ。

「……そんな、もの」

「私もつい最近まで、やりたいことがなかったのです。だからずいぶんとつまらない人生でした。だからやりたいことができた時には、本当に嬉しかった」

「……」

「あの男が、憎くて」

「え？」

それまでたたえていた慈母のごとき微笑みは、魔女のそれに替わっている。だがそれに宿るのは、まぎれもない喜び、歓喜だった。

「あの男を傷つけたかった。あの男の望みを目の前で打ち砕いてやりたくて、あの男が大切にしていたものを全て破壊してやりたかった。そのことを考えている時、私は本当に楽しかったのです。……誰かを憎むことがこんなにも楽しいなんて知らなかった。もっと早く知っていたら、人生はもっと充実したものになったでしょうに」

「憎む……」

「ええ、貴方にはきっと理解してもらえると思います。私たちは、きっと誰よりも分かり合える……」

数か月前のその出会いを、鶴野は生涯忘れないだろう。

あんなに幸せだったことは、四十年近く生きて、一度もなかった。

“彼女”は鶴野を理解してくれた。鶴野の苦しみを我が事のように悲しんでくれ、鶴野が受けた仕打ちを怒ってくれた。

“貴方は何も悪くない”

そうだ、自分は悪くない。悪いことなど何もしていないのに、なぜこのような人生を歩まなければならないのか。

“貴方を苦しめた者たちは罰を受けるべきだ”

その通りだった。鶴野を見捨てた者たちはみな罰を受けるべきだ。妻と弟の末路は当然の結果だった。だが、もう一人、罰を受けるべきモノがいる。なぜアレはのうのうと生きているのか。

“かわいそうな、貴方。ええ、痛いほどにわかります……相手を苦しめることができるなら、自分がどうなろうとかまわないというその心。貴方は死ぬが怖いのではない、憎しみが強すぎて自殺に逃げることができないのです。恐れているのではないの……貴方の

その「逃亡」を貴方を苦しめた者たちがあざ笑うのかという思いが、貴方を踏みとどまらせているにすぎない”

鶴野のひび割れた自尊心に染み入る、温かな彼女の言葉の数々。ずっといわれたくて、でも誰もいってくれなかった言葉をいってくれる彼女を愛した。

そう、これは恋だった。今ならば弟の愚行の意味がわかる。こんな思いを知ったのなら、命すらかけても仕方がない。失うことなど耐えられない。自分が欲しかったのは、これなのだと鶴野にはようやくわかったのだ。弟を、妻だった女を憎み、蔑みながら、本当は羨ましくて仕方がなかったと、今は素直に認められる。

同じ間桐の血筋に生まれながら、誰かを愛することができた弟。身勝手な人格で、自分を憐れんでばかりいたはずなのに“母親”としてわが子の名を呼びながら死んだ妻。

“貴方はもうすぐ死ぬ、そう宣告されたなら、貴方は最後に何をしたいですか？”

……願わくば、誰かを想いながら死にたかったのだ。その名を呟くことに最後の力を使いたかったのだ。だが思い浮かべるものなど、誰もいなかった。弟も妻も鶴野を想ってくれなかった。どこまでも、それは鶴野の片思いでしかなかった。

“貴方はもうすぐ死ぬ、そう宣告されたなら、貴方は最後に何をしたいですか？”

「……君がそうしろというのなら」

大量の爆発物にかこまれた鶴野は恍惚として呟いた。そしてスイッチを押した。

『あの目を見た時、使えると思った』
のちに寝台の中で女は彼女の王にいった。
『以前にアメリカで死刑囚の最後の懺悔を聞いたことがあって……、突然自分の職場に銃を持ち込んで同僚や客を次々に射殺していった男で、三十八人殺したが、彼の知り合いはその半数にも満たなかった。残りはたまたまそこにいた人たちだった。そんな無差別殺人をやってのけても、彼はなんの罪悪感も抱いていないようだった……。彼は本気で自分こそが周囲に虐げられていた被害者であり、そんな自分を救わなかった周囲の者たちは罰を受けてしかるべきだと確信していた。だから名も知らぬ七歳の少女の頭を吹き飛ばしても一片たりとも罪の意識を感じることはなかった。……間桐鶴野は彼と同じ目をしていました。鶴野が彼のように暴発しないのは、間桐臓硯というバケモノに恐怖しているからにすぎない。“恐れ”さえ彼の心から消え去れば、あとは憎悪だけが噴き出すでしょう』

冬木、ある男の死（後書き）

愛を知らない女は真相には気づかない。

間桐桜（前書き）

今回は二話連続投稿。
そして相変わらずの唐突展開。
すまん、だがこれが私の趣味だ。

間桐桜

昼間は多くの人々であふれ騒がしかったキャンプ場も、深夜二時にもなれば聞こえてくるのは虫の鳴き声と小川のせせらぎのみだった。このバンガローの中でも、思い思いにキャンプの最後の日を楽しんだ子供たちが例外なく深い眠りについていた。桜の隣も例外ではなく、彼女の兄の慎二が掛布団を蹴り飛ばした姿勢のまま、口をあけたまま爆睡している。その向こうには布団こそ蹴ってはいないものの、似たような表情でこれまた深い眠りにおちている少年二人。

桜は布団から起き上がって兄の布団をかけなおした。幸せそうな寝顔だと桜は思った。この一週間、手綱を外された犬のように駆け回っていた兄を思う。兄は本当に楽しそうだった。引きずられるように自分も少し楽しかった。

冬木市の中を横切る大きな川の上流にあるキャンプ場。二人が通う私立の学校が主催した林間学校に参加することになった経過を桜も兄も知らない。桜と慎二の通う学校には学童保育という制度があり、放課後一人で家にいなければならない鍵っ子を安全面でフォローするため放課後に図書室や体育館を開放している。桜もそれを知っていたが、これまで利用したことはなかった。“間桐桜”は学校が終われば一目散に家に帰らなければならない身だったからだ。反対に兄の慎二は家にいつくことがなく、小学生には多い金を片手に暗くなるまで遊びほうけている。そして義父は桜の“教育”以外は何もせず、部屋に閉じこもってアルコールに溺れている。そして祖父、臓硯はどこで何をしているのかわからない。普段“人間”として存在しているのかもわからない。

間桐の家は、できるだけ一緒に家族で食事をとろうとしていた遠坂の家とはあまりにもかけ離れていた。

そんな間桐家だから、当然夏休みに家族でどこかに行くことがあるなど、桜はみじんも期待をしていなかった。だから学校が主催す

る参加自由の林間学校に参加するように義父、鶴野に言われた時は驚いた。隣の兄もびっくりした顔をしていたので、間桐の家では非常識なことであったらしい。なんでも学校側からそれとなく誘いがあったらしい。苦々しくそういう鶴野の言葉から多分、子供への育児放棄とか虐待とかを疑われたのだろうと思われた。

当然、鶴野にも自分たちが桜や慎二にしていることが虐待や育児放棄にあたるとわかっているのだ。だが事情を知らない一般人の教師に魔術師の家の事情に首を突っ込まれたといういら立ちが鶴野を不機嫌にさせていた。

いってこいといわれ、はいと頷いた。桜にはほかの言葉をつむぐ自由などない。

そうして兄と共に参加した林間学校という名目で教師たちが付き添う、夏休みに遊びにつれて行ってもらえない子供たちのためのキャンプでの一週間はまるで夢のような日々だった。

暑さと山特有の匂いに文句のいいどおしだった慎二は、しかし小さな滝を備えた小川とキャンプ場の傍にある牧場に放たれている牧羊犬の子犬たちにころりと機嫌を直した。

おなじ班になった二人の少年たちは、最年長の六年生で、おまけに下に兄弟がいる面倒見がいいタイプだったので、慎二の暴言と我がまま、桜の人見知りをうまくあしらってくれた。

飯盒でご飯を炊いたのも初めてならば、うさぎに餌をあげたのも初めてだった。鶏は本当に夜明けに鳴くのだと知った。普段怒ってばかりの兄は遊ぶことに対しては本当に頼りになる相棒だった。二人で手をつなぎ、悲鳴をあげながら渡った吊り橋のことはきっと忘れない。

楽しかった。本当に今までのつらいことが夢だったみたいな時間だった。

でも明日には冬木に帰らなければならない。あの家に、あの蟲蔵に。

自殺する者は休み明けに多いのだという話を桜は思い出した。信

憑性のない話ではないと思う。だって明日になればこの安らぎが消えてなくなると知って、それをとどめたいと思ってしまうのがどうしておかしいのか。

起き上がったままじっと兄の寝顔を見つめていた桜は、やがてふらりと布団から抜け出してバンガローの外へと足を運んだ。このバンガローには教師はいない。子供たちの数と引率の教師の比率は子供たちの方が多く、すべての部屋に教師を置くことはできなかったのだ。この部屋は比較的行儀のいい子供が多いので、夜に部屋を抜け出したりする者はいないだろうということで、教師たちはほかの子供たちの部屋で寝ている。桜とて普段ならば灯りといえば所々に豆電球しかない山奥の暗闇の中を出ていく度胸も好奇心もない。

だが今、桜は何かに誘われるように外へでようとしていた。

ふらふらと素足にスニーカーをはいて寝間着姿のまま、小川のせせらぎの元へ歩いていく。キャンプ場からすこし下っていくところに小川があって、昼間は絶好の水遊びの場となっていた。今日は最後だからと兄と一日中、この川にいた。日焼け止めを塗ったはずの肌がひりひりするほど遊んだのだ。

たしか、あの小川の奥には深い部分があると先生がいっていた。そこは流れが速くて足を取られてしまうから行ってはいけないと。……そこに行ったのなら、間桐桜は明日を迎えずにすむのだろうか。この幸せな心のままで終われるだろうか。

そんなことをぼんやりと考えながら桜は河原に降りていった。

「あれ……？」

暗闇の中に水が流れる音だけが聞こえるそこには、朝靄とは違う濃霧が立ち込めていた。晴天が続いたこの季節にはあり得ない現象に桜は目を驚愕に見開いた。

（なんだろう、この甘い匂いは……。おかしい、こんなのおかし

い）

……ヌ、オビキヨセラレタカ

がつんと、脳にたたきつけるような衝撃があった。体中の刻印虫が騒ぎだす。

途端に意識が覚醒する。

自分はここで何をしているのか。勝手にこんな真夜中に外に出てきてしまって、教師に見つかったら確実に叱られる。

「え、えっと……」

……ココヲ、リダツシナケレバ

急いで身をひるがえした桜の身をあざ笑うようにすでに濃霧は彼女の退路を断っていた。

「え、うそ、どうしよう」

「やはり、この香にはあらがえなかったか。当然よな、この匂いは腐りはじめている輩には神代の美酒に勝る甘露よ。許す、存分に酔うがいい」

ふいに、桜の背後から面白がるような男の声が聞こえてきた。なんとも甘く、だがどこまでも冷たい声。その美しい声色には隠すつもりもないあざけりがふくまれている。一見独り言のようなそれは、だがどうしようもなく桜を怯えさせた。

振り返れば、小川の浅瀬に立つ一人の男がいた。黒いライダースーツを着た金髪紅眼の青年は、濃霧の中でも曇ることのない輝かしい美貌を、亀裂のような嘲笑でゆがめながら桜を見ていた。その手には年代物の香炉が乗せられており、それこそがこの異常な状況を作り出しているのだと分かった。

「……」

……ナゼ、アーチャーガココニイル……アリエヌ

「どうだ、光栄に思えよ。これはな、我の不死を食らった蛇の抜け殻を焚きこめたもの、つまり不死の薬の残り香よ。我がかつて求めたもの、そしてお前が求めるモノはここにある。これを調べれば不死はともかく不老ぐらいは実現できるかもしれん。……まあ、この通りもうすぐ燃え尽きてしまうようだが。なあ、欲しいか？」

「……」

……オオ、フシ、ワシノフシ……

がたがたを震えはじめた桜を見下ろして男は笑う。餌欲しさに必死に芸をする犬を見つめるような生ぬるい微笑みだった。ぎらぎらと瞳をぎらつかせる少女を堪能するように眺めまわしてから、金髪の男は手の中でもてあそんでいた香炉を何のためらいもなく川へと投げ捨てた。

「ああっ」

桜は投げ捨てられた香炉を追って走った。その時の桜の頭にはこの状況への恐怖も疑問も何もなかった。あの香炉を手にしなければならない。水面にたたきつけられた香炉から大切な灰がこぼれ落ちて流れていってしまう前に、香炉を、灰を、不死へと続く道を。

「なるほど。やはり“貴様”そこにいたか」

「え……」

そして桜は見た。男の背後の空間に黄金の歪みが姿を現すのを。そこから真紅の槍が自分に向けて飛び出してくるのを。

「あ……」
「……その“心臓”を貫い受ける」
そしてその宣告通り、真紅の槍は小柄な少女の肉体を貫き、吹き飛ばした。

間桐桜（後書き）

いわなきゃわからないと思うのでいうが、鶴野父さんが自爆したのと同じ日の出来事。
うん、いわなきゃわかんない話をかいてます。

新しい命（前書き）

昔の農家の嫁さんは陣痛が来るまで働いて、出産の次の日にはおきていたらしい。
おそろしい……。

新しい命

「ようするに」

言峰綺礼は何事もなかったかのように笑みを浮かべ血だらけで這いつくばっている少女、否、少女の内部に巣食っている老人を見つめた。

「この状況がどういうことかというと、私が貴方を出し抜ける自信がまるでなかったということなのですよ、端的にいえばね。どんな火力を手にしても、貴方の“息子”を裏切らせても、安心などできなかった。貴方に私達の計画が見抜かれていないなどとは、欠片も期待していませんでした」

「な……なんじゃ……と」

憤怒の言葉は吐血と共に吐き出された。愛くるしい少女の顔には不釣り合いなしわが刻まれている。間桐臓硯はもはや間桐桜の表面意識を支配していることを隠していない。隠し通す余力など彼にはもはやないのだ。ぜいぜいと荒い息をはき、細かい震えを見せるばかり。

その姿に綺礼は楽しげに微笑んだ。その瞳には死にかけて少女への憐れみなど欠片もない。そしてそれは少女を貫いた真紅の槍の持ち主であるギルガメッシュとて同じであった。

「だってそうでしょう？　貴方とは一度だけ対面しましたが、その時思ったものです。この老人は掛け値なしの怪物だと。貴方もこうおっしゃった……次に会う時には自分と五分で渡り合うために己の本性を肥え太らせておけと。つまり私の力量は自分には到底及ばないといったも同然だ。そしてそれを私は否定しない」

綺礼は腕に抱いた赤ん坊の頬を優しく指で撫でた。半日前に生まれたばかりの我が子は、豪胆なことに近くで死にかけている少女の苦痛の声など知らぬとばかりに安らかな眠りについている。
そしてそれを満足そうに見つめる赤子の父親もまた、己の宝剣に貫かれたモノの存在を一瞥もしない。生臭い血の匂いが満ちる中で出来上がった家族絵図は暖かく、それゆえにこれ以上もなく異様な様であった。

「重労働の後なので、話は簡単に終わらせましょう。病院を抜け出したことがばれると困りますしね。さて、つまり私はこう思ったわけです。言峰綺礼は間桐臓硯には勝てない。ならば“勝つ”ことは諦めて“相手に負けてもらおう”」
「ぬッ……！？」
「数百年を生きた老獪な魔術師ならば理解してもらえると思いますが、敵というモノは雑草に似ていますよね。全て引っこ抜いたはずなのにいつの間にか新しいモノが現れている。根っこが残っているんでしょうね。……敵対する人間もそう、“誰かと敵対し、それを滅ぼした”……それ自体を理由として誰かと敵対するはめになる。いわゆる仇打ちという行為ですね。間桐雁夜ならばまだいい。彼は孤独な男だったし、間桐の血統だ。殺したところで仇を取りたがる者もいない。だが、敵対者が『言峰』なら？　聖堂教会の重鎮、言峰璃正の身内だという、これはまずいでしょう。聖杯戦争という治外法権状態の時ならともかく、今彼を殺せば聖堂教会との間に問題が発生するし、殺害の正当性を問われる。遠坂時臣が当主だった時ならば間桐桜への行為は“修業”ということでごまかせるかもしれないが、現在の当主は凛だ。幼い少女が自分の妹が蟲に犯されていたことを知って“魔術の修行だから”と納得できるか？　納得できるはずがない。ではこれで遠坂家とも確執が出来る訳だ。ほら、敵だらけ。……だから貴方は『間桐臓硯』に見切りをつけたわけです」

臓硯ではなく赤ん坊に話しかけるようにつぶやいていた綺礼は、ちらりと臓硯を一瞥すると、腕を伸ばして赤ん坊を隣のギルガメッシュの腕に抱かせた。傲慢な王とは思えない緊張の風でギルガメッシュは息子を受け取った。

「ほら、こうやって首を支えるんだ。まだ首の骨が軟らかいから気を付けて」

「お、おお。……やわらかいのだな」

「落とすなよ」

それから綺礼は床に這いつくばっている少女に“お待たせしてすいませんね”とでいいたげに軽く首をかしげて微笑みかけた。だが足もとの少女はその白々しい態度に悪態をつくことすら出来ないでいる。すでに血は流れ尽きたのか、赤い水たまりはどす黒く変色しようとしている。少女はもはや物のように横たわり、荒い息をついているだけだ。今もまだ“間桐桜”が呼吸をしているのはひとえに肉体に巣食う刻印虫のおかげであった。

瀕死の少女の元に綺礼は産後直後とは思えない軽い足取りで近づき、彼女の側にひざまずくと少女の頭を優しい仕草で撫でた。

「間桐臓硯にとって間桐の家系の存続はたいして価値がない。それは間桐雁夜の扱いや、一応は現当主である間桐鶴野への態度にも表れている。だが間桐臓硯は間桐の魔術師を欲している。何故か？

聖杯戦争のためだ。聖杯を手にするのならばマスターたる魔術師とサーヴァントが必要だからだ。肉体を蟲へと変貌させて延命している間桐臓硯には令呪は宿らない。だからどうしても魔術師が必要なのであって、それは別に“間桐の魔術師”でなくてもいい。……だから貴方は『間桐』を見限ることにしたのでしょう？　貴方は生きることに執着している。だから“御三家であることの利益”と“

自身の安全”を量りにかけたのなら絶対に後者を選ぶと思った。そういう思考にたどりつけば後は簡単だった。……貴方は生きたい。でも貴方の死を願っている者がいる。彼等を倒しても次が来るかもしれない。ならば望み通り彼等に“貴方”を殺させて、別の誰かになればいい。そうすればもう追ってくる者はいないだろう……つまりはそういうことでしょう？」

「ぬ……」

その時、丸太のように転がっていた桜の眼球がぐるりと動いて綺礼を見た。

「ほお、まだ動けるのか。さすが」

「ぬ、ぬかったわ、……ほ、んに、あの璃正、め、のむ、娘とは思えん……」

「まあ酷い」

「……がッ…ぬ、は…さ、さく、ら、を……救う、の、では……」

なかったのか、という言葉は吐血に遮られた。ごほ、と少女はそのままぜきこむ。

綺礼は少女を楽にしてやろうと、彼女の頭を動かし呼吸を確保してやった。

「ええ、そのつもりでしたが……でもこの男を私ごときが制御できるはずがなかったということです。興味のないふりをしてよくもやってくれました。まあ、私の希望というのはいつだってかなったためしがない……ああ、でも兄上にはなんと言ったらいいのか、今から頭が痛い」

「……ッ」

確実な愉悦を含んだ言葉に“桜”の口元が苦笑に歪んだ。

「……なに、が、望み……ぞ」
「さすが間桐臓硯。うちの兄上と違って察しがよろしいこと。……ええ、ギルガメッシュの気まぐれが起こしたこの結末では私は不服なのです。私はあの人に“間桐桜”を“遠坂桜”に戻すのを手伝うと誓ったのですから。桜に死なれては本末転倒というものだ。だがどう見ても“間桐桜”を癒すのはもう無理だ。欠けてこぼれたモノが多すぎる……そう“何か”で注ぎ足さないかぎりは」
「……ッ！　く、く……なる、ほど」
「私は魔術師としては見習終了レベルですが、霊体を繕う術にだけは少し自信があるのです。霊体も人間の臓器のように移植することができるのですよ？　もちろん、臓器などとはレベルが違う難解さですが、例えばその二名が近い血縁であったり、移植先が相手の霊体を受け入れやすいように『調整』されていたのなら話は別です」
「く、く、くはッ、……よかろう、“儂”をつかって“桜”を癒すがいい……！　抵抗はせぬ」
「ありがとうございます。そう言ってくださると信じておりました。貴方の助力で幼い少女の命は救われました」

綺礼は優雅な仕草で礼をした。英雄王は血生臭い茶番劇を楽しそうに見守っている。

「だが……その意味、を、忘れるでないぞ……！」
「はい、間桐臓硯を“残す”ということがどういうことか、肝に銘じながら生きていきましょう……出来れば次の聖杯戦争に間に合ってください。ある筋からの情報ではあと九年ほどで第五次聖杯戦争は幕をあけるそうですから」
「それ、は、朗報……ゆ、愉快な、す……い……」
「さあ楽しいおしゃべりはここまで。……治療を始めます」

ひきつったように嗤い続けていた少女の瞳孔が開き始めたのを見て、綺礼はその右手を彼女の腹部にずぶりとつきたてた。

新しい命（後書き）

「あれ、兄貴は？」以外の感想お待ちしてます。

赦しはここに（前書き）

桜は難しい。

赦しはここに

闇の中、心がほろほろとこぼれていくのを感じた。手に掬い取った砂のように、隙間から流れ落ちていく。

虚無の中、ぽろぽろと自分が崩れていくのを知った。壊れたモノは元には戻らないのだ、あのハンプティ・ダンプティのように。

ああ、なんという安らぎ。終わりという名の安堵。

その時、間桐桜は驚くほど満ち足りた心持で自身の死を受け入れていた。もともと桜は生きているとは言い難い、人形のような少女だった。間桐の家で受けた修行という名の拷問が彼女をそうしたのだった。だから今の桜には見知らぬ男がいきなり自分を殺したという理不尽な現実も淡々と受け入れることが出来た。

そう、きっとこんなことはよくあることだ。

いつまでも一緒だと思っていた家族がある日いきなり他人になった。お前の幸せを祈っているといわれ、連れて行かれた場所には苦痛しかなかった。優しく笑うところしか見せたことがなかった小父さんは、訳のわからないことをいいながら惨めに死んでしまった。

……そんなことがあるのだ。自分ではない誰かに話しかけていた見知らぬ人が、いきなり自分を殺すこともあるだろう。きっとそんなことはたいしたことではないのだ。

そして桜は零れ落ちていく。さらさらと“桜”を構成するモノが全て崩れ去っていって、後には何も残らない。それはなんて素晴らしいことなのだろうと桜は思った。心の底からそう確信した。

（それで本当にいいの？）

（……？）

突然に聞き覚えのある声がして、間桐桜は“落下”を止めた。

（誰……？）

誰だっただろうか。知っているような気がする。もう戻れないあの懐かしい場所に関係する声だったような気がした。

（“間桐桜”をここで終えてしまって本当にいいの？　それはこれまでの苦痛を全て無為にするということではないのか、何も得ることも何も知ることもなく、ただの搾取された犠牲者として完了してしまうということではないのか。……遠坂時臣の娘ともあろうものが）

（違う……）

悲しくて、闇の中桜は咽び泣いた。固く凍りついたはずの心は、すでにあちこちが欠けていて崩壊が始まっている。だから桜はちゃんと泣くことが出来た。

（遠坂時臣って人はもう私のお父様じゃないの、そんな人はいなかったんだって、お爺様が……、だからそんな人はいないの。遠坂のお家に桜なんて子は元からいなかったの……）

（いいえ、貴女は勘違いをしている。貴女は父親に捨てられたと思っているが、本当はそうではない）

暗闇の中ですすり泣く少女の傍に誰かがやってきて、そっと寄り添った。その気配はやっぱり懐かしくて、桜はその人を知っている気がした。家族ではないけれど、とても近くにいた人だった。……思い出せない、誰だったろう？

でもその人のいうことは、いつだって本当のことだったと、それだけはわかった。

（さあ、桜。真実を知りたいのならば、『彼』を受け入れなさい。

貴女の知りたいことは彼の記憶の中に必ずあるから……。もはや恨み言をいいたくてもあの人はいない。ならばその言葉や行動で、その真意を探るの。知りたいでしょう？　“どうして私が”といつも考えていたでしょう？　ほら、真実がここにある……）

桜はおずおずと差し出された『彼』を受け取った。受け取った途端、それはバラバラになりかけていた少女に混ざり、彼女に溶けていった。

そしてそれは桜になった。

なったから、桜はそれの記憶を己のものとすることが出来た。もっとも“それ”がまだ人間だった昔のことは摩耗した魂が忘れてしまっていたが。

（そうだ、“思い出した”）

『問われるまでもない。愛娘の未来に幸あれと願ったまでのこと』

記憶の中で懐かしい人が立っていた。もう二度と会えないはずのその人の姿に、桜は先ほどとは種類の違う涙を流した。「お父様」と桜は泣き、「遠坂の子倅か」と“桜”は嗤った。

そして桜は父と“息子ということになっている男”との会話を思い出した。そう、あの時、愚かな身の程知らずの無様な戦いを面白く覗き見ていたのだった。

『いずれか一人の未来のために、もう一人が秘め持つ可能性を摘み取ってしまうなど』

ああ、と桜は泣く。“雁夜”に淡々と告げられる遠坂の魔術師の言葉。父親の本音。

ずっと姉と天秤に掛けられた、そして姉が選ばれたのだと思っていた。姉さんの方がふさわしいから自分が間桐に“贈呈”されたの

だと思っていた。

『親としてそんな悲劇を望む者がいるものか』

でも本当は違ったのだ。父はこんなにも自分のことを思ってくれていた。ならばあの痛みも桜ならば乗り越えられると思っていてくれたに違いない。姉さんには耐えられなくとも、桜ならばと信じてくれていたに違いない。

ああ、と桜は嗤う。泣きながら笑う。記憶の中、刻印虫の副作用で歪んだ顔をさらに滑稽に歪ませて“雁夜小父さん”がわめいている。私と姉さんが戦うとか、どうとか。……なんて無様なんだろう。結局、あの人は魔術師がどういう存在なのか、最後まで理解していなかったのか。私と姉さんが殺しあう。そんなことは当然のことではないか。

それが魔術師、血脈など根源へと至るための保険にすぎない。

『仮にそんな局面に至るとしたら、我が末裔たちは幸せだ。栄光は、勝てばその手に、負けても先祖の家名にもたらされる。かくも憂いなき対決はあるまい』

（わかりました、お父様。私、ようやくお父様の気持ちがわかりました。……がんばります。“間桐桜”は必ずお父様の期待に応えるから……、聖杯をこの手に……、遠坂と間桐の悲願をこの手で、……そのためには）

そのためならば、たとえ『間桐桜が遠坂凛を殺す』ことさえも肯定すると、あの人はいってくれたのだから。

ならばもう、桜は何も怖くない。間桐桜であることに痛みなど感じない。必要ならば存分に殺しあえと、あの人が許してくれるならば、その赦しこそが、間桐桜と遠坂凛が遠坂時臣にとって対等に“

愛娘”であるという何よりの証だ。

（お父様の期待に応えるのは、この私……！）

暗闇の中で、少女は微笑んだ。その無邪気な微笑みは、かつて間桐雁夜という男が命を懸けても取り戻したいと願っていたもの、そのものだった。

同時刻、冬木市の深山町の一角にある館の前に一人の男が立っていた。

白髪と褐色の長身の男であった。三十代半ばのその男は、瞑想でもしているかのように、かたく瞼を閉じたまま館の玄関の前に立ち尽くしていた。時は深夜である。道端の切れかかった古い街灯がまたたく以外は、虫の鳴き声だけが、この世界が写真や絵画などではなく現実であることを証明していた。

やがて思いつめた瞳が、真っ直ぐに正面をにらみつけた。

そして男は低い声で“その言葉”を紡ぎ始めた。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ　（――体は剣で出来ている）」

虫の鳴き声がふいに止んだ。

「――ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ．　（血潮は鉄で、心は硝子）」

男を中心に周囲の空気、いや世界の“質”が変化した。

「――Ｉ ｈａｖｅ ｃｒｅａｔｅｄ ｏｖｅｒ ａｔｈｏｕｓａｎｄ ｂｌａｄｅｓ．（幾たびの戦場を越えて不敗）Ｕｎａｗａｒｅ ｏｆ ｌｏｓｓ．（ただ一度の敗走もなく）」

派手な爆発音がして、目の前の館が崩壊した。

「……は？」

あんぐりと口を開けて呆ける男の目の前で、攻撃目標だった西洋風の館が文字通り崩壊していく。まるでビルの解体現場を見るかのような冗談のような光景だった。

思わず男は崩れゆく館へと手を伸ばした。そんなことをしても崩壊が止められるわけがないことは十分に分かっているし、自分は本来この光景を自らの手でなすためにここに来たのだが……でも、俺まだ何もしてない。この一ヶ月郊外の森の中の城にこもって、その城にゆかりのある少女のことを考えて悶えながら練習した必殺技を披露していない。

「……なんでさ」

結局、周囲を野次馬が埋め尽くし、消防車と救急車がサイレンを鳴らして急行し、眠そうな警察官に「すいません、ちょっとよろしいですか」と肩をたたかれるまで、男はその場所に立ち尽くしていた。

赦しはここに（後書き）

兄上はこのような事情でした。

一件落着（前書き）

結構間が空きました。

……別にアニメＦａｔｏ／Ｚｏｒｏが自分の住んでいる地域では放送されないことが判明して落ち込んだりしていない。嘘です。落ち込んでいました。

いいんだ、劇場版は見たけれど、テレビアニメのＦａｔｅは見てないし、見なくても原作知っていればいいんだ。

きっとツタヤでレンタルできるからいいんだ……！

一件落着

冬木市立総合病院は文字通り冬木市によって建設された公立病院である。冬木市のみならず近辺において最大の規模を誇る医療機関であり、今から三十年ほど前、地方の過疎化と医療削減の気配を危ぶんだ冬木市在住の幾人かの資産家が、市に多額の寄付とともに建設を提案したという善意と篤心の建物であった。ちなみにその資産家の中には遠坂や間桐の名があり、一番初めに病院の建設を言い出したのは遠坂家当主であったという。おそらくはやがて来る第四次聖杯戦争において、必然的に巻き込まれるであろう冬木市民への被害を避けられないものと想定し、彼らを少しでも救済すべきと医療機関を用意したのだろう。だが、結果として一年前の冬木大火災において、その冬木市立総合病院はあまり役には立たなかった。なぜなら五百人以上の死者と比較して負傷者の数は三十人以下だったからだ。

そう、一見被害に見合わぬその数は、もれでた聖杯の泥の恐ろしさを語るばかりである。

その呪いの泥に触れて、生き延びた者はいないと。

外科、内科、小児科はもちろんのこと、産婦人科や歯科まで混在する巨大な総合病院は、必然的にいくつもの建物に分かれている。当然だが、一つ一つの建物をつなぐ道も病院の私有地の一部であり、入院患者や来客の気持ちを安らげるために所々に小さな花壇やベンチが置かれている。

そんな公園ともいえないささやかな憩いの場のひとつで、あきらかに寝間着とわかる白いワンピースを着た女が疲れた風情で歩いていた。長い黒髪を無造作に束ねて横に流している長身の女であった。

大事そうに抱えたその腕の中にはお包みに包まれた赤ん坊を抱いている。昼間の冬木市立総合病院ならば、それは当たり前に見られた風景であろう、だが現在は真夜中、しかも女の寝間着は純白。幽霊の色であった。

真夜中の病院内をひたひたと徘徊する長い髪の女。しかも腕には寝ているのか死んでいるのかぴくりとも動かない赤ん坊。その姿を目撃したものは、悲鳴をあげずにはいられまい。病院という場所柄、すべての人間が寝ているとは言い難い環境で、しかし女は何を気にするでもなくのっそりと歩いている。

「ようやく帰ってこれたか……疲れた」

その女、言峰綺礼はふうと軽いため息をついた。その目じりにははっきりとした疲労の色がある。

「ハハハ、情けないぞ、綺礼。これしきの事で根をあげるとは。俺がかつて朋友と共に天の牡牛と倒したときなど……」

綺礼の後ろを手ぶらで歩いていた金髪の男は、そんな疲れ果てた風情に嘲笑を浮かべた。

「……一日がかりで子供を出産して、数時間の仮眠だけで起きだして遠出して、そこで瀕死の少女の傷を少なくとも外見上は跡形もなく治療した私にその仕打ちか。く、余計な荷物がなかったらもっと楽にいっていたのに。何故この子をつれて行かなければならなかった」

「こんなところに一人で残していくなど可哀そうではないか！

それに最初以外は別に我にはかかわりがないこと、あの小娘を癒したのは貴様の都合よ。まあ、我に息子をもたらしたことは“でかした”といってやってもよい……ふむ、なにか飲むか？　褒美にスポーツドリンクなど下賜してやろう」

「それが生まれたばかりの子供を新生児室から連れ出した理由か……」

石畳の道の片隅に設置してある自販機の元に歩いていく男に、“実は自分が飲みたいだけだな？”という眼差しを投げた綺礼はギルガメッシュが自販機を覗き込んだタイミングでぽつりと呟いた。

「その自販機、硬貨と千円札しか受け付けないが」

「……」

「もちろんカードなど使えない」

「……」

「硬貨、持ってないのだな？」

「……いちいち数を数えて出すのが面倒ではないか」

とりあえず最高額紙幣を出して、お釣りをもらう。それが王様の買い物の仕方である。お釣りはレジの周辺ならばどこでも置いてある寄付募集の募金箱に流し込む。ユニセフにとって神様のような男だった。

自販機をにらみつけながら唸りはじめた男に女は極上の笑顔を向けた。他人の苦悩は彼女の好むものであった。

「ギルガメッシュ、もし今ここで“王の財宝”が展開されたなら、

私は腹を抱えて笑わせてもらう。そして父親の微笑ましいエピソードを息子へ語り継ぐ。“父上はこの母の喉を潤すためならば宝具の使用もためらわなかった”と」

綺礼の茶々にギルガメッシュの肩がぴくりと痙攣する。しばし気まずい沈黙が辺りにただよった。

「……」
「……」
「……綺礼」

ちょっとなさけない声に綺礼は苦笑して、ポケットに入れておいた小銭入れを取り出し、そのままギルガメッシュに放った。受け取ったギルガメッシュはさっそく自販機のメニューを物色しはじめた。たぶん今の出来事は記憶から抹消されたのだろう。消去したから反省はなく、多分また同じことをしでかすだろうが、だがそれでいいのだ、そもそも金を数えるなど高貴な男の仕事ではない……と王様は主張するに違いないのだった。

「お前はポカリでよいな？　む、何故コーラがゼロカロリーしかないのだ。甘いのにカロリーゼロなどという魔改造コーラを我に飲ます気か？　何が入っているというのだ？」
「疲れた、風呂に入りたい……それから死んだように眠りたい」
いろいろなものを諦めた声色で綺礼はそう呟いた。

のろのろと近くのベンチに座り込んで、腕に抱いていた息子を膝に乗せる。赤ん坊は死んでいるんじゃないかというぐらい、ぐっすりと安らかに眠っている。頬をつついてみたが起きる気配はまるでない。

「息子よ、何が飲みたい？　父が何でも買ってやるぞ」
「それは私の財布だ、そしてそれ以前にこの子は寝ているし、そもそもしばらくは母乳しか飲めない」

突っ込みどころの多い話であった。綺礼が知る限り目の前のこの男は山ほどの育児書を買いこんでいたはずなのに、そんな基本的なこともわかっていないのは何故だろう。おそらくは読みたい部分しか読んでいないのだな、と綺礼は思った。そして他人の行動に対して言峰綺礼の分析は外れることが少ないのであった。

結局、ギルガメッシュはカロリーがゼロなのに普通のコーラと同じ味がする謎の液体を試してみる気になったらしい。冒険せずに定番のスポーツドリンクを選んだ綺礼と二人並んでベンチに座ってしばしのまったり時間を楽しんだ。

やがてペットボトルの半分を一気に飲み干した綺礼は安堵の息を吐いた。昨日、今日はさすがの元代行者にもこたえる激務だった。そもそも最初の予定では出産は想定していなかった。大規模な治癒魔術の行使は肉体的にも精神的にも負担が激しいため、終わった後に陣痛が始まってしまうかもしれないとは思っていたが、まさか大事な計画の前日に破水が起こるとは。

でも自分は頑張ったと、綺礼は思う。おそらくはその頑張りの結果、何人かの人間が不幸になるかもしれないがかまうまい。義兄とていってくれたではないか。“頑張っている人が報われないのは駄目だ”と……。頑張った人がすべて報われてしまったら、世の中は

つまらないものになると思うのだが、そこ等のことは兄にはわからないらしい。彼は運動会で全ての子供に一位の旗をあげようとするタイプだと綺礼は思っている。

「ところで、綺礼。間桐の小娘と何を話していたのだ？」
「ん？」
「治療していた時、小娘のナカに入っていたではないか」
「ああ、あれか。あれは別にたいしたことを話していたわけではない。時臣師の御心について、彼女の方に誤解があったようなので、それを訂正していた。子が親心を見誤っているのは悲しいことだ。彼女は自分が捨てられたのではないことを知らねばならないと思って」
「何故そのようなことを？　いや、それ以前に、何のためにあの娘を生かしたのだ？　我は雑種が貴重な令呪を消費する前に間桐の蟲を始末することにしたとしか聞いていない。器を救って何の意味がある？　よもや“恩を売った”などと寝言はいうまいな？」
「無論だ。魔術師に恩や情など期待するほど愚かなつもりはない。だが等価交換も魔術師の根本には違いない。借りは返さずにはおられまい。……私の望みは“間桐”と“言峰”の同盟。先の聖杯戦争で私が遠坂時臣と秘密裏に組んでいたように、来る第五次聖杯戦争において、言峰綺礼と間桐桜は同盟を組む。共に手を携えて五人のマスターとそのサーヴァントを倒すのだ」
「ほう、あの娘、それを承諾したのか？　貴様ほど安心できない味方はおるまいに」
「受けない理由の方がないだろう……私を信用できない、そんなくだらない理由で？　それよりもメリットの方が大きい。彼女は確かに間桐臓硯を取り込み、その知識を得たかもしれないが、知識と実践は違う。臓硯にできても桜にできないこと、桜にしかできないことをこれから長い月日をかけて確認していかなければならない。

いわばリハビリだな。足を骨折したマラソン選手は治れば、すぐに以前と同じスピードで走ることが出来るのか？　そんなはずはない。まずはゆっくりと歩くことから始めるのだ。桜もそうするだろう。そして私はそれを手伝える立場を手に入れる。合法的にね」

にいっと綺礼は悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「私は肉親を全て亡くした間桐兄弟の財産管理人、後見人になるだろう。不可能ではないでしょう？　間桐には分家もない、つまり親戚がいない。私は桜の実の父親の親しい友人で、この冬木において人格者として名高い言峰神父の娘。そして何よりも、自分よりも相応しい人がいるからと辞退したが、言峰綺礼は桜の実父である遠坂時臣の遺言で彼のもう一人の娘の後見人を託されている」

「なるほど、長女の方は申し訳なくも辞退したが、次女の方は辞退が申し訳なくて立候補するというわけだな。それならば周囲も納得しよう、お前は責任感の強い女だ！　ほう、しかしあの小娘は遠坂に戻してやると雑種に誓ったのではないか？」

飲み干した缶を握りつぶしながら、ギルガメッシュはにやにやと意地の悪い笑みを浮かべた。

「大丈夫だ、兄上の方から破棄してくるから。嫌がる桜を日陰者になるとわかっている遠坂家に強引に連れ戻すなんて、兄上には出来ない。それに兄上の望みは桜が幸せになることで、間桐でも桜が幸せになれる可能性があるのなら、そちらに賭けるだろう。渋るようなら間桐慎二を使う。妹が遠坂家に戻れば、あとは大金を手にし

た少年が一人取り残される。彼の行く末は施設か？　それとも金目当ての里親？　なんにせよ、兄上とて莫大な遺産付きの幼い少年が良心的な保護者と巡りあう確率の低さを知らぬほど世間知らずではないだろう」

だからこの作戦は、誰よりも士郎にこそ隠し通さなければならなかった。ゆえに士郎に父の形見である予備令呪を全て渡したのだった。それは予備令呪を士郎に渡すことで士郎の中で魔術師としての綺礼を無力化させるためであった。

綺礼の魔術師としての実力は、見習修了レベル……治癒魔術こそ師を超えたといわしめたものの、一代目の魔術師である綺礼は、いわば品質改良前の野生種であり、つまり魔術行使には難がある未成熟な魔術回路とお粗末な魔力しか持ち合わせていないのだ。

ならば綺礼は大規模な魔術行使時には、体内の貯蓄魔力だけでは間に合わないということになる。衛宮切嗣との戦闘にはその不足分を予備令呪で補った。今回は予備令呪ではなく遠坂での修業時代に作成した自分の三年分の魔力入りの宝石と、聖杯戦争の時、万が一のために師から授けられた虎の子の宝石を全て使いつぶした。

士郎はそのようなバックアップの存在を知らない。ならば綺礼が“臓硯は桜の心臓に寄生していた。だから桜ごと臓硯に致命傷を与え、のち桜を癒した”などという暴挙に出たなどと微塵も思うまい。しかも綺礼はその前日に出産している。不本意だがこれ以上のアリバイはないだろう。

「兄上も正直に魔術師の工房に殴り込みとは間抜けなことだ。大体、間桐臓硯が“どこにいる”などわかりきっているではないか。臓硯は自分を憎み、桜を救わんとする間桐雁夜にサーヴァントを召喚させたのだぞ？　いくら雁夜を刻印虫で支配しているといっても

死に物狂いで反撃されたらどうする？　六人のマスターとそのサーヴァントを倒すよりも、自分のサーヴァントに臓硯を殺させた方が確実ではないかな。それで自分は死んだとしても桜は助かるのだし。……まあ、雁夜の方は時臣師を“殺しても許される”という状況に飛びついて何も気付かなかったかもしれないが、臓硯がその可能性に気が付かないはずがない。それでも自分が“息子”に殺される可能性を考えていなかったというのなら、それは雁夜にとって臓硯を排除することを諦められるほど“価値のある場所”を抑えていた……そういうことではないのか？」

「……我の記憶では殴り込みを提案したのは、そもそもお前だったが」

「そうだったか？」

白々しく首をかしげる綺礼だった。

「……とりあえず、そういうことで間桐桜は間桐桜のままで私が面倒を見る。兄上も異存はあるまい。幸せにしたいのなら、自分で幸せにすればいいのだ。得意の料理で養うもよし、父親面して授業参観におしかけるもよし、だ」

最後の一口を飲んでペットボトルの蓋を閉めた綺礼は、やがてゆっくりと顔に満面の微笑みを浮かべた。

「無事に子供も生まれたし、私はよくやったと思う。きっと兄上も褒めてくださるだろう」

「うむ、苦労であった。玉のような凛々しい子よ。我にそっくり

だ。……時に件の雑種はどこで何をしておるのだろうな。忌々しいが一応甥であろう？　会いに来ぬのか？」
「……さあ、どこで何をしているのだろう。最近ここらで不審な外国人がうろついているという通報があったらしいから、どこかで検問にでも引っかかっていないかと心配だ」
「我の記憶ではお前が近所の女どもにそんな話題を吹き込んでいたように……、いや、それはどうでもいいことだ。うん、心配だ。とても心配だぞ」
「兄上を案じてくれるなんて、ギルガメッシュ。ようやく仲良くなってくれているようで、私は嬉しいよ」
「ハッハッハ、今度会ったら優しく接してやろうと思っている」

ギルガメッシュが投げた空き缶が綺麗な放物線を描いて、空き缶入れに投げ込まれた。

一件落着（後書き）

桜サイドの話は、後で。

遺志（前書き）

兄上が娑婆に戻る前に間桐兄妹、その後。

遺志

間桐慎二が己の血統が魔術に携わる存在だと知ったのは、本当に幼い時分であった。

しかしそれは本来ならばあり得ないことであった。

そもそも魔道の業は本来秘匿するべきものであり、一子相伝が基本である。何故ならば神秘とは拡散するものであるからだ。知る人が少なければ少ないほど、魔術師への神秘の恩恵は多くなる。逆もまたしかり。

ならば、その神秘の隠匿はたとえ家族であろうと適用されるべきであり、大抵の魔術師は自分の後継者と定めた子供以外に魔術を教えることはない。もし教えたとしても、それはあくまで基本までであり、何故そのようなことをするかといえば、正統な後継者が事故などで失われた時のスペア、あるいは他の魔術師の家系に譲渡される『優秀な遺伝子』という名の贈物の価値を高めるため、そんなものでしかないのだった。

間桐慎二は間桐家の唯一の嫡子であったが、魔術に必要な魔術回路を持たずに産まれてきた。当然の結果として魔術を会得することが出来ない慎二は“魔術師”として何の価値もない能無しである。それでも彼が殺されたり捨てられたりしなかったのは、“マトウ”の魔術が“自身に返る”という特徴を持つがゆえだったのだ。

間桐の魔術とは間桐の血と肉により適合するように構成されている。間桐の魔術属性は『吸収』……自らの体内に他を取り込むことによって己独りだけでは成し遂げられない術を成功させようとするのが間桐の魔道である。代表的なものは“刻印虫”といわれる擬似生命を肉体に寄生させることによって、魔術回路の代わりとする術だ。魔術回路の性能は、魔術師が魔術を使う時に最も重要とされるものであるが、後天的に増えるということはない。

まさに魔術師としての“才能”そのものである魔術回路を、まが

りなりにも増やすことが出来るというのだから、その技術の高さには目を見張るものがあるだろう。もっとも、その間桐自体は魔術回路の質を落として衰退した。これは果たして何の皮肉であろうか。

だから祖父、間桐臓硯にとって一応孫ということになっている慎二は、何の意味もない存在であった。が、生かす価値だけはあった。その身、つまり間桐の血と肉には。

刻印虫は魔術によって生み出された擬似生命体である。ゆえに維持には餌が不可欠であり、肉体に寄生するという性質上、必然的にそれを提供するのは寄生先の魔術師なのだ。そして間桐の刻印虫は間桐の血と肉に適合するように作られているため、遠坂という別の魔術師の家系から貰い受けた娘の肉体にはいささか収まりが悪い。

ゆえに慎二であった。間桐の直系の血肉は刻印虫にとって最高級の“餌”となる。“遠坂桜”の生命力が刻印虫の主食だとしたのなら、彼のそれはいわば栄養剤のようなものだ。彼の父親である現間桐当主が使い物にならなくなった時、少年は“妹”という名の蟲蔵に己の精……つまり間桐の血を注ぎ込むように命じられるだろう。あるいは自らそう行動するように誘導されるはずだった。

そう、臓硯が孫を自分の手元において育てたのは、直系の子孫に対して肉親の情があったわけでも、聖杯戦争の手駒とする意図があったわけでもない、慎二は彼にとって卵を産んでくれるから晩餐のために絞められないでいる鶏にすぎなかった。

生きていればいい、生きていなくても別にいい……それが間桐慎二の価値であり、だから臓硯は孫がこっそりと間桐の魔術書を読み漁っていることも、自分こそが間桐の魔術を継ぐ正当な後継者だと

思いこんでいることを知っていたが、訂正も肯定もすることはなかった。

シックな装いの内装を持つ老舗ホテルの一室、最上階にて最高級のスイートの中で二人の子供がキングサイズの寝台の上で身を寄り添っていた。

一人は癖のある髪を持つ少年、彼は自分の膝に顔をうずめ、人目をはばからず嗚咽を漏らしていた。

そしてそんな少年を慰めるかのように寄り添うもう一人は、肩で切りそろえられた髪に真紅のリボンをつけた少女である。彼女は今、手にした手紙を真剣な顔で読んでいた。

それは楽しいキャンプから帰ってきた直後に、お互い以外の肉親も住む家も失ったことを知らされた間桐兄妹であった。このスイートルームはいきなりの事態にどうしていいのかわからずうろたえる子供たちのために、間桐の資産管理に手を貸していた弁護士がとりあえずの借り宿として手配してくれたものだ。

なにしろ彼らの肉親の死は明らかに事故ではなく事件である。人間の犯人がどこかにいるというのなら、子供たちが次の標的となるかもしれない、そう周囲が判断するのも無理のないことだった。

だから少年たちはこの広いが閑散としたホテルの一室に、もう三日も監禁に近い状態で隔離されていた。周囲に散らばった書籍やゲームの類はせめてもの慰めのつもりだろうが、いきなり親を失った子供がこのようなもので慰められるはずがない。

慎二は荒れた。ヒステリーを起こし、世話をするためにやってくる家政婦に当たり散らした。桜は桜で部屋の隅に座り込んで無言であった。

その状態に変化が訪れたのは顧問弁護士が貸金庫の中から『慎二

へ』という間桐鶴野から息子にあてた何通かの手紙を見つけ出し、それを届けた時だった。
父親が息子の毎年の誕生日の夜に、成人した息子を宛先にして一通ずつの手紙を書く……そんな小説の題材になりそうな行為、だが慎二は父と自分がそんな甘ったるい行為が似合う間柄ではないことを十分承知していた。魔術の実践こそ未経験だが、幼き頃から間桐の魔道書を読みふけっていた博識な少年は、その父親からの八通の手紙がバラバラに分離された暗号文であることを瞬時に悟った。
そして一日がかりでそれを解読し、そして父の遺志を読み解き、彼は今泣いている。

『慎二へ
お前がこれを読むとき、私は死んでいるだろう。
それはもはや運命というべき決定事項だ。
いかなる死因がお前に知らされるかはわからないが、そのすべてを信じてはならない。
私は敵と戦い、そして敗れたということを伝えておく。
お前はもう知っていると思うが、間桐は魔術師の家系である。
聖杯を巡る御三家の中で我々間桐だけがこのように衰退してしまったことは実に無念なことだ。とうとう息子であるお前は魔術回路を持たずに産まれてしまった。
間桐は己の身を守ることもできないほど弱くなった。弱ったものから食われていく、それは魔術の世界でなくとも通じる真理だ。
ゆえに敵は私を狙い、私は敗れるだろう。
敵のことは告げないことにする。知ればお前が危険にさらされる。
私はいい父親ではなかった。優秀な魔術師でもなかった。
このような私の後を継ぐかどうかはお前の判断に任せる。

だが間桐の後継者となり、聖杯に手を伸ばす覚悟をしたのなら桜にやり方を聞くがいい。
敵は間桐のすべてを滅ぼすだろう。先祖が書き記した魔道書も燃やされるであろう、だから私は見えない形で間桐の知識を残すことにする。
そう、お前の妹の桜だ。
桜の頭脳の中に間桐の英知が刻んである。桜はそのためにさる魔術師の家から貰い受けた。お前の覚悟を聞いて、お前に直接英知を授けてやりたかったのだが、術の完成は間に合いそうになかった。さすがに人体実験なしに大事なお前に術をかけるわけにはいなかった。
だが、もし父と祖父を死に追いやった運命から逃れたいと思うのなら、冬木を出て二度と戻ってきてはならない。桜は実家に帰せ。間桐の英知はその一族が受け継いでくれるだろう。
後悔しない人生を選べ。
魔術師であろうとしたがゆえに、お前に父として接してやれなかった私を許してくれ。

鶴野』

（なんて滑稽な茶番なんだろう……ああ、おかしい。ふふ、駄目よ、ここで笑ったら兄さんに気付かれる）
桜は真剣な顔を保つのに必死の努力をしなければならなかった。
（大事なお前？　後悔しない人生を選べ？　どんな顔をしてこんな手紙を書いたやら……、ひょっとして案外、自分がこの手紙に書いたような息子想いの父親だったかのように思っていたのかしら…

…綺礼さんのことだから、“お父さん”にそう思い込ませるなんて朝飯前だろうし）

人は信じたいものを信じ、見たいものだけ見る生き物だ。耳によい言葉を並べ立て、自分の妄想をあたかも世の真実であるかのように思い込ませるなど、人の内面を暴くのに長けた言峰綺礼には造作もないことだろう。

しかしいくら精神衰弱状態で愛情に餓えていたとはいえ、成人した一人の男をここまで自分の言いなりにできるとは、言峰綺礼の手腕は見事としかいいようがない。自分も見習わなければならないと桜は思った。

桜は魔術師の冷酷さを持つにいたったが、だからといって愛情がもたらす力も軽視しているわけではない。軽視するには間桐雁夜が見せた生き様は壮絶だった。屈強な戦士でも発狂する蟲蔵の苦痛に彼が耐えたのは、ひとえに遠坂葵への恋心のためだ。“愛する女を幸せにしたい”……そんな理由で命を捨てられる人間は実際に存在するのだ。ならばその“愛”とやらは立派な資産であり武器となりうる。

……だから“兄さん”には“桜”をその対象に選んでもらわなければならない。世界はおろか自分自身と引き換えにしても守りたいと思ってもらわなければならない。それが桜の用意する最強の武器となるだろう、どんな人格のものが召喚されるかわからない己がサーヴァントよりも信用できる盾となるだろう。

「兄さん」

桜は手紙の束をそれぞれの封筒にしまい、優しく隣で嗚咽を漏らしている兄に話しかけた。

「これから……兄さんはどうするの？」
「……桜、手紙に書いてあるのは、本当のことなのか？　お前に教われば、僕は魔術師になれるのか？」

慎二は面をあげ、子供らしからぬ底光りする眼差しを妹へと投げた。
桜は兄のその眼光を穏やかな微笑みで受け止めた。

「本当よ、兄さん。兄さんは魔術師に必要な魔術回路を持たずに産まれてきてしまったけれど、いってみれば、ただそれだけのことなの。生物なら誰でも持っている生命力というものを使って魔力を生成するのが魔術回路、例えるならライターの小さな火打石みたいなもの。一般の人たちはそれを持っていないから自分の燃料を火に変えられない、でも燃料そのものは誰でも持っているから、サーヴァントによる“一般人の魂食い”なんてものが起こる……兄さんは間桐の血筋だもの、燃料の質そのものは魔術師のレベルなの」
「だけど僕には肝心の魔術回路がない」
「うん、そうなんです。でもそれを刻印虫……人体に寄生してついには宿主の神経と一体化する擬似回路が補ってくれる。火打石は小さなものでいい、炎も小さなものでいい。だって間桐の魔道は“吸収”……他人の力を自分の力として行使する技、通常の魔術師が火炎放射器なら、私たち間桐は爆弾をつくれる。導火線に火をつけることさえできれば、火炎放射器に負けない威力を示すでしょう」
「……お前は本当に間桐の魔術書なんだな」

一般人であるはずの妹が父の書斎に入り浸っていた自分よりも博

識であることに、半ば呆然としながら慎二はつぶやいた。

「そうね、兄さん。……それで、兄さんはこれからどうする気なの？」

「決まっているだろう」

少年の目には決意があった。そのあまりにも純粋な輝きが自分に向けられていることに桜は陶然となった。ああ、やっぱりこの少年も間桐の血筋なのだ。どこまでも執着が深い水妖の性を持っている。

「僕は……間桐の正統だ。僕は、はっきりいって父さんもお爺様も好きじゃなかった。いつだって僕のことを軽く見ていると思っていた。僕のことを蔑んでいると思っていた。でもそれは間違いだった。お爺様はわからないけれど、父さんは僕のことを考えてくれていたんだ……だから僕は父さんの志をつぐ」

「はい」

「桜、お前が間桐の魔道書だというのなら、お前は間桐の当主である僕のものだ」

「はい」

「だからお前の本当の親が迎えに来ても、お前は帰さない」

「はい、兄さん。私、兄さんとずっと一緒にいます」

「当然だ、お前は僕のものなんだから」

「はい、私、兄さんのものです、絶対に。だから私を誰にも渡さないでね。きっときっと守ってください」

「当然だ、お前は僕の妹だ。兄貴は妹を守るものなんだからな」

そして幼い少年と少女は、見つめあったまま微笑みを交わした。
その両手はしっかりとお互いの手を握りしめていた。

遺志（後書き）

騙されている……。

慎二は自分ではなく桜の方が正当な後継者だと知らなかったが、間桐が魔術師の家系だということは知っていました。

しかし、騙されている……。

黄昏の中で（前書き）

いよいよアニメ始まったね……

見れないと嘆いていたらネットで見られるらしいので、よかった。

そして今回も説明しかしていない謎。
アクション書ける人がうらやましい。

黄昏の中で

冬木において四度繰り返された聖杯戦争……その魔術師たちの闘争に本来ならば関係ないはずの聖堂教会が介入して来たのは第三次聖杯戦争の頃だったという。

だが否、第二次聖杯戦争終了直後に冬木の霊脈上に冬木教会が建設されたことからも、聖堂教会の介入はそれ以前からあったといっていい。

その聖堂教会の関与を、冬木の地に集った魔術師たちが認めたのは異例の事態であった。

そもそも聖堂教会と魔術教会とは表面上こそ協定関係にあるものの、その実態は水面下で今も血みどろの闘争を繰り返している不倶戴天の間柄である。しかし相反する主義を持ちながら共に“神秘の隠匿”を重視する二つの組織はここに奇妙な協力関係をもった。

それはこの冬木の地……つまり何も知らない一般の民たちが多く暮らす、一見なんの変哲もない一地方都市において隠匿するべき神秘の業を多用した戦争を行うという、とても正気ではない魔術師たちの乱暴に対して、それが避けられないモノならばできるだけ被害をなくそうと聖堂教会が判断したためだった。

魔術師側にしても、宿敵ともいえる教会の干渉には苦々しい思いだったが、教会には魔術師には到底用意できないモノを用意することが出来た。

それは『人間』である。それも『事情を知っている一般市民』であった。

魔術師は個人主義だ。それは魔術協会という巨大な組織に属そうとも変わらない。彼らは一子相伝の業そのままに、他人を拒絶する。自分の後継者以外の子供には自分が魔術師であることすら伝えない

という者がそれ以外の他者とどうして深く交わられようか。ゆえに魔術師が神秘の行使を何も知らない一般人に見られてしまった場合、その人物を殺害するか魔術で記憶を書き換えるしかないのだ。

だがそれは聖杯戦争のような大掛かりな儀式では通じない手である。七人の魔術師と七人の英霊……そのような脅威が命がけで戦うのだ、神秘の存在に勘付く者を全て殺害していたら聖杯戦争が終わる頃には町は無人になっているだろう。

ゆえに聖堂教会である。聖堂教会は魔術協会と違って同じ神を信じ、その代弁者たる法王に忠誠を誓う者たちが集う組織である。つまりは“信仰”という名の唯一無二の価値観を共有する“同じ巣に住まうミツバチたち”なのだ。それぞれが役割を持ち、その役目を果たすことを喜びとする者たちなのだ。

警察、マスコミ、病院、学校、一般家庭……ミツバチたちはどこにでもいる。過去の英雄たちの戦いによって行われた破壊の後を、さも心無い若者たちの火の不始末が原因であるかのように偽装するのは魔術師という名の個人には到底できないことだ。

ある者は警官になり、その一生の大部分を冬木の一角にある小さな交番で過ごすだろう。ある者はホテルマンとなり、順調に出世して支配人になるかもしれない。

彼らは魔術など見たこともないただの一般市民であり、死ぬまでそうであり続ける。同じ信仰を持ち、休日に冬木市に一つしかない教会のミサに通っているということ以外何の共通点もない彼らは、しかし魔術とは違う力で冬木の地を確実に支配していた。

昨年の聖杯戦争において、彼らが成したこと……ある刑事は冬木を震撼させた連続殺人犯を突き止めながら、それを隠匿した。その犯人の男が、聖杯戦争の一角をになう“キャスター”のマスターであることが判明したためであった。それは警察官としては背信行為であっただろうが、件の殺人鬼が英霊という最強のボディガードを連れていることを考えれば、犯人を捕縛しようと警察が動くことそ

のことが、聖杯戦争における民間人の死者を増加させる原因となっただろう。

ある男は自分が支配人を勤めるホテルの最上階に宿泊している外国人の男女が、まさしく聖杯戦争の関係者であると勘付き、それを監督役である神父に伝えた。彼はいずれ自らの務めるホテルが敵に襲撃されるであろうと予測をたて、そのための準備を怠らなかった。彼が客室の大半を架空の人物か同じ協力者で埋めたため、敵の魔術師の仕掛けた爆発物がそのホテルを崩壊させたとき、実際に避難した宿泊客は普段の客数からは考えられないくらい少数であった。

彼らの役目はそれだけであった。マスターの一人が殺人犯だったのは偶然であり、冬木に数多く存在するホテル群から男の勤めるホテルが選ばれたのは魔術師の意志である。彼らはただ砂漠の砂粒ほどの可能性のために、それぞれ刑事とホテルマンとなり、数十年の長きを勤め上げ、周囲の信頼を得たのだった。

「つまり、この冬木においては警察の上層部には聖堂教会の関係者か、関係者の協力者が少なからず入り込んでいるわけだ。いずれも正当な手段で就職し、勤勉に務めることで出世した者たちで、彼らはどこにでもいるありきたりな公務員であり、誰かの家族であり友である……聖杯戦争が始まるまでは。そう、英霊同士の戦いの痕跡をガス爆発だと発表したり、爆発物で破壊されたホテルが欠陥構造だったということにしたり……そんなことをしても周りに疑われないために必要なことは何か？　それは信頼、つまり実績がものをいう。それまで一度も偽りをいったことのない者の言葉を“今度は嘘かもしれない”などと一々疑うだろうか？　いいえ、今まで偽ったことがないのなら、今度だって本当のことを告げていると大抵のものが思うでしょう？　彼らは一つだけの偽装を成すために誠実にこの冬木に生き、そして死ぬ。もっとも大抵の者が“嘘”をつく機

会なく一生を終えるが」

残照の光が差し込むダイニングルームにおかれた大きなアンティークのテーブルに、飲み終わった紅茶のカップをおいて言峰綺礼は話を締めくくった。

つい先刻、我が子と共に退院したばかりであり、久しぶりの我が家であった。帰宅した途端空腹を訴えてきた王様のために、とりあえず冷蔵庫にあるソーセージなどの肉類を焼いて、それにオムレツと焼いたトーストをつけるという簡単料理でごまかすことにした。

そして今、本人は何も食べずに紅茶だけを飲んでいる。

「ふむ、それは魔術師どもには到底用意出来ぬシロモノよな」

厚切りトーストにオムレツをのせて豪快に口にねじ込んでいたギルガメッシュは、ほんのり焼き目のついたソーセージを三本まとめてナイフで串刺しにしながら興味なさげに呟いた。

西日に照らされた食堂は暗く、だがまだ灯りをつけるほどではない。

黄昏の中で金髪の男の豪快な食事をなんとなしに見守っていた女は膝の上に乗せていた我が子がむずかるさまに気付いた。綺礼は片手でシャツのボタンを外し、下着を上に持ちあげると、あらわになった乳房を抱き上げた赤ん坊の口元へ押し付けた。甘い母乳の匂いを嗅ぎつけた赤ん坊はさっそく小さな口で吸い付いてきた。

ギルガメッシュは女が我が子に乳を与える様を見て、無意識に目を細めた。

そこだけを切り取ってみれば、芸術ともいえる光景だった。女の乳房は白く、甘いまでに円やかである。そして女の腕に抱かれた乳

児は愛らしく、たどたどしく、しかし一心不乱に乳を飲もうと口を動かしている。その光景は見る者の心をとろけさせる優しさに満ちている。

かつて我が子を初めて腕に抱き、己と同じ真紅の瞳で見つめられた時、ギルガメッシュは説明できない戦慄を味わったものだ。

自分が父親になるということを理解していたつもりだったが、本当に父親という存在を意識したのはあれが初めてだったと思う。“そうか、我は父親になったのか”と理解したのだった。王にとってそれは大いなる困惑と動揺だった。

もちろん広大な土地を支配する王であったギルガメッシュは生前も多くの女を抱き、何人もの子を産ませてはいた。だがそれらの王子、王女はどちらかというと母親となった女たちの親族、つまり臣下に対して王から下賜したモノであり、自身の子供という認識は薄かったように思われる。

実際のところ、記憶の中のギルガメッシュの父王は、かつて処女で神の子を身ごもった女の許嫁だった大工の男のように、実子であるはずの女神の息子を自らの上位者と認識していた。『半神』であった自身が父親にとって“女神より下賜された賜りもの”だったのだ……ゆえにギルガメッシュにとって『父親』という“自分を導く男”は存在しないも同然だった、父親という存在の明確なイメージを、英雄王は持たない。

「つまり、それが聖堂教会が聖杯戦争の監督役を務めることになった理由か」

「はい、魔術師とは自身か、もしくは自身の血統が『　』に至ることを目的とする者たち、つまりは自らの目的のために命を捨てることは可能でも、他者の利益のために自分の人生を使うことは出来ない。しかし神秘の隠匿にはそういう者たちの存在は必要不可欠だ、

よって彼らの中から必然的に“外道”もしくは“始末屋”と呼ばれる、魔術師というより魔術使いを名乗る金銭稼ぎが生まれるわけですが、少数である彼らは貴重でもある」
「六十年後、起きるか定かでない事態のために待機していろとはいえぬか」
「いえなくはないだろうが、いくらの金が必要か見当もつかないな」

だからこそ聖堂教会の監督役の申し出を拒めなかったのだというのが魔術師たちの本音であった。
綺礼は腕の中の赤ん坊を揺らさぬように器用に自分の肩をすくめ、苦笑した。

「つまり信者は人件費がタダなのだ。自分で生活費を稼ぎながらこちらのために働いてくれる。なぜなら神父がファザーと呼ばれるように、我々は血ではなく魂の絆で結ばれた家族だからだ。家族のために尽くすのに理由はいらない、見返りも求めるべきではない……と教会は説いている」
「洗脳か。我の時代にも子供をそそのかして暗殺者に仕立てる奴らはいたぞ」
「信仰といいなさい。一人は皆のために皆は一人のためにです。美しい献身です」
「貴様の口から献身などという言葉を聞くとはな……神の血を引く我がいうのもなんだが、宗教とは結局権力の別名よ」
「露骨だ、ギルガメッシュ。そしてこの私が献身的でないと？そんなことをいう英雄王は明日から自分で食事を作るがいい。あるいは出前でもとるがいい。寝具類も自分で洗濯しろ、大丈夫だ、乾燥まで全自動だから。英雄王、アイロンがけは得意か？」

「……つまりその人脈を使えば『有罪確定寸前で無罪の証拠があちこちから出現する』という現象を簡単に作り出すことが出来るわけだな？　警察に拘束されていた雑種をどうするかはお前の胸三寸であったと」

男が舌戦中の女に停戦を申し出る定型的な戦略に“いきなり違う話題をふる”というのがある。英雄王である男がその戦略を使用したことに綺礼はちょっと愉快な心持になった。だから追い打ちをかけるのは止めておいた。

「いいがかりだ。私はただ監督役だった男の娘であるというだけの部外者にすぎない。任務半ばで殉職した父の役目を暫定的に引き継いだ聖杯戦争中ならともかく、すでに還俗して聖堂教会と縁が切れた私に、彼らに指示する権限などあるはずがないだろう？　……私はただ少し呟いただけ。それを聞いた人たちが私のために自主的に何か行動を起こしたとしても、それも私のせいなのか？　いいえ、それは彼らの真心というもの。親しい者を喜ばそうとする優しさのどこに作為があるでしょう」

「なるほど」

自分一人で飲むために年代物のワインをグラスに注ぎながら英雄王は喉の奥だけで笑った。

脂っこい料理にピッタリな濃厚な赤である。綺礼がうんざりしたような眼差しを投げかけるのは、本人が妊娠が確実になった時点から禁酒しているためである。少量のアルコールは害にならないと思われるのだが、「胎児は母親の血で育てるものだから」といいはって血液中に溶けるアルコールの摂取を拒絶して久しい。それは母乳

で我が子を育てている現在も続行中で、そうであれば目の前で一人の酒宴を楽しむ男を苦々しく睨むのは当然のことだった。

「なんだ、飲むか？　遠慮はいらんぞ、元々はお前の酒蔵の酒だ」
「飲まない」

つんと綺礼は横を向いた。ふてくされたようなそれは、この女にしては幼い仕草だった。
ちょうどその時、満足したらしい赤ん坊が乳房に吸い付くのを止めたので、綺礼は優しくその背中をたたいてやった。満足げなおくびを出した赤ん坊は、母親に口を拭ってもらうと疲れたのかすぐに目を閉じてしまった。

「寝かせてくる」
「そうしろ……時に綺礼」
「なにかな、ギルガメッシュ」
「ずいぶんと手の込んだ弄び方をしていたが、実際のところお前はあれをどうしたいのだ？　マスターの意を酌んだつもりで殺してから文句を言われるのも業腹だ。そこのところの本音をぜひサーヴァントたる我に聞かせて欲しいものよ」
「ふむ、……どうしたいか、か」

綺礼はひっそりと笑った。

「それは今日帰ってくるあの人の目を見て決めるとしよう」

黄昏の中で（後書き）

次回は士郎ＶＳ綺礼（多分嘘予告）

ヴェルデにて（前書き）

兄上再登場。
待たせたな？

ヴェルデにて

忘れられない記憶というものは、誰にでも一つは存在するものだ。
そしてそれは何も劇的なものとは限らない。
もう卒業してしまった学校の、もう来ることのない教室の窓から見た夕焼け色の校庭。少年の頃、船に乗って帰ってくるはずの父親を、傘を持って迎えに行った港。
今はない最愛の女と何度も歩いた桜並木。

士郎には忘れられない記憶がある。
それは、封印指定の魔術師として終わりのない逃亡生活を送っていた彼が、ある寂れた田舎町に立ち寄った時の出来事だった。首尾よくガソリンを補給した士郎は、昼頃ということもあって近くの飲食店で軽食を取ることにした。その町は、士郎のような補給に立ち止まる人々相手に商いをして細々と存在している町だった。
異変を感じたのは、ひさしぶりのまともな食事を堪能した士郎が食後のコーヒーを飲み終え、勘定を払おうと席を立とうとした時だった。
味はいいものの、広いコンクリートの倉庫を流用したような薄暗い店内の、さらに暗い奥のほうで、この店の従業員らしき者たちが集まって何か騒いでいる。
他の客たちも異変に気付いているのか、その方角をちらちらと見たり、連れとささやき合っている。

捨て子らしいよとつぶやいたのは、誰だったのか。
女と子供の二人組で来店したのに、女の方がいつのまにか姿を消して、もう何時間も姿を見せない。子供の方に事情を聴こうとして

も何もいわないらしい。
騒動に近づくのはまずいとわかっていたが、士郎はその場所に行かずにはいられなかった。それは正義の味方になり皆を救おうとしながら、今は他人どころか自分自身さえ救えない男の未練だったのかもしれない。
他のやじ馬たちにまぎれて士郎は件の子供を見た。そして世界を放浪し、いろいろなものを見てきた男はとても悲しいことを悟った。
店の一番奥のテーブルに座っているのは八歳ぐらいの少年だった。その前には綺麗に食べつくされた一人分のランチセットの皿が置かれていた。少年は周囲の誰とも目を合わせることなく、自分の袖口をつまんでは手を打ちつけるという動作を繰り返していた。
少年は明らかに障害者であり、ならばいくら問い詰めようと、ここへたどり着くまでの過程を説明できるはずがないだろう。
店長らしき男が悪態をつき、警察が呼ばれることになったので、士郎は周囲の目をひかないようにひっそりとテーブルに料金を置いて店を出た。

……その後のことを、士郎は知らない。そのまま彼はその町を出て行ってしまったから。
案外、捨て子というのは誤解で、我が子が警察に連れて行かれたと知った母親があわてて迎えに来たかもしれない、そうであって欲しいと士郎は思う。
士郎はただ、時々ふいにあの光景を思い出すだけだ。
能面のような表情で、ひたすら奇妙な動作を繰り返す少年と、それをおぞましいものであるかのように顔をゆがめながら見ている周囲の人間たちの姿を。
何もせずにそれに背を向けた自分を。

努力したら報われるべきだと信じていた。
誰もが笑顔であればいいと願っていた。
この道は間違いではないと誇っていた。
その時の思いと共に、
……心に鉛が溶けていくような痛みを感じながら、何度も思い出している。

冬木市の地名は冬が長いことから付けられたらしい。だが長いといっても冬木自体は温暖な地方都市であり、本来は雪が降ることもまばらであった。
それでも十一月にも入れば寒さも本格的になり、道にはマフラーや手袋をした人たちがちらほらと見えている。ここ、新都において最大規模を誇るショッピングモール『ヴェルデ』の中はすでにクリスマス模様だ。
そのヴェルデの二階に開店しているカフェ『ミス・マープル』はヴェルデ中央の吹き抜けに隣接しており、壁が一面のガラス張りとなっている。つまりその店内からは中央入口から入店する客の姿を見下ろすことが出来るのだ。『ミス・マープル』はヴェルデにおいての待ち合わせの定番場所であった。
そんなカップルや少女たちの多く集まる明るいカフェの一角にその男はいた。
その男は異質だった。まとう色彩からして周囲から浮いていた。

まず老人のような白髪だった。ハリウッド映画の戦士のような鍛え抜かれた肉体は、黒人とも黄色人種とも違う褐色。そんな派手な色彩の男が、漆黒のエナメルのジャケットや、これも黒の革のブーツを身にまとい、おまけに顔の半分を覆うようなサングラスをかけてガラスの壁側の一番見晴らしのいい席に陣取っているのだから、目立たないはずがなかった。

その証拠に他が混んでいるのにもかかわらず周囲のテーブルに客の姿はない。今、入店しようとした親子連れは入口で無言で引き返していった。

男は自分が店に対して多大な営業妨害をしていることを気付いていないのか、リラックスした仕草で店自慢のオリジナルブレンドコーヒーを一口飲んだ。

その口から満足げな吐息が漏れる。

「ああ……、やっぱり娑婆はいい。空気が違う気がする」

その言葉を聞いた二つ隣のテーブルのＯＬらしき女性は脱兎の勢いで伝票をつかんでレジに向かった。彼女のテーブルには半分以上残されたクラブサンドとカフェオレが取り残されたが、いつまでたっても店員は皿を下げに来ない。

男はもちろんそんなことには気づかない。彼の意識はガラスの壁の向こう側に見える子供服の専門店で、中年の女に連れられて買い物に来ているらしい二人の少年と少女にそそがれていたからだ。

「桜……慎二……」

兄妹なのだろうか、少女は少しだけ背の高い少年に手を引かれながら、二人は色とりどりの服の間を歩き、時々お互いの体に洋服を押し当てていた。一緒にいる女はそれを微笑ましげに見守っていた。心温まる光景であった。男の頬も緩み、ふふふと思わず笑いが漏れた。

厨房裏にて行われた壮絶なじゃんけん合戦の敗者となったアルバイトの青年は、皿を下げようと二つ隣のテーブルに近づいたが、突然笑い出した男の姿に結局そのまま通り過ぎて戻っていった。

もちろん男は気付かなかった。

男が見守る前で二人は何着もの洋服を買い込んでいく。どこにでもいる仲の良い兄妹のようだ。そう見えることが何よりも男にとって嬉しい。

「さてと……そろそろ帰るか」

さあ、“我が家”に帰ろう。

そこに“決着”をつけなければならない相手が待っている。

士郎は伝票をつかむと、もう一度振り返り、桜と慎二の笑顔を焼き付けてからレジに向かった。

たった一杯のコーヒーで数時間粘った客に対しても店の対応はよく、帰り際の「ありがとうございました」という元気な声にはまぎれもない喜びが宿っていた気がする。

いい店だ。コーヒーも美味かったし、また今度も来ようと士郎は思った。

ヴェルデにて（後書き）

短いが、今回ここまで。

お家に帰ります。

兄と妹（前書き）

数時間で書いたので、文章としては破綻しているかも。
でも一晩おくと、恥ずかしいとか、この説は受け入れてもらえないなと思ったりして、書きなおしてしまいそうなので、このまま投稿。

エミヤシロウの生き方は絞首刑台にのぼるまで多くの人に忠告、懇願されたと思う。
どんなに自分の生き方が間違いではないと思っていたとしても、自分を大切に思ってくれている人たちの悲しみに何も感じなかったわけではないと思うのです。

兄と妹

『そんなモノに生きている価値はない。
何よりこのオレが確信しているのだ。衛宮士郎という男の人生に価値などない。
……ただ救いたいから救うなど、そもそも感情として間違えている。人間として故障したおまえは、初めから、あってはならない偽物だった』

言峰士郎が我が家にたどり着いた時、辺りは大分暗くなっていた。
その日は満月なのか、小さな丸い光が濃紺の空にぼんやりと溶けている。
大型バイクを車庫に入れた後、士郎は虫の声がかすかに聞こえてくる玄関へと通じる小道をゆっくりと歩いた。
自分でも思っていたよりも静かな心持だった。まるで、妹のように思っていたはずの後輩の少女のことが、自分にとって何物にも代えることなど出来ない宝物なのだと気付いた夜のようだった。ああ、そうなのかと思った。そうなのならば仕方がない、とも。
正直なところ、諦めに似たその納得は心地よかったのだ。

「……そのサングラス、もしかしてかけたままでバイクに乗って来たのですか？」

面白がるようなささやきが、ふい士郎に投げられたが、すでに“

彼女”がいることは分かっていたので、士郎は驚かなかった。
“妹”が月明かりの中、長く黒いドレスをまとって立っていた。
彼女がかつて着ていたカソックに似た深い色の長袖のワンピースは、ヴィクトリア王朝時代の女家庭教師が着るような地味なものだったが、士郎にはそれが対魔術師に特化した武装であると気付いた。
おかえりなさいとは、彼女はいわなかった。
ただ黙って微笑みを浮かべていた。

「ああ、せっかく変装用に買ったんだから風よけに。だからメットはかぶってこなかった」
「それはもう一度警察に拘束されても仕方がありませんね。違反ですよ？」
「そんな不手際はもうしないさ」

士郎は苦笑してから顔の半分をおおっていたサングラスをはずした。その下からは柔和な顔が現れたことに綺礼が少し不快げな表情を見せた。

「おかえりなさいと、いって欲しいですか？」
「うん、ただいま、俺の甥っ子はどこかなって、いいたいところなんだが……実は金使っちゃって今日はコーヒーしか飲んでない。なんか食わせてくれ」
「お前には心底がっかりだ」

くうと、いいタイミングに腹の鳴った兄の姿に、綺礼の深い沼のような暗い瞳が、ますますどんよりと曇ったのを士郎は見た。

それでものこのこと二人で台所に行って冷蔵庫をのぞいてしまうのは、言峰綺礼がどれだけ歪んでいるかということを証明するエピソードの一つになるだろう。

「今日は寒かったですから、夕ご飯はてっちり（ふぐちり鍋）でした」

「なんと！？　俺のいない間にそんな豪勢なことに」

「今日は私の退院祝いをするからとギルガメッシュが。新都の専門店に材料だけ注文したらしいです。私の祝いだといいつつ、てっさ（ふぐの刺身）もひれ酒も独り占めでしたけどね」

冷蔵庫をのぞきながらの綺礼のつぶやきに、自分でお茶を入れていた士郎は驚愕の声をあげた。綺礼は冷蔵庫の中から半透明のタッパーを取り出した。

「シメの雑炊をつくる前にスープを取り置いておいたので、これで何か作りましょう……ああ、焼売を包もうと思って買った湯葉があった」

「ふぐ出汁で湯葉のスープか、豪勢だな。シイタケかサヤエンドウあるか？」

「両方あります」

「じゃあ、それも入れよう、あとは卵で……」

ものの十分足らずでスープは出来上がり、士郎は座って美味なそれを食した。
綺礼も向かいの席に座ってじっと士郎を観察の眼差しを注いでいた。彼女の前には何もないが、士郎はかまうことなく自分の食事に専念した。

「……」
「……」

五分もかけずスープを飲み干して、士郎は深い息をついた。

「……」
“何を企んでいる？”て、そんな顔だな」
「……」
「桜と慎二の顔を見てきたよ、二人とも笑顔だった。俺が知っている桜の笑顔だった。慎二も、俺と出会ったころに戻ったみたいだった。……いや、この世界の慎二とはあったことがなかったけれど、俺の知っている慎二はいつだったか、あんな顔して妹の誕生日祝いのケーキを買っていったことがあったんだ……“あいつの誕生日を祝ってやるのは僕ぐらいなもんなのさ”って笑って」
「そうですか」
「その前には町中をうろついていた。臓硯の気配を探したんだが、見当たらなかった」
「はい……」
「お前からの伝言は聞いた。『間桐臓硯という男はもうどこにもいない』……それは間違いないんだな？」
「そうです、“間桐臓硯という男”はもういません、ええ、どこ

にもね」
「そっか、ならいいんだ」

士郎は綺礼を見て、苦笑した。全てを受け入れた殉教者じみた笑いだった。義兄の記憶の中で見た赤い弓兵はそんな笑顔で絞首台にのぼったのではないか。

「お前が何をして、どうして俺にそれを教えてくれなかったのかわからないが、……多分、俺を囮にして臓硯の目を欺いたんだとは思っているが、そうならもういいんだ。俺の望みは叶った。だから、黒鍵隠してヤル気まんまんのお前には悪いけど、俺はお前と戦う気はない」
「何故？　私が何をしたのか、問い詰めないのですか？」

幼児が大人に「赤ちゃんはどこから来るの？」などと聞く時のような無邪気な風情で綺礼は首をかしげた。

「それを聞いたら、俺はもう“言峰士郎”じゃいられなくなるだろう。それが綺礼の望みなのか？」
「さあ……」

本当に分からないのだろう、綺礼は少し戸惑ったようだった。

「そう、多分、そうなのかもしれない」

「俺がお前の家族になったのは、お前がそれを望んだからだ。それなのに俺の方からお前を切るように差し向けるなんて、ちょっと無責任じゃないか」
「……」
「綺礼、前に俺にいったよな、人は自分で思っているほど自分を理解していないと。その時には決して見えないモノがあると。……綺礼、お前はわかっていないと思うからいうけど、お前は基本的に自分に好意を持つ者を信用していない。自分のことを好きだなんて、そいつは騙されているか、勝手な妄想を見ているのだと思っている。……だってお前の本質は悪だからだ。悪は人に疎まれ、嫌われるものだからだ……だから自分を本当に理解しているならばそいつはお前を忌み嫌うはずだと思っている……違うか？」

それまで余裕の笑みを浮かべていた女の目が見開かれた。言峰綺礼の驚愕の表情を初めて見た士郎は悪戯が成功したように得意げに鼻を鳴らした。

「ギルガメッシュみたいにお前を理解しながら面白がっている奴もいるだろう。でも基本的にお前の周りの人たちは、たとえば綺礼の親父さんみたいに自分に都合のいいお前を盲目的に信じているか、凛みたいに本能的にお前を拒絶するかのどっちかだ。……だからお前は俺に嫌われたかったんだよ、俺に自分を理解して欲しかったんだ、お前って女は。俺があんまり簡単に“兄貴”ってポジションに収まったから、不安になったんだな？　衛宮士郎は言峰綺礼が悪だと知っているのに、なんで受け入れられるのかって。だから俺の前に自分を突き付けたんだ、俺に否定されて、自分が安心するために」
「私が安心したかった……？」
「誰だって安心したいものなんだよ、綺礼。……俺だってそうだ」

お前は知っているだろうけれど、俺は八歳の時、こことは別の世界で起こった聖杯戦争の巻き添えで全てを失った。命はもちろん切嗣に助けられなければ死んでいた。

そして中身を失っていた。俺は空っぽで、だから切嗣の理想に憧れた。

空っぽだった俺には何か、中身を埋めるものが必要だったからだ。

……それは呪いだと、偽物だといったのは誰だったか。

「いろんな人が俺にいった。そんな理想はおかしい、最初から破綻している、自分を大切にしない人に、誰かを救うことなど出来ない……俺が皆を救うといきまきながら、その“皆”に自分を入れていないことを、怒った人も、泣いた人もいる。それでも俺は親父の遺志を継いで正義の味方になると誓ったから、それを貫こうとしていた。この身は誰かのためにならなければならないと、餓えるように思っていた。……俺はそれを苦痛とは思わなかった。誰に理解されなくても、理想を貫く、それは間違いなんかじゃないと確信していた。……でもそれは別に俺が健気だったというわけではないと、言峰士郎になってようやく気付いた」

じっと自分を見つめてくる妹の眼差しは、かつて衛宮士郎を切り裂いたものと似ている。

切り裂き、何かを取り出そうとするメスのような視線。士郎はだからそれを差し出した。

お前が欲しいものはこれだろう、と。

いいんだ、もっていけ。お前と俺は種類こそ違うものの、同じ欠陥者なのだから。

「他人にどう判断されようとも、本当に俺は、それを苦痛と思わなかったんだ……なぜなら俺にとってはそういう生き方の方が“楽”だったから」

はたから見れば自分への見返りが何一つないのを承知してなお行う救いは、報われない献身は、つらく悲しいものに見えたのだろう、だが衛宮士郎にとっては。

「そう、俺にとって“自分を勘定に入れない”っていうことこそが、意識しないで自然に出来る“楽”なことだった。そういう人間に“他人を助けるために身を呈す”ことを要求される生き方が指示された。それがあんまりにもすんなり馴染んだもんだから、自分でもコトミネシロウになるまで、正義の味方を止めるまで気が付かなかった。でもな、自分のことを一番に考えるっていう方が俺には難しいんだ。大事な桜の味方になって、桜が悲しむから桜の大切な俺を大事にするとか、そんな生き方をすることは出来ても、自分自身のために何かをしたいとか、そういうことはわからない。空っぽの俺には分からない。言峰綺礼にとって誰かに優しくしたいって気持ちを持つことが、どんなに努力しても成し遂げられなかった奇跡ように、衛宮士郎にとって自分のために生きるってことは、奇跡でもおこらなきゃ無理な話なのさ」

だからお前がどんなに俺を傷つけたとしても、傷つけようとしたのが俺である限り言峰士郎は言峰綺礼を拒んだりしない、だって、理由がない。

言峰士郎が勘定に入っていないなら、お前は結局誰も傷つけてなんかいないじゃないか……そういって男は、本当に優しい笑顔で笑った。

兄と妹（後書き）

だからそういう生き方を自分の意志で選んだというより、気が付いたら選んでいた。やめようと思ったことがあっても、結局戻ってしまったのではないかと。

イメージはネット依存（笑）

この妹にしてこの兄あり。

だって原作の神父もアーチャーとは別の意味での主人公の鏡らしいから。

小春日和（前書き）

短い話というか、前回の蛇足。

つまり士郎は剣の英霊に「女の子を戦わせるなんてダメだ」とかいっちゃう男だってこと。

小春日和

そもそも士郎に怒りがなかったわけではないのだ。

信用することは危険だと警戒はしていたものの、共闘できる相手だと思っていた。交渉や約束ごとにおいてごまかすことはしても嘘はつかない、伝承にある悪魔のような女なのだと。だが魔法陣の中の悪魔は決して偽りを口にできないと、その言い伝えこそが悪魔の用意した罠だったとしたのなら、自分は最初から掌の上で踊らされていたというのか。

煮えたぎるような怒りを胸にたぎらせ、町をさまよった。このまま帰るわけにはいかなかった。彼女だけが家にいるのではない、あの場所には黄金の髪の男がいて、産まれたばかりの赤ん坊もいる。もしも、最悪の場合戦闘になったとしてあの男が女に加勢しないという確証はない。大事に思っているわけではないだろうが、塵芥に等しい雑種と己が子を産ませた女ではその価値には雲泥の差があるだろう。士郎が彼女に危害を加えるのを許すとは到底思えない。あの男は英霊、たとえ現在のこの身が膨大な魔力の塊である予備令呪を宿していようとも、確実に勝てると思うならそれはとんだ妄想だ。ならばこのまま帰宅して感情のままに言峰綺礼を弾劾することは確実な死を意味した。

胸を圧迫する激情にヒビが入ったのは、兄と手をつないで歩く少女の笑顔を見たからだ。言峰綺礼が桜に何をしたのかはわからないし、推測することもできない。それでもその笑顔には見覚えがあった。それは聖杯戦争が終結してから数年後、春の柔らかな日差しの中で行われたささやかな祝言の席で、最愛の妻が自分に向けてくれたものだった。

あの笑顔を浮かべることが出来るまで妻が何年も苦しんだのを知

っている。彼女が自分には恐ろしいことなどもう起きないんだ、起きたとしても誰かが助けてくれるんだと納得するためには長い時間が必要だった。まわりの全ての人が笑顔を浮かべ、自分の幸福を喜んでくれているあの瞬間まで、彼女はどこか怯えを捨てられなかった。そんな彼女を安心させてやれない自分がふがいなかった。

だからこそあの瞬間の笑顔を衛宮士郎はいつまでも覚えていたのだ。

言峰綺礼が桜に何をしたのか、知りたくないとはいわないが、それでも自分では到底成し遂げられないことをしたことは確かだった。桜のなかで何がどう変わったのかはわからない、案外間桐においてのつらい記憶は消されてしまったのかもしれない。だがどんなことにせよ、その笑顔に世界への信頼があるのを、士郎は見た。幼い子供ならば誰もが持つ、自分の身近な人、周囲への信頼……自分には価値があると無条件で信じることのできる心を桜が取り戻していたのは確かだった。

ならば士郎の怒りはどこに行こう？　士郎の怒りは桜を救おうとしたことを妨げられた怒りだ。いまだ苦しみの中にいるであろう彼女を思っての怒りだ。彼女がすでに救われているのなら……そんな怒りは意味をなくす。

いささか呆然とした風で士郎は家に戻った。

言峰綺礼は夜の庭に立っていた。士郎を迎えるために。

いつからそこに居たのだろう、士郎には綺礼の体がすっかり冷えているのがわかった。そしてこちらを見つめる純粋な観察の眼差しをうけて、士郎が抱いていた怒りは紅茶に投げ入れられた角砂糖のようにほろほろと崩れて溶けていった。

そうか、俺が悪かったのかと士郎は思った。そうだ、お前の気持ちをわかってやれなかった俺が悪い。そんなに不安だったのか、不安にさせてしまったのか。

言峰綺礼は自身を悪だと認識している。それは綺礼自身の本質と認識の乖離を意味していると分かっていたはずなのに、綺礼自身が自分を“拒絶、または排除すべき存在”と判断していると知っていたはずなのに、俺はまるで大事なもののように彼女を受け入れてしまった。混乱しただろうし、疑っただろう、本当にこの男は自分を理解したうえでその判断を下したのかと。この男もかつての師や父親と同じなのではないかと。

だから自分の“本当”をぶつけてきたのだ、親にうまく自分の意志を伝えられない幼い子供が癇癪を起こすように。

“貴方はちゃんと私を見ているの？”と。

「だから、綺礼が俺をいらないっていうまでは、俺は綺礼の兄さんだよ」

「……貴方が何を言っているのか、わからない」

途方に暮れたような声色は幼い子供のようで、士郎を破顔させた。かわいいなと思ったのだ。俺の妹は結構かわいい女だ。

ああ、こんなかわいい女ならば一緒に生きていけるだろう。

そうだ、俺たちは家族なのだからこれからも共に生きていくのだ。

家族に望むことなんて、結局はそれしかないではないか……。

その次の日は小春日和の名にふさわしい暖かな晴れだった。
士郎は綺礼と二人で館中を掃除して回った。出産や警察の拘束やらで結局十日近く無人だった館はやはりうっすらと埃がつもっていて、午前中いっぱいをかけて掃除しなければならなかったのだ。しかも一人だけ家に戻ることが出来たギルガメッシュのせいで常に整頓されているはずの室内は掃除が苦手な独身男性のアパートみたいにあちらこちらに物が散乱していた。英雄王には使ったものを元の場所に戻すという習慣がないらしい。世界の宝物をすべておさめたという蔵の中を一度覗いてみたいものだと士郎は思った。中はさぞやカオスであろう。そういえば本人も中身を全て把握しているわけではないといっていた。
なぜか得意げにふんぞり返って自分の整頓能力のなさを誇る英雄王を思い出して士郎はげんなりとした。

「綺礼と綺礼の赤ちゃんはともかく、奴とも一緒に暮らしていくのか……」

いや、英雄王は士郎には最低限の干渉しかしてこないのでいいのだが。彼の中では士郎は同棲している女が飼っているペットのようなものらしい。士郎としてはギルガメッシュは綺礼の本性を知ってなお綺礼を肯定してくれる稀有な男なので、できれば仲良くしたいと思うのだが、かの英雄王相手にそんなことを考えている時点で士郎はギルガメッシュに殺されてもおかしくはない。その辺のことがどうしてもわからないのが、衛宮から言峰に変わろうとも変わらぬ士郎であった。

「まあ、おいおい馴染んでいくさ。結局はあいつって俺の弟ってことだもんな」

などと、英雄王の耳に入ればただでは済まない言葉をつぶやきながら、言峰士郎はついでに乗用車も洗ってしまおうと思って清掃道具を持って車庫へと歩いて行った。

小春日和（後書き）

それを神の視点で見つめる謎の師匠とブルマがいたのなら、彼女たちはこう叫んだだろう。

“おしい、そのセリフをもう二分後にいっていたら冷蔵庫あさっている金ぴか野郎の耳に届いたのにな～”

“大丈夫っすよ、師匠、たとえ聖杯戦争中でなくても、ここには死亡フラグが満載ですから！”

……これでストックが切れました。

頑張って短期間で更新したら、日間ランキングにのっていたよ！

びっくりした！

命日（前書き）

短いです。
なぜなら書こうとしていた話の前半部分だから。
あと、宣言通り前回の更新は削除しました。

命日

半年前の父の葬儀の後、遠坂凛は冬木教会に訪れていない。彼女はそもそも洗礼こそうけたものの熱心な信徒ではなかったし、冬木教会は彼女の天敵である言峰綺礼のテリトリーであるからだ。

あの薄情な女は凛が「二度と顔を見せるな」と指を突き付けた父親の葬儀の日から本当に凛の前から姿を消した。冬木教会と遠坂家は浅からぬ因縁にあるが、綺礼が聖堂教会から還俗してしまい、凛が教会の周りを避ければ本当にあっさりと彼女との縁は切れてしまった。時々訪ねてきてくれる彼女の義兄の情報提供がなければ、凛は綺礼が産んだ子供が男の子だったことも、名前を死んだ父親からとって『璃正』とつけたことも知らないままだったろう。

そういう女だと思っていたが、凛は人知れず唇を噛んだ。

坊主憎ければ袈裟まで憎いとはいうが、凛は教会を厭うようになった。どのみちまだ幼い凛では霊地冬木のセカンドオーナとしての仕事はできない。神秘の隠匿を行うための人員を提供しているがゆえに、共に聖杯戦争の舞台である冬木の土地を管理しているともいえる聖堂教会への定時連絡は当主の欠かせない責務であるが、それは他の連中がやればいい。四度の聖杯を求める企みがまたしても失敗に終わったのならば、次は六十年後。今凛がしなければならないことなどなかった。

だから遠坂凛が冬木教会に半年ぶりに訪れたのは、教会自体に用があるわけではなかった。この日のために新調した深い赤色のコートを着て、この日のために貯めていた小遣いのほとんどをつぎこんで買った同じ色の大輪のバラをもって少女が向かったのは、教会に隣接する墓地の一角にある彼女の父、遠坂時臣の墓である。

そろそろ冬木の一部を完全に破壊しつくした大火災から一年にな

る。それは、つまりもうすぐ五百人以上の人間の命日がいっぺんに来るということである。その時は日曜日以外の普段は閑散としたこの教会も多くの人が訪れるだろうことを予想して少し早い墓参りに来たのだった。

凛は一人だった。一人で父親と相対したいと思ったことはもちろんだが、凛以外の者たちに彼の墓に詣でる意思がないことを知っていたからだ。時臣の妻である遠坂葵にとって夫は死んでなどいないのだし、母方の祖父母はそんな娘を下手に刺激することなどしない。

そして現在幼い凛の代わりに冬木を管理する父方の親族たちは、そもそも魔術師の墓参りなどナンセンスの極みであると鼻で笑うだろう。

そのことは凛も承知している。薄情なのではない。魔術師とは刻印を持って継承されるもの、そして魔術刻印とは積み上げられた血脈の歴史、先祖そのものである。よって遠坂時臣は肉体こそ死して消え去ったが、その魔術師としての生涯は刻印として後継者である凛に継承されている。

ならば魔術師としての遠坂時臣は凛の腕に刻まれた魔術刻印の中にいまだ存在するということなのだ。肉体の死など魔術師たちにとっては重大なことではない。ならばこの冬木教会の墓地に眠るのは魔術師ではない“遠坂時臣”というただの男、ただの誰かの家族でしかなく、そんな残りかすに等しいモノに話しかけるためにわざわざやってくるのは娘である凛しかいないのだった。

それを凛は悲しいとは思わなかった。父は魔術師であることに誇りを持っていた。ならばこの静寂は父の本懐といっていい。だが彼の後継者であると同じくらいに凛にとって彼の娘であることは誇りであったし、父も自分の父親であることを誇ってくれていただろうと思っていた。だから父だって年に一日くらいは己の後継者が魔術師ではなくただの娘として行動することを許してくれるだろう。

凛はそれを見た時、息をのんだ。それから自分の目を疑うように二、三回瞬きをしてからもう一度、それを凝視し、自分の目がどうかしてしまったわけではないと知ってもう一度驚愕した。
凛の目の前にいるその男は教会の墓地への入り口のアーチのわきに置かれた鉄製のベンチに座っていた。一目見て印象に残ったのは、男の見事な黄金の髪でも、全体の総合金額が想像もつかない良質の衣服でも、端正な美貌を台無しにして豪快に焼き芋を頬張る残念さでもなかった。

男は一人ではなかった。その男の肩にはスリングといわれる赤ん坊を収納するための布がかかっており、その中から保温のためかミトンに包まれた小さな腕が一つのびてゆらゆらと動いている。スリングの中の赤ん坊の興味はおそらく父親らしき男の口の中に消えていく芋の塊だろう。届かないにもかかわらずそれをつかもうとする仕草を繰り返す乳児に、芋を食べている男は目だけで微笑みかけ、からかうように焼き芋はどんどん口の中に押し込まれていく。
それは何の変哲もない親子の微笑ましい一幕だった。男はどう見ても日本人ではないが、冬木はそもそも外国からの移住者が多い土地柄であるし、冬木教会はそんな異邦人たちのために便宜を図る場所だ。こんな親子が教会の敷地内でくつろいでいたって驚くようなことではない。

だが凛は目の前のありきたりな風景に目を奪われたまま硬直している。よくある親子図の中に一点だけ魔術師である遠坂凛を驚愕させるものが存在していたからだった。
金髪の男の服装は純白のカシミアのセーターに同色のジャケット、それに黒のズボンというラフな格好で、胸元に吊り下げたスリング

も同色のカシミアであるようだった。その品質は良家の子女である遠坂凛にしても唸らずにはいられないほどに上質のものであり、まだ若く見える彼がそこらの学生やサラリーマンではないことは一目でわかった。もしも今ここにサングラスかけた黒服が着て彼を“シーク”などと呼んでも凛は納得できるだろう。

だがその純白のスリングに、アクセントとしてなのか無造作につけられている赤い石を使ったブローチ、あれの存在はそんな億万長者や王族などというハーレクイン的な理由でも納得できない異様だった。

（ちょっとまってよ、なんてことなの、あんなものが……あれほどのルビーが無造作に！）

宝石魔法の大家の跡取りとして宝石の鑑定能力を鍛えてきた凛には目の前の石の価値が恐ろしいくらいだ。確実に国家か財閥で厳重に管理されるべきレベルの紅玉が、なんてぞんざいに扱われているのだろう。凛は父の魔術礼装だった紅玉を埋め込んだ杖を思い出した。若き父に家督を託すとき渡そうと先々代が長年をかけて苦心して手に入れたというあの宝石は、だが目の前の石と比べられたら屑になってしまう。

（どうしよう……）

父の墓参りどころの話ではなくなってしまった。宝石魔術を行使する遠坂家の当主としてこの場を何もせず立ち去ることは出来ない。父親がこの場に居たら、何が何でもその宝石を譲ってもらおうとし

ただろう……宝石魔術を使う者にとって質の良い宝石を手に入れることは最優先事項といい。

そもそも宝石がなければ宝石魔術は行使できない、宝石を手に入れても質が悪ければ込めることのできる魔力の量は限られている。だから宝石魔術を行使する家系はより質の良い宝石を探すことと、それを手に入れることに労力と財力の大半をつぎこむのである。そしてうまくいかないことに魔術師にとって質の良い宝石とは魔術師でない一般人にも魅力的な宝石ということなのだから、せっかく見つけても相手が手放すのを拒むことはよくあることである。それを宥めるにも脅しつけるのにも宝石魔術師たちは労力を使ってきた。当たり前のように血も流れている。

しょせんは石だと馬鹿にしてはならない。呪われたダイヤではないが、古来よりある種の人々は石の美しさを独占するために、なんのためらいもなく同胞を殺してきたのだから。そういう者たちにとって宝石はもはや神なのだ。

凛は無意識に喉を鳴らした。

目の前には見たこともないほど良質の紅玉。しかも持ち主はそれを“信仰”している様子はない。ならば交渉するべきだと幼い魔術師は決意したのだ。

自分が幼いからとか、相手の素性が知れないからとか、そんな理由で臆していては遠坂時臣の娘は名乗れない。凛は覚悟を決めて最後の芋を食べ終わり紙袋を丸めている男の方へ歩いて行った。

なんとしてもあのすばらしい紅玉を手にするのだ。金に糸目は付けないといいたいところだが、あれほどの質、何桁のお金が動くか凛には見当もつかない。だが遠坂のものならばそれを当然の対価と納得するだろう。

（きっとお父様が導いてくれたんだ。お父様、私がんばります）

こんなものを無造作にさらしながらうろついていて、今まで魔術師の目に留まらなかったなんて信じられないが、目の前の男からは魔術師特有の気配は感じられない。

最悪あの宝石そのものが魔力封じの礼装だということもあるが、その時はその時だ。

金髪の男が自分へと近づいて来る少女に気付き、顔をあげる。それをタイミングとして凛は何重もの猫をかぶって微笑んだ。

「すいません、ちょっとよろしいですか、私……」

「時臣の娘か」

「え？」

金髪の男の口から出た思いがけない人の名に、凛は次に出そうと思っていた言葉を失った。

命日（後書き）

凛とギルガメッシュの対話、どうすれば不自然じゃないかいくら考えてもわからない。難しい。
でもここで会うのが綺礼だと、凛が反発して終りだからなぁ……。

妖精の鎮魂歌（前書き）

カレンがパイプオルガン引いている絵が好きです。

カレンは綺礼と似ているようで決定的に違うところを
同じ音楽であらわしてみたつもり。

以前読んだ漫画で、誰かに愛されたくて出会った人物の愛する者そっくりの姿になって現れる妖精がいて、
でもすぐに偽物だとばれて（あたりまえだが）
騙したと糾弾された悲しみでその相手を殺してしまう、ということを繰り返していたんですよね。
中の伝説のイメージはそこからとりました。

「どうした何故我の問いに答えぬ、万死に値する不敬ぞ、……ああ、なんだ我への畏敬に言葉もないのか」

黙り込んだ凛に金髪の男は軽く首をかしげた。その口元には嘲笑に似た歪み。凛がもう少し世の中に精通していたら“ああ、これが『ドヤ顔』なのね”と思っただろうが、幼い少女に理解できるのは、その微笑みに中に自分への好意が欠片もないことくらいである。

「……ッ！」

だが勝気な少女にはそれで十分である。この男は尊ばれるべき遠坂の先代当主を呼び捨てた挙句、凛自身も見下している。負けん気の強い少女にとってそれだけで十分な敵対行動である。そしていつだって売られた喧嘩は買ってきた凛だ、湯気が噴き出しそうなその頭の中から先ほど魅了された宝石の輝きなど消え失せていた。

「な、なんなのよ、アンタ！　いきなり人のお父様を呼び捨てなんてどういうつもり！？」

怒りの表情で男へと指を突き付ける少女に金髪の男、かつて少女の父親によって現代に召喚された古代の王は実に楽しそうに笑った。

「ほお、答えぬばかりかこの我に問いを投げるか、父親に似ず豪胆な子狸よ。我か、我は……そうだな愚鈍な貴様にもわかるように教えてやるが、我はお前のよく知る言峰綺礼の“ダンナサマ”だ。そして時臣とも浅からぬ仲であったとも？」

「こ、コダヌキ！？　それ私のこと！？　私のどこが狸……、え、

ウソ、綺礼の！？　ええっと、ちょっと貴方、お父様と知り合いなの！？」
「時臣めへの義理だ、一つだけならお前の問いに答えてやってもよいぞ？　だが一つだけだ。さて、どれにする？」
「なんですって、アンタ、実はケチね！？」
「縊るぞ、娘」

パニックを起こして自分でも何を言っているかわからない少女と、笑顔でぶっそうな宣告をする男のやり取りはた目には漫才にしか見えない。

「むきー！」
「は、はっ、元気よく飛び跳ねよって、まさに子狸よな」
「またいったーッ！」

少女が一人、冬の草原を歩いている。
その風景を覚えている。
彼女は恩師の娘で、その時まだ七歳だった。
声をかけようとして、ふいにその地方に古くから伝わる妖精の伝説を思い出した。
その妖精は知人の姿をまねて人の前に出てくるのだという。大抵はその人間の愛する者の姿なのだと。そして甘い愛の言葉をささやく。
その妖精は死の使いだ。妖精の偽造を暴かないと相対する人間は死んでしまう。偽りの愛と共にもたらされる口づけが魂を吸い取るのだ。
どんなに姿が似ていても、どんなに言動が似ていても、それが偽

物であると気が付かなければならないのだ。それだけが妖精から身を守るすべだ。枯草の海の中で出会ったモノがどれほど懐かしく愛おしい姿をしていてもそれに惑わされてはならない。

あそこにいる彼女ははたして本当の彼女だろうか、そう考えて男は苦笑した。

妖精が身をうつすのは愛した者の姿のはずだ。確かに少女のことを愛しているのかと聞かれれば、愛してはいるだろう。だが生涯独身であることを神に誓った自分にとって彼女は得ることのない我が子の身代わりのような存在である。妖精が借りるなら幼い少女の姿ではなく、昔どうしようもなく愛し、生涯をささげるはずの信仰と天秤にかけてしまった初恋の相手を選ぶべきだろう。

だから、きっとこんな恐れは勘違いなのだろう。

そう、枯草を踏みながらゆっくりと歩いてくる少女がそんな人外の生き物のはずがないのだった。たとえその眼差しが深い深淵の底のように暗くとも。

白亜の教会に荘厳なパイプオルガンの音色と、かすかな歌声が響いている。

鎮魂歌だ。十日後に冬木教会でおこなわれる鎮魂のミサのためにパイプオルガンの調律しているのだった。今は最終調整のための試弾きを行っている。

演奏しているのは女だった。修道女ではない、暗褐色の立ち襟のワンピースに身を包んだ言峰綺礼である。還俗するまでこの教会のパイプオルガンの演奏は綺礼の仕事だったこともあり、新任の主任司祭にオルガンの調律の立ち合いを頼まれたのだった。

五ヶ月ほどのブランクなど感じさせない見事な演奏に、調律師である初老の男も仕事を忘れて聞き惚れているようだった。何度か鼻をすする音が聞こえるのは、昨年の大火災で四十年来の友人とその家族を失ったという彼では無理もないことだった。

冬木教会の主任司祭モレロにとって、目の前の彼女が奏でる荘厳なパイプオルガンの音色は聞きなれたものであった。綺礼のことはその父親が師といってもいい存在であったために幼少の頃から知っている。

あいかわらず妖精みたいな子だ、と神父は思った。二十代になり、二ヶ月ほど前に母親になったという大人の女にそのような感想を持つのは間違っているのかもしれないが、モレノにとって彼女は十五年ほど前にイタリアの冬の草原で怖れを感じた少女のままだ。

一音の狂いもないパイプオルガンの音色。卓越した技術のたまものであるそれはどこまでも透明で冷たい……澄みすぎているために魚が住めない清水のように。

そしてその冷たさは、それを聞く者の心を吸い込んでいく。氷がそれに触れる者の体温を奪い取って溶けるように、その音に触れた者の心を我がものとするのだ。

それはまさに妖精の音楽である。そこには演奏者が本来曲にこめるべき情熱も感情もない、あるのはどこまでも深いガランドウだ。他者の心を引き寄せ、引きずり出して我がものであるかのように身にまとう魔性の音。

それがもたらす『感動』が鏡の中の自分を見て“ああ、この人と自分はなんて似ているんだろう。こんなにも同じ心を持つ者がいたなんて”などという勘違いの共感を覚えているだけでしかないと、どれほどの者が気付くことが出来るだろう？

その音が、好きだとささやいて来るならば、それは自分が愛してくれと叫んでいるのだ。

その歌が、泣かないでとささやいて来るのならば、それは自分が悲しいと叫んでいるのだ。

「相変わらず、いい音ですねぇ」

モレロの横で、彼が差し出したハンカチで目尻の涙をぬぐいながら調律師の男がしみじみとつぶやいた。

「去年の年末のミサを思い出しますよ。あんときは、もうねえ、ぼろぼろに泣いちまったですよ、こうね、死んだ奴らとの思い出が次々にあふれてくるようでね……。あんときまで納得しているようでしてなかったんですなあ、あいつら死んじまったんだって。けどシスターのレクイエム聞いてたら、こうね、ああ、本当にもう二度と会えないだなって、納得しちまったんですよ。だったら泣かなきゃ嘘じゃないですか？　本当に、俺もばあさんも翌日の目が酷いこと、酷いこと……、一生分は泣いたかなあ」

そんなことをいう初老の男の顔には、だが淡い微笑みがあった。

「でもあれがなかったら、俺は今でも納得してなかったかもしれないですよ。一年たとうが二年たとうが、いつかあいつらがひょっこり帰ってくるんじゃないかって思い続けて、つらいもの見たくなくて、あいつら自身からも目をそらしていたかもしれない……墓はあっても遺体はないですからねえ……墓参りにも行こうと思ったかどうか。それで、どうなんですか、本当にシスターは今回のミサでオルガン弾いてくださらないので？」

「ええ、自分はもうその資格がないからと。説得はしたんですが」

「もったいないですなぁ」
「ミサにはバチカンから専門の演奏者が来る予定です。バチカンも冬木の悲劇には深い憐れみを注いでおります」
「ありがたいことです」

しみじみと頷く調律師からモレロはそっと目をそらした。聖杯戦争の舞台である冬木で聖堂教会の本拠地を預かる神父が事情を知らないはずもなく、モレロは昨年この地で起きた悲劇が何によってもたらされたものかを知っているのだ。
モレロが目を向けた先で、その悲劇の一番側にいたはずの女はいつもの無表情で帰り支度を終えていた。

「ああ、キレイ、ありがとう。今日はすまなかったね」
「いいえ、モレロ神父、お役にたててよかった。では私はこれで。そろそろ迎えが来る頃ですから」
「キレイ、十日後のミサには参加してくれるね？」
「はい、参加したいと思います。ですが息子は、……夫は信徒ではないので」
「いやいや、信仰とは自らのうちから湧き出でるものだ。強制することは出来ない。君のご亭主には彼なりの信仰があるのだろう。私はそれを尊重するよ」
「ありがとうございます」

かつて細い肢体を生成りのリネンのワンピースにつつんで冬の枯野に立っていた少女は、モレロに向かってあの時と変わらぬ笑顔を浮かべた。
それはまさに“貴方は私を愛しているから、私も貴方を愛しているから、だから私たちはキスをするの”とねだってくる妖精の微笑みだった。

「放しなさいよー、放しなさいよーっ！　ちょっと、下着が見えちゃうじゃない！　見たいのか！？　このロリコンッ」
「誰がだ。貴様の貧弱な体なんぞ微塵も興味ないわ。いいのか、放していいのか？　では放るか」
「きゃあ、高い、高い、やめて」
「ははは、移り気なやつよ、放せといい、止めろという」
「ぐぬぬぬ……綺礼、アンタの男の趣味、サイテー！！」

その時、少女の片足をつかんで逆さに持ち上げている金髪の男という混沌が教会に近づいてきていたが、誰も気付かないでいた。

妖精の鎮魂歌（後書き）

アンデルセン童話の人魚姫に出てくる王子様は悪役でしょうか？
それともかってに命をかけた女の情念の暴走に巻き込まれた被害者でしょうか？
貴方はどうおもいますか？

次はそんな話です。

冬の情景（前書き）

またしても次回予告は次次回予告になってしまった。
前回といい今回といい迷走しているのが自分でもよくわかる……。

そのうち「ダメだー」といいながら全部消去して『お母さんは黒幕
　お父さんは英霊（改訂版）』とか書き始めるかもしれない。
ほかの作者様はどうやってちゃんと連載しているのでしょう。尊敬します。

冬の情景

「ギルガメッシュが凛のバラを台無しにしてしまったので、弁償することになりました。もう花屋には電話をして花束を作成してもらっているので、兄上には申し訳ないですが、取りに行って冬木教会まで届けていただけませんか？　代金は食費の封筒からだしておいてください。後で私が補充しておきますから」

『……綺礼、いろいろと突っ込むべき箇所が多すぎて、兄さんどうしていいかわからない』

電話口から苦痛に耐えるような男の声が聞こえてきたが、女はまるで祝福を感じているかのように笑顔だった。

「頭痛なら鎮痛剤を飲めばいいと思います。医療箱の中です」

つまり、他人の苦痛はこの女の好物なのだった。

というわけで言峰士郎氏は、真っ赤な大輪のバラの花束を抱えて冬木教会へと続く長い坂道を歩いている。

当然のことながら他人の視線の吸引力は半端なかった。

何しろ外見が外見である……褐色の肌に白髪マッチョはいつものことながら、着ているのはこれまた黒のエナメルのコートであった。用途不明の金具やベルトがやたらとついたそのロングコートは、イメージとしてはハリウッド映画の中でよくダークヒーローと呼ばれる類が好んで着ているものであった。そんな、中からマシンガン取り出しても違和感ないような服装を、彼は何故わざわざするのであろうか？　なんというか、アレでないだろうか？　とりあえずここにかつての彼の師がいたら、彼女は苦笑いと共にこういっただろう。

うん、アンタやっぱりあいつの原型なのね、と。“未来の英霊”の服装を思い出しつつ、そうつぶやくに違いなかった。

注目を浴びながら、言峰士郎は早歩きで道を歩く。その表情は硬い。ちなみにサングラスは装備済み。

数時間前に似たような姿で小学生の女の子がその坂を上って行ったのだが、その子に向けられたほのぼのとした視線ではなく、あれなにマフィア？　といいった感じの疑惑の視線が士郎に注がれている。そして士郎は知らなかったが、凛が慰謝料を要求していたために花束は二倍に増量されていた。

（注目されている……そりゃこんなバラの花束抱えてりゃなあ）

士郎としては目立つのは本意ではない。できれば目的地まで車で乗り付けたいがこればかりは仕方がない。

これより先は冬木教会の私有地なのだ。原則車両の乗り入れは禁止されている。もちろん教会に物資を運びこむ業者や、車いすなどを使用する障害者用に裏道があるが、士郎がそれを利用できるかといえば違うであろう。

だから士郎は羞恥に染まった頬をさらしながらひたすらバラと共に歩いている。そこにはかつて運命の夜に、衛宮士郎が大切な仲間たちとたどった道筋への感動など欠片もない。

（違います、俺はもう正義の味方でもなんでもない善良な一般市民です……、いや確かにこの間、夜間他人様の自宅に侵入して家人の殺害を企んだことはありましたが、だって事情があったし、結局未遂だったし、一歩も敷地内に入れずコトは終わってしまったし、セーフ、セーフ。……しかし、く、……罰ゲームかッ。おのれ、アカイアクマめ、そして黄金のニート！）

しかし、これはいかなる苦行だろうか。すれ違う人たちが例外なくぎょっとした表情で自分を凝視している、恥ずかしい。
そして苦悩を背負い、まるで宿敵との最後の戦いに挑むかのような外見の男は、冬木教会の墓地にたどりついたのだった。

「そうか、お父さんのお墓にね。凛は偉いな、すまないねウチのが迷惑を」
「イイエ、シロウサンガアヤマルコトデハ……」
何故かこわばった笑顔でバラを受け取る少女に士郎は首をかしげた。
いつもの笑顔はどうしたのだろうと考えて、ああ、綺礼がいるからかと思う。二人は絶縁状態だったのだ。自分が来る前にいかなる再会劇が行われたのかは知らないが、件の妹は少し離れた場所で明後日の方向を見ながら無言である。ちなみにその亭主はもう少し離れた場所で、赤ん坊相手に変な形の墓のセンスをこけおろしていた。
うん、なかなかにカオスな空気だ、俺が何とかしなければと士郎は思った。そういう思考におちいりやすい男だった。

「それにしても今日の凛は大人っぽいね。なんというか、そう淑女だ。その赤いコート、よく似合っているよ」
「アリガトウゴザイマス……士郎さんも、そのコート、ステキです。それ、どこで……？」
「ああ、これ？　実はもらい物なんだ。ちょっときついけど、素材がいいだろう？　重宝しているよ」
実は扶養家族の言峰士郎である。身一つでこの世界に放り出されて早半年、食費も光熱費も税金も全部義妹の金で養われている現状

であった。それだけではなく細々とした私物を買うためのこずかいも支給されていた。
たとえ出産直後の妹の代わりにほとんどの家事をしているといっても、現状に思うところがないはずがない士郎としては、出来るだけ負担を軽くしたい、出費をおさえたい、そう常々思っていた。
そんなところに、カレーのシミが洗ってもおちなかったという理由で新品同様のシャツを捨てようとしていたギルガメッシュと出くわし、シャツの譲渡をもちかけて成功してから、彼の衣類はほとんどが英雄王の御下がりであった。
もちろん、身長は5センチ、体重に至っては10キロも体格差のある二人なので、ジーンズなどは流用出来ない。英雄王の腰は細いのである。だがコートやセーターなどの比較的余裕のあるものならば士郎にも着れるのだった。

そして今着ているロングコートも英雄王からの賜りものであった。ギルガメッシュが一時期はまっていたダークヒーロー物映画の続編が公開された記念に、一流の職人につくらせた主役の剣士の衣装であった。コスプレというなかれ、一級の素材を使った一点ものである。彼はこれを着て黄金律体質のせいで簡単に手に入れた試写会チケットを手に、他県で行われたファンの集いへおもむいたのだった。そして同じ試写会に訪れたファンたちは彼の装いにおおいに盛り上がったものだった。
だがそれを知る者は冬木にはいない。士郎も凛もこの年は全ての出来事がひっくり返り、大きく動いた激動の年だったのだ、テレビのCMの中でこのコートを着て刀を振り回す剣士の姿など、たとえ見たとしても記憶してはいないだろう。

「そうですか……」

倹約を誇る士郎の言葉に、凛は何故かすごく安堵したような、別

の意味で失望したような、あいまいな微笑を浮かべた。
「ああ、物は大切にしなきゃな」
「そうですね……」
いつもにこにこ笑っている士郎さんだが、勝ち誇ったような皮肉げな微笑も似合うことを、凛は初めて知った。なかなかかっこいいが、勝ち誇る理由は倹約だ。男としてはどうなんだろう。
凛はそう思いながらもぺこりと士郎へ向かって頭を下げた。
「……わざわざありがとうございました。申し訳ありませんが、私、もう行きますね。ここに来るの、家の者にいっていませんから、遅くなったら叱られてしまう」
「え、じゃあどうやって深山町からここへ？」
「ええと、バスで」
「そっか、じゃあお墓まいりが終わったら家まで送っていくよ」
「いえ、そんな悪いです」
「大丈夫、もう五時頃には暗くなるんだから、行き先を告げていないだったらお家の人は心配するよ。知られたくなかったら、家から見えないところに車止めるから」
「はい……、でも、それなら綺礼に頼んでいいですか？」
「……私？」
それまで我関せずとばかりに突っ立っていた士郎の妹が意外そうな顔でこちらを見た。それを睨んだ凛はかぶっていた猫を脱いで口をとがらせた。
「アンタ、まさかお父様の墓を素通りするつもりじゃないでしょうね？」
「……私は遠坂の当主によって遠坂との絶縁を宣言されている立

場だ。許可もなく遠坂の領域には立ち入らないつもりだ」
「その当主が来なさいっているのよ。ちゃちゃっと来なさい。アンタとはいろいろと話さなきゃなんないことがあるんだから」
「二度と顔を見せるなといったのは、凛なのだがね」

しぶしぶといった顔で綺礼はうなずいた。士郎が心配そうに二人を見ているのに気付き、彼女は安心させるようにうなずいた。

「安心してください、兄上、私は凛を傷つけたりはしません」
「嘘だ」
「ああ、嘘だな」
「……ずいぶんですね」

真顔で否定する二人にやや憮然とした綺礼の耳に、ほきゃあという赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。困惑顔のギルガメッシュが息子を抱きかかえてこちら側にやってくるのが見えた。

「急に泣き出した。泣きやまんのだがどうしたものか」
「時間から想定すると空腹なのだろう、二時間ほど乳を与えていないからな。幸いここは教会だ、神父様に頼めば場所を貸してくれるだろう、ああ、車に外出用品を入れたバックがあるから持ってこなければ。もしかしたら粗相もしているかもしれない、オムツも必要か」
「そうか、ではただちに取りに行け雑種」
「また俺なのか！？」
「雑種！？」
「仕方がないのだ凛。彼は日本語を漫画や映画で覚えたクチで、少し勘違いして覚えている」

ほゃほゃと自分に注目しろとばかりになく赤ん坊の声を聴きなが

ら、遠坂凛は父の眠る墓への道の遠きを思ったのだった。

冬の情景（後書き）

神の視点で見ている読者と違って登場人物には知っていることと知らないことがある。
凛が父親の死について知っていることはあまりないんじゃないかと思うのです。
実際本編ではギルガメッシュが父親の召喚したサーヴァントだと知らなかったようだし、
ｚｅｒｏでも母親を障害者にしたのが誰か知らないみたいだった。
その辺の事情は綺礼が後見人だったことによる情報操作だったかもしれないので、
この話ではどうしようか今だ迷っています。

【番外編】　冬の夜　王の夢（前書き）

以前スランプ中にギルガメッシュと綺礼の夫婦のイメージで書いたメモ的小話をもう一度投稿します。

時期としてはこのくらいの頃の話ですので。
以前読まれた方は何も変わっていないのでスルーしてください。

【番外編】　冬の夜　王の夢

真夜中に朝焼けの夢を見た。

昔、昔の夢を見た。そこはかつて己の故郷だった場所。王として君臨していた居城。

その離宮の一角で、赤子のように声をあげ咽び泣く己がいた。

寝台に横たわったままの親友の亡骸の傍らに、侍るもはや八日、こうして泣き叫んでいれば心優しい友は必ずや冥府の底から這い上り、己がもとへと戻るだろうと信じていた。

この身は王、そして女神と人の王の間に産まれた半神、それほどに尊い身なれば、望みはすべてかなうはずだった。

その確信が崩れ落ちていったのは、親友の唇の間から一匹の蛆が這い出たのを見た時だった。

その時、ようやく理解した。

もはやコレは朋友ではない。ただの抜け殻、脱ぎ捨てられた服のようなものだと。

そんなものに縋り付いて泣いていた己の滑稽さに今度は笑いが噴き出してきた。涙などぴたりと止まっている。狂ったように哄笑する王をどうすることもできず、物陰からこちらを覗き見る臣下の気配すら今はおかしい。

ああ、朋友よ、そうか、これがそうか。

腐り始めた肉を寝台ごと蹴り飛ばし、灯火の火をそこに投げ入れる。それから消毒のための強い酒と香油を。

誰かの悲鳴が聞こえたが、そんなものには一瞥の価値もない。この心を占めているのは、離宮を飲み込む紅蓮の炎と、親友の今際の言葉だけ。

『朋友よ……これより始まる君の孤独を偲べば、僕は泣かずにはいられない……』

離宮が親友の亡骸とともに燃え尽きた夜明けに、王はようやく知った。

彼が“孤独”といった、その心を。

ああ、誰かが泣いていると思い、ふいに意識が覚醒したのを知った。

ギルガメッシュが身を動かそうとするよりも早く、隣に寝ていた女が猫のような滑らかな動きで寝台から降りた気配を感じた。

絨毯の上に無造作に放られていた寝間着をすばやく身にまとうと、同衾していた男の目覚めを知っているのだろう、小さな声で見てくると呟いて、彼女は音を立てることなく部屋を出て行った。

ギルガメッシュは、なんとなく枕元のサイドテーブルの上に置いておいた携帯電話を手に取った。暗闇の中で輝くその表面には現在の時刻が浮かび上がるようになっており、それは午前二時を数分過ぎた時間帯を指していた。

冬が近いこの季節では、まだ世界は真夜中のようなものだ。

少し肌寒い。数時間前まで腕の中にあった溶けるほど熱く甘い女の肉を恋しく思ったが、たしか四回目の魔力供給の後、あの女はどことなくイイ笑顔で“これ以上吸い取られると私は完全に死ぬが、もしやそれが狙いか？　いいだろう、だが私とて一人では死なない”とか物騒なことを呟いていた気がするので、戻ってきた女をもう一度味わうのは止めておいたほうがいいかもしれない。

そんなことをつらつら思っていると、寝室のドアが開いて女が乳児を腕に抱いて戻って来たのが見えた。ギルガメッシュは起き上がって二人を迎えた。

「どうした？」

「さて、おむつではないし、空腹というわけでもなさそうだ。怖い夢でも見たのかもしれない。……この子もお前とラインが繋がっているから」

含みのあるその口調にギルガメッシュは先ほど夢を思い出した。否、英霊たるギルガメッシュは夢など見ない。見るとしたのなら、それは遠いはるかな昔の、一つの生命として生きていたころの記憶である。

「なんだ、貴様もアレを見たか」

ふてくされたような英雄王の言葉には不愉快さと、ほんの少量の殺意が込められていた。不愉快なものを、不愉快であるという理由だけで葬り去ってきた暴虐の王である。不快感と殺意に明確な違いなどない。だがそんな剣呑な視線にさらされても、女はカエルの面に水とばかりにやわらかく微笑んだ。

「恥ずかしいのか？　つまりアレはお前にとって黒歴史というやつだということか？」

「黙れ、また躾けられたいか、この端女が」

「これ以上は御免こうむる。朝になったらこの子に乳をやらなければならない。さすがにきつい」

女は肩をすくめ、王は鼻を鳴らした。二人の顔には同種の苦笑が浮かんでいた。

魔術師でなくても生命の体液には生命力が溶けているものである。代表的なものは血液であり、精液であるが、それは母乳にもいえるのだ。己のサーヴァントとの性交によって魔力を奪われ、わが子には乳と共に吸い取られ、彼女の魔力は常に枯渇寸前である。幸いなのは、彼女は魔術の使い手ではあるが、根源へいたることを目的とする魔術師ではないため先の見えない実験に魔力を使うことがないということだ。そして常に魔力をぎりぎりまで消費し、回復してからまた消費するということを繰り返しているので、必然的に回復力が上がっているのだった。もちろん望んだ苦行ではないので、本人としてはあまり嬉しくない副産物であった。

「ほら、父上に抱いていただきなさい。そうしたら今度はもっといい夢が見られるから」

そういわれ、受け止めた我が子はずっしりと重かった。晩秋の夜明け前はいまだ暗く、しかしギルガメッシュには、己が腕の中でこちらを不思議そうに見つめてくる赤子の瞳の色がはっきりと見えた。己と同じ、紅玉を溶かし込んだような真紅。神と人との血の混じりあいを誇示するその色を。

「……そうか、父と寝たいか。よいぞ、許す」

この間抱いた時よりも確実に重い。産まれた時は三千グラム程度だというのに、本当に瞬く間になんて大きく重く。その事実に、ギルガメッシュは心の奥深い場所から何かがこみあげて来るのを知った。

ああ、この子は生きている。もはや死した英霊の、この我の子供だというのに、こんなにも力強く生きている。ならば父親である己がこの世界から消え去り、〈座〉に還ろうともこの命はこの世界で生きるのだろう。我は『ギルガメッシュ』の〈座〉に戻ればただの“記録”、『英雄王ギルガメッシュ』の“功績”と成り果てるしかないが、この子の父であるという事実は〈座〉の本体にも奪うことは出来ないのだ。

女が掛布団を少しめくって寝台に入りこんできた。布団の中の温もりを外に逃がさぬように注意を払っているだろうその動作にギルガメッシュは少し喉の奥で笑った。

この女は生まれついての邪悪だというのに、こうやって他人を思いやる仕草をさり気なくするのだ。おそらくはそう躾けられたからなのだろうけれど、本当に内面と行動のギャップが飽きさせない女だ。

「どうした？」

「ん？　いや、なんでもない」

自分の矛盾に気づくことない女は、不思議そうにギルガメッシュを見る。それに軽く手を振ってからギルガメッシュもまた暖かい布団にもぐりこんだ。自分と赤子と女と。まるで家族のように川の字になって眠る姿に妙に愉快な気持ちになる。

やがてギルガメッシュは瞼を閉じ、そしていつかの夜明けを思い出した。今度はなぜか穏やかな心持だった。

『この僕の亡き後に、誰が君を理解するのだ？　誰が君と共に歩むのだ？　朋友よ……これより始まる君の孤独を偲べば、僕は泣かずにはいられない……』

眠りに落ちる微睡の中で朋友の言葉が聞こえる。その言葉の通り、ギルガメッシュは結局、孤独からは生涯逃れられず、そしておそらくは今も孤独なのだ。たとえこの腕の中に我が子を抱いて眠りにおちようとも。

だが、それでいいのだ。あの無様だった己の慟哭とその後の孤独こそが、親友よ、お前の価値を高らかに歌い上げていた。そして今も、孤独とはなにかを誰よりも理解している女と共にそれをかみしめている。

腕に抱いたこの子が、愛おしくて、つらい。お前にこの子を誇れないことが口惜しい。

（さあ、息子よ。眠るがいい。そして王と泥人形の夢を見るがいい。出会えた歓喜と引き裂かれた絆の悲鳴を聞くがいい。そして知れ、失われることがどんなに辛くても“なかったこと”になどできないモノが誰にでもあるのだと。お前もいつかソレと出会うのだと）

夜明け前に黄昏の夢を見る。

夕暮れの草原に二人の青年がいる。黄金と新芽の色の髪の二人の若者が並び立ち、遥か彼方にそびえる深く強大な森を見つめている。

あの森を支配する怪物が、どれほど強くても、共に戦う者がたった一人しかいなくてもこの心に恐れはない。なぜならば隣に立つのは唯一己が認めた男、無二の朋友なのだから。
いくか、とどちらかがいい、いこうか、とどちらかがいった。
そして二人は最初の冒険へと歩み出していった。

夜明け前に夢を見た。
素晴らしくて悲しい、そんな幸福な夢だった。

【番外編】　冬の夜　王の夢（後書き）

ちなみにこの時のギルガメッシュの頭の中には兄上の存在は欠片もない。

再開（前書き）

再開……再会ではなく、再開。再びはじめる事。

相変わらず会話しかない。文章が雑になってきているのを感じるので、しばらく考えます。だから私の話にはアクションがないんだって……。

人魚姫の王子様のことも再検討中。

安易な宣言するものではないな。

再開

「それで凛は私に何が聞きたい？」

冬木教会の主任司祭が快く開放してくれた教会内の一室において、言峰綺礼は我が子の口に乳房を含ませながら聞いた。入口以外の四方の壁際にソファが置かれた待合室らしきその部屋は、古い教会らしくエアコンなどの空調施設はない。部屋の隅には昔の学校にあったような大きな石油ストーブが赤々と火を燃やして部屋を暖めていた。その上にはこれまた昔風のブリキの薬缶がおいてあり、しゅんしゅんと湯気を放っている。

「む……」

綺礼が服の中から乳房を取り出した時、“以前よりも増量している……！”と戦慄をこめておののいていた凛だが、そういわれて綺礼が座っているのとは斜め横にあたるソファに自分も座った。何を話していいのかわからないのは、話さなければいけないことがたくさんあるからだった。だが話していいことは多くない。魔術師は等価交換の存在だ、何もかも綺礼に聞いてしまっては借りだけがつみあがっていく。だから慎重にしなければと、彼女は自分の頭の中をのぞくかのように上を見ながら地につかない足をぶらつかせた。

ここには綺礼と自分、二人しかいない。ありがたいことに男二人はもめながらどこかへ行ってしまった。多分気を利かせてくれたのだと思う、士郎さんの方は。

金色の方がいやな笑い方をしていたことは記憶から抹消しようと凛は思った。そして一心不乱に乳房に吸い付いている綺礼の息子は数には入れなくていいだろう。だって赤ん坊ということを抜かして

もいろいろと忙しそうだ、食事に夢中で凛がいる事すら意識していないのではないだろうか。

「んー。そうね、あの金ぴか、綺礼の旦那ってことでいい？」

「金ぴか……」

凛の父遠坂時臣が聞いたら顎を外しそうな暴言であった。つい綺礼は失笑した。

「凛はあいかわらず怖いもの知らずだな。アレがそのように称していいシロモノではないことはわかっているだろうに、魔術師たらんとする君ならば」

「綺礼の亭主なんか、金ぴかで十分よ。あんただって“アレ”とかいっているじゃない。でもあいつすごいわね。私無意識にレジストしていたから気付かなかったけど、あいつから声かけなきゃ誰も気付かないようになっているのね。人除けの魔術とはちょっと違うみたいだけど。不特定多数の人間に常に“自分を気にするな”って“ギアス”をかけていられるなんて優秀な魔術師なのね」

不本意だという顔でギルガメッシュを認めた凛だったが、苦々しい顔でかつての姉弟子を睨みつけた。

「男っ気なんてかけらもなかったあんたがいきなり妊娠とかすごくびっくりしたけれど、これで合点がいったわ。あいつ、聖杯戦争の関係者なのね？」

「その通りだ、凛。彼は先の戦争の関係者だった。時臣師が私たちを引き合わせた」

「お父様の味方だったの？　一緒に戦うのは綺礼とだけじゃなかったんだ」

「敵を騙すにはまず味方からとはよくいうな」

ふうんと頷く師の娘に綺礼の唇が弧を描く。
「話したいこととはそんなことなのか？」
「綺礼、また胸大きくなったのね。やっぱり妊娠したから？」
「……本題に入りなさい」
綺礼は苦笑した。それから母乳の出が悪くなったので子供にもう片方の乳房を与えようとして、重たい肉の塊を手で持ち上げたその光景に暗い目つきの少女は舌打ちをした。
「凛」
「はいはい、わかったわよ」
拗ねたように足をばたつかせる少女。いつもなら良家の娘のつねで、そういう行動を人前でとることのない遠坂凛である。だが気心の知れたごく少数の前ではこのように感情のままにふるまうことがあった。そのような素のままの彼女を両親すら知らない。知っていたのはごく少数の友達と妹、そして猫をかぶる必要性を最初から感じなかった目の前の姉弟子くらいのものである。
そして妹が他人になり、友達は一人が死に、姉弟子とは半年の間会うことがなかった。
だからこのようにふるまうのは半年ぶりといっていいのだ。だから心が弾んでいるように感じるのはそのせいだ。決して姉弟子と何事もなかったかのように会話ができたことの喜びではない。
「教えてほしいことがあるのよ」
「凛は私に質問ばかりだ」
「……誰も私に本当のことを教えてくれないからよ。私がまだ小さいからって」

「その通りだな、幼いうちには知らない方がいいことは確かにある」
「でももうそんなことじゃいけないのよ。今の遠坂の当主は私なんだから。綺礼は私の質問にはちゃんと答えてくれるでしょう？　私がまだ子供だからってごまかしたりしないでしょう？」
「それが凛の望みならば私はそうしようが、そして私は凛に嫌われて、あまり得にならない話だ」
「私があんたを嫌いなのはそんな理由ばかりじゃない」
「そうかな、私が時臣師を必ず守り通すと誓わなかった時、あんなに不機嫌だったじゃないか。あれはつまり、たとえ根拠がなくとも必ずといって欲しかったのだろう？　私はそれをバカ正直に答えて不興を買ったのだ」
「あれはあんたの弱気に怒っていたのよ。ああいうときはたとえ自信がなくても胸を張るものよ！　……今はそんな話をしたいじゃないわ」
「……」
「間桐についての正確な情報が欲しいの」
「遠坂と間桐は同盟関係にある。なのに部外者の私に何を聞く？　直接聞けばいいではないか？」
「同盟っていったって聖杯を奪い合うのが前提の同盟でしょう、敵になることがわかりきっている相手に情報流す奴がいて？　それでなくても間桐は秘密主義よ。いい綺礼、わかっているのでしょ、私が知りたいのは間桐邸の全壊のことよ！　魔術の実験の失敗だって報告が遠坂に来ただけ、間桐の一族の中から死者はでなかったって、ただそれだけ！　この遠坂のおさめる地で大規模な爆発起こしておいて釈明もないのよ！？　私乗り込んで行ってやろうと思ったのに、お爺さまたちに止められたわ」
「残念だったね、どさくさに紛れて桜に会えたのに」
「桜は関係ないわ、遠坂の土地に住んでいるんだから筋を通しなさいっていいたいの」

ぷいっと拗ねたように横を向く凛に綺礼はますます笑みを深くした。

「……間桐の件だがね、あれは当主の間桐鶴野が起こしたものだということが判明している。本人は自分の起こした爆発に巻き込まれて死亡した。そのことを遠坂に報告しなかったのはなんというか、魔術師の見栄ではないかな？　実験の失敗で死亡するなど魔術師としては恥というしかあるまい？　幸いなことに間桐の“二人の子供”と鶴野の父“間桐臓硯”は別の場所にいてね、間桐が滅亡するという事態は避けられた。だが運がいいというより、危険な実験のために他の家人を遠ざけて、案の定失敗したということのようだ」

「そう」

妹が無事だという事実に凛は安堵のため息をつく。

「桜にはこの前あったが、元気そうだった」

「そうなんだ……、じゃあ、間桐の当主はどうなるの？　間桐臓硯がまた当主になるのかしら？」

「遠坂の方には死者はないと報告が来ているのだろう？　つまりはそうことだ、間桐鶴野は世間的には死んでいない。事故のせいで負った傷が思ったよりも深いため療養のために冬木からは離れるが、それでも当主であることには変わりない。それを通して時期が、つまり次の当主が現れてもいい頃が来れば彼が“死亡”したという知らせが各方面に届く。なにせ時臣師と違って“死体”が第三者の目にさらされていないので、その辺の偽装工作はやりやすいということだろう」

“死体”という言葉に凛の顔がゆがんだが、それに気が付かないふりをしてなおも綺礼は言葉を紡いだ。

「ああ、その偽装で間桐を責めるのはやめた方がいい、痛い腹を探られるぞ」
「痛い腹って何よ」
「もちろん、お母上、葵夫人のことだよ、凛」

思いがけない名前に少女の目が見開かれた。
「お、お母様？　なんでお母様の……」

「現在夫人が人前に出られないのは夫を亡くした心労がたたり病床にあるためだと、世間ではそうなっている。だが違うだろう？　そう、隠し事を暴こうとするのなら、相手もこちらの隠し事を探ろうとして来るだろう。だからお互い見て見ぬふりをする、君に間桐の現状が知らされないように、当然間桐の桜にも遠坂の現状は知らされていない。凛、桜は遠坂家の当主が死去したことは知っているかもしれないが、遠坂葵の現実を知らないのだ。遠坂が必死に隠しているからね。だからこれから“間桐桜”と出会うことがあっても、彼女のことは黙っていた方がいい」
「桜がお母様のことを知らないのなら、そのままでいさせることに異論はないわ」

凛は子供らしからぬため息をついた。
「いやだ、みんな嘘つきなんだから」
「それが魔術師だよ、凛。神秘にかかわるということはそういうことだ」
「わかっているわ」

何かを払い落とすように頭を振った後、少女はソファからおりて、近くに落ちておいたバラの花束を手に取った。

「……教えてくれてありがとう、情報の対価が今払えないから、かわりに遠坂との絶縁を撤回するわ。遠坂時臣の弟子である、言峰綺礼の遠坂への干渉を認めます」
「感謝いたします……ということは私は師の墓参りが出来るということだね？」
「当然でしょう、お父様のお墓を素通りなんかさせないわ」

胸を張った少女は綺礼に向かって昔していたような得意げな笑顔を向けた。

「さあ、私についてきなさい。お父様にご挨拶に行くのよ、私たち元気にやってますってご報告するの！」
「ああ、そうだね。凛、だけどすまないがちょっとこの子を抱いていてくれないか、服を整えたい」
「しかたがないわねえ」

しぶしぶとした態度をとってはいたが興味はあったのだろう、少女がいそいそと赤ん坊を受け取るために近寄ってくるのを綺礼は笑顔で迎えた。

再開（後書き）

騙されている第二弾。誰が騙されているでしょう。
綺礼さん、嘘はいってない。

墓前にて（前書き）

気が付いたらお気に入りが１０００件超えていた。
あ、ありがとうございます（動揺）

凛が聖杯戦争がほんの十年で再開したことに違和感持ってない風なのはなんでだろうと思っていたのですが、
マテリアルで書いてあるような「前回ためた魔力がだいぶ残っていた」とかいう説明は誰か彼女にしたのでしょうか？

墓前にて

一年前。

冬木市の地下にある貯水槽、かつて二人の男によって二十人近い児童の命が奪われ、一人の王によって炎に包まれ煤にまみれたそこに二人の女がいた。いや、それは正しい表現ではないかもしれない。……一人の女がいる、そして一人の女がいたというべきだろう。

黒髪の女は何の感情もなく、すでに生物ではなく物体となった銀髪の女を見下ろしている。

「……よく、解った」

うつむいた顔は前髪に隠れて表情は見えないが、その唇は亀裂のような笑みをたたえている。

「それが衛宮切嗣か」

そうつぶやいた後、女、言峰綺礼はゆっくりと笑みを深めていく。修道女として他者と対するときいつも浮かべる慈愛ではなく、心の底から湧き出でる歓喜の笑みだった。激しい感情の渦が彼女の中を荒れ狂っている。

その心にあふれる喜びを誰が知ろう……二十数年生きて、その時初めて彼女は他人を憎んだ。自分の欠損に悩み、その虚ろを衛宮切嗣が埋めてくれるものと期待し執着していたが、結局今まで綺礼は衛宮切嗣を一人の人間として見てはいなかったらしい。人が医者に望むのはまず医療の腕前であり人格は二の次であるように、綺礼にとって衛宮切嗣が自分にもたらしてくれる答えこそが目的であって切嗣本人をどうこうしようと思ってはいなかったのだ。

「それが、お前か……衛宮切嗣……！」

だが今は違う、衛宮切嗣という男、その存在自体に意味が出来た。ならば戦わなければならない、あの怨敵と。打ち壊さなければ気が済まない、あの男の理想、願いを……彼が言峰綺礼の大切なものをそうやって踏みにじったのだから。

「アイリスフィール・フォン・アインツベルン……お前はいったな？　言峰綺礼は“戦う意味すら持たない虚ろな女”だと。その通りだ、私には聖杯に託す願いなどない……こんな虚ろな自らを呪い、中身を求めさまよっても、それでも私はそれを“聖杯”などに求めたりはしない。　何故だと思う？　それはもう私、“言峰綺礼”ではないからだ」

壮絶な笑みを浮かべながら、修道女は死した聖杯の器を見下ろした。

「女、お前はいったな？　奴の“子供”を産んだと？　ホムンクルスが子供？　アインツベルンほどの魔術の名家が何の目的もなくそのようなものを“作成”するはずがない……それではお前と奴の子供には何らかの役割があり、それはおそらく聖杯戦争に関係している。衛宮切嗣はともかくお前が夫の理想成就に執着するのは、断じて恒久平和ためなどではない……このたびの戦争で聖杯戦争を終わらせ、お前の子供を過酷な運命から、聖杯戦争の為だけに存在を許されるという運命から救うことなのだな？　ならばお前はただの男に執着しているだけの女だ。男に好かれるために相手の言葉にうなずいて媚びている女だ。我が子を愛しているだけの女だ。自分の子供のためならば他人の子供などどうなってもいいと思っているだけの母親だ。そしてただの子供だ……大好きなお父さんがすること

が間違っているはずがないと根拠もなく信じているだけの！　ああ、解っていたか、アイリスフィール・フォン・アイツベルン、お前は私を嘲っていた。自分が衛宮切嗣を理解していることに優越を覚え、私の勘違いを嘲笑していた……楽しかっただろう？　他人を見下すのは。だがそれはお前の夫の理想の世界では否定されるべき感情だ」

ああ、とうめく修道女は舞台の上で悲劇を演じる役者のように大げさな哄笑をあげた。

「滑稽だ、人形！　“彼から与えられてきた愛こそ、私にとっての全てよ。それだけは誰にも侵させない”？　それはこちらの台詞だ……人類の救済だと？　“そこ”に私も入っているのか？　救う気か、この私を？　私はついぞ皆が美しいというものを美しいと思ったことはない、楽しいということが楽しかったことがない、そんな私が心の底から笑顔になるという世界はどのようなものだ？　いいや、世界が変わるのではない、私の方を作り替えるのだな……お前たちは私をお前たちの都合のいい存在に作り替えようとしている……そんなことは許さない、たとえ汚物のようなこの身でも誰かの都合で作り替えられることなど認めることは出来ない……！」

そう、結局として衛宮切嗣という男の本質は綺礼が思っていたものと違っても、この男こそが自分に答えをもたらしてくれる存在であると感じた直観は錯覚などではなかった。

何故ならば今、言峰綺礼は長きにわたる求道の果てにようやく『譲れないモノ』の姿を見出したのだから。私は私を守らなければならない、そうつぶやく修道女の顔にはまぎれもない喜びと誇りがあった。

自分が謀殺した男の墓の前で彼の娘が鎮魂の祈りを奉げている。
その滑稽な姿を、しかし綺礼は意外に冷静な心持で見つめた。もっと楽しいかと思ったが、そのようなことはなかった。遠坂時臣の葬儀の時、彼の死因を作り上げたアゾット剣を形見として凛に渡した時のような甘美な喜びがこの心に湧かないのは、たとえ今は還俗したとしても物心ついた時から教会に属している身であるからだろう。
綺礼にとって他の場所で死者を冒涜することはあっても、死者本人を前にして嘲ることはない。たとえ自分が殺めた男だとしても、死者に対して祈るのはその眠りの安らかなることだけである。それにそもそも綺礼は師であった男にそれほどの関心はなかったのだ。

父親の墓前に彼が生前好んだオールドローズの花束を置いて、目を閉じ膝をついた少女は一心に祈っている。その表情は悲しみよりも決意が色濃く表れており、娘が父に語りかけている内容が綺礼には容易に透けて見れた。
遠坂凛は娘として父をいたみ、それから魔術の先立としての遠坂時臣に彼の歩いた道の先を継ぐことを誓ったのだ。
やがて少女は立ち上がり、もう一度憧憬と愛情をこめて父の墓を見つめてから、どこか晴れ晴れとした笑顔で綺礼を見た。

「さあ、一丁一人前になりにいきますか」
「そうか、がんばれ」
「当然よ。さ、帰るわよ。送って行ってくれるんでしょう？　綺礼はお父様へのご挨拶はすんだ？」
「私は特に話すことはない。凛の後見人を辞退したことを謝罪したくらいだ」
「ああ、それはもういいわ。考えてみれば私もあんたが後見人だ

なんてまっぴらだったからね」
「酷いいいようだが、まあその通りだな。師は私を通して聖堂教会の後ろ盾が欲しかったのだろうが、私が還俗した時点でその思惑は破綻している。言峰綺礼が遠坂にもたらすメリットがなくなるのなら後見人などになる意味はない」
「そうか、だから後見人辞退したの」
「安心したかね？　葬儀の時の自分の態度が原因だと思っていたのか？　いや、実際それより前に禅城夫妻との話し合いはすんでいた」
「あんた、相変わらずね、いやなやつ。あんたに育てられる子供がかわいそう。絶対性格悪くなるわ」

凛は姉弟子の胸元ですやすやと眠る赤ん坊の頬をつついた。綺礼は曖昧な苦笑をうかべてスリングの中の我が子を見下ろした。満腹になった赤ん坊はなんの憂いもないとばかりに安らかな眠りについている。こうやって胸に抱くことは母親の心臓の音を聞かせ、赤ん坊を安心させる効果があるのだとどこかの本で読んだことがあるが、言峰綺礼の心臓はもう鼓動を響かせることはない。

「大丈夫だよ凛、絶えることのない愛情を注ぐ父親がいるし、世話焼きの伯父もいる。母親が多少嫌味でも、少なくとも自分が生まれてこなければよかったのだと思うことだけはない」
「ふうん」

教会の敷地内から公道へ続く長い坂道を少女と女はゆっくりと下っていく。すでに夕闇は辺りをおおいつくし、小さな灯りが転々と灯る石畳の道を二人はしばらく並んで歩いた。

「ねえ、綺礼」
「なにかな」

「私、綺礼が後見人を降りちゃったとき、綺礼はそのまま冬木から出ていくんだと思っていたわ。だって綺礼のお父さんのお墓はここじゃなくて、イタリアにあるんでしょう？」
「ああ、父上にとって冬木は特別な土地だったが、それでも眠るのは母がいるイタリアでなければならないと思ったから」
「だからわからないの。聖堂教会の人じゃなくなって冬木教会に住む必要はなくなったし、私、綺礼はイタリアに帰るんだと思っていたの。日本人だけど、産まれたのはイタリアだっていっていたじゃない……なのにどうして綺礼はまだ冬木にいるの？　士郎さんだってあの金ぴかだってこの冬木じゃ目立ちすぎよ、ヨーロッパあたりの方がよっぽど暮らしやすいのに」

「そうだな、何故だろうな」
「誤魔化さないで、綺礼は理由のないことはしないのよ。あんたがすることには明確な理由があるの、なんとなくとか、そういうのは綺礼らしくない」
「理由は確かにある、だが凛にいって理解してもらえるかどうか」
「別に綺礼のことが気になるってわけじゃないわ。でもセカンドオーナーとして、他の魔術師が冬木に滞在する理由を知っておきたいのよ」

綺礼の少し前を歩いていく少女の表情は見えなかったが、その背中が嘘は許さないと告げていた。そして言峰綺礼はこういう時に偽装をする術を知らない女だった。

「凛、私はおそらく聖杯に取りつかれているのだろう。聖杯の降臨する土地である冬木から撤退しない理由はたぶんそれだ。私はもう一度聖杯と関わりたい」
「綺礼、聖杯戦争はもう終わったのよ、今度は六十年後」
「はたしてそうかな」

姉弟子の確信を含んだ声色に凛は足を止めて綺礼を見た。

「何か知っているの？」

「凛、“冬木に在る聖杯がマスターを選別し、聖痕を授ける”、“アインツベルンが聖杯の器を用意する”この二つの矛盾に気付いていたか？　聖杯は冬木にあるはずなのに、聖杯戦争の度にアインツベルンは聖杯の器を冬木に持ち込んでいる。この相反する出来事が示すものとは？」

「聖杯と呼ばれるモノは二つある。本来の、冬木の霊脈から六十年かけて魔力を集める聖杯と、聖杯戦争で勝者に送られるための聖杯があるってこと？」

「その通りだ、先の聖杯を大聖杯、後のを小聖杯という。四度における聖杯降臨の儀式が全て失敗に終わったのはこの小聖杯が完成前に破壊されたことによるものだ。時臣師がどこまで凛に聖杯戦争の全容を教えていたのかは知らないが、そもそも英霊とは膨大な魔力の塊であり、霊核を破壊され絶命したところでその肉体を作っていた魔力は霧散することなく小聖杯に吸収される……解りやすくいうと聖杯戦争とは“「願望器が願いをかなえる」というエビ”で“マスターという釣り師”が“英霊というタイ”つりあげ、その成果を誰が独り占めするかという闘争に他ならない」

「綺礼、解りやすいけど、その説明はどうかと思うわ」

「そうか？　もっと解りやすくいうと、“宝くじ”だな、宝くじの一等にあたったものが受け取る大金は外れた者たちから集めたものだということだ。もっと露骨にいうと」

「うん、解ったから、いいから先続けて。つまり聖杯が願望器として作動するための燃料として英霊が必要なのね？　それこそ宝くじみたいに。七体のうち六体の英霊を倒さなきゃいけないのは、誰が聖杯にふさわしいか選ぶとかじゃなくて、そもそも彼らに“死んでもらわない”と聖杯が完成しないからなのね？」

「その通り、六体で願望器として作動する。そして自分が召喚した英霊を令呪で自害させればもっと完璧な聖杯が出来上がり、おまけに独り占めできるというわけだ」

「それって、詐欺じゃない！　英霊だってかなえたい願いがあるから召喚に応じるんでしょう！？」

「その通り、詐欺だ。もっとも六体で願望器として一応作動するのだから、自身の英霊と仲良く分け合うことはできるのだがね。……どこまで話しただろうか、そう小聖杯が死した英霊を吸収するというところまでだった。昨年の大火災はその小聖杯が何者かの手によって破壊されたことにより小聖杯におさめられていた“物質化するほど高濃度の魔力”があふれ落ちたからだと推測される。……私自身は“その場”に居合わせなかったので、断言はできないが」

「綺礼、それは」

「そう、英霊六体、あるいは七体分の魔力が漏れ出て、街の一角を燃やしただけということはあり得ない。ならば残りの魔力はどこへ？　小聖杯は破壊されてもうない、ならば」

「大聖杯へ戻った？」

「おそらく。英霊の魂自体は『座』に帰還したのだろうが、その肉体を構成していた魔力は無色の力として大聖杯に再吸収されたとみていい。ならば凛、五度の聖杯戦争の機会は六十年などと長き時を待つ必要なく、あるいは十年後にでも訪れるかもしれない。だから私はこの冬木に今もいる。私が再び令呪を授かる可能性は零に近いが、私の息子は違う。あの子は父親の血を濃く引いたためか魔術師としての素質には目を見張るものがある。冬木に滞在していれば確実に聖杯はあの子に聖痕を刻むだろう。別に戦えと強制するつもりはない、サーヴァントを召喚してくれるだけでいいのだ……戦うのは、私だ」

暗い光をたたえて微笑む姉弟子に凛は知らず息をのんだ。

「綺礼、あんた、聖杯に望むことがあるの？　それともお父様を遺志をあんたも継ぐっていいたいの？」
「凛、君は悲しい出来事を“なかったこと”にしたいと思ったことはあるか？　失敗を“なかったこと”にしてもう一度やり直したいと思ったことは？」

「それは……」
「たとえば時臣師が死ぬことのない結末、時臣師ではなく私が死んでしまう結末があり、そのどちらかを凛が選ぶことが出来たのなら、凛はどうする？　自分にとって幸せな結末を選ぶかな？　……それは“私を殺す”ことではないのか？　何故ならば時臣師ではなく私が死ぬことになったのは凛の意志なのだから」
「嫌ないい方すんな、私がそんなことするわけないじゃない」
「そう、遠坂凛はしない。だが別の者はその選択の誘惑にあらがえないかもしれない。実際召喚された英霊の中にそのように自身の過去を改ざんしようとしていたものがいた。自分が犯した過ちを“なかったこと”にして幸福な結末を新たに作り上げようとしたものがいた。最悪なことに本人はそれを『救済』と称していたよ。だが私にしてみれば未来への侵略行為に他ならない。何故ならば過去が変わるということは未来もまた変わるということだからだ。彼の者が自らの価値観の元、作り替えた“幸福な世界”にはたして私は“私”としてちゃんと存在できるのか。……滅んだものが滅びなかった、ならば花が散らなければ実がならぬように、実が食われなければ種が地に落ちぬように、全てが変わるだろう。私も変わるだろう、もしかしたら産まれていないことになるかもしれない。それを侵略といわずしてなんという。だから私は思ったのだ、この望みは打ち砕かれなければならない、と」

「うん、それはわかる。私だって時間を巻き戻してもう一度やり直したいと思ったことは何度もあるわ。そう思ったことが一度もな

い人間なんて、いないんじゃないかな。だからこそそんな望みは誰も叶えてはいけないのよ、それは……理不尽よ。あんまりにも」
「そう、歴史とはその時に生きる全ての人間の総意である。“総意”、その意味をはき違えてはいけない。その意志の前には“正しい”ことなど何の価値も持たない。たとえ間違っていたと後になってわかっても、その時に生きる者たちが自ら選んで歩いた道は“正義”などに否定されるべきではない。否定させたりはしない。ゆえに私は聖杯に固執する。もし十年後、再び聖杯戦争が起きて、そしてまた彼の者と同じ願いをもつ英霊が召喚された時、私はその者を勝者には決してさせない」
「大丈夫よ、綺礼、もし私が当主の間に次の聖杯戦争が起こるんだったら、勝つのは私だから。私がそんな理不尽を絶対阻止してみせる」
「いや、凛。そもそも君の召喚するサーヴァントがそのような願望を持って召喚に応じるかもしれない」
「その時は私がマスターとしてそいつときっちり決着をつけるわよ！」

遠坂の当主は薄い胸をはった。少女の二つにくくった髪の毛がぴょこんと揺れた。

「そうか」
「そうよ」

その言葉と共に吐き出された息は、冬の夕暮れの冷気に白い。だが少女の頬は寒さではなく高揚のあまりに朱に染まっていた。本来ならば自らは聖杯戦争にかかわることなく、自分の子孫にそれを託さなければならないはずの少女はこの思いがけない朗報に興奮しているのが見て取れた。
それを見て言峰綺礼はゆっくりといつものような慈愛の笑みを浮

かべた。

「それは頼もしいことだ……ああ、安心した」

墓前にて（後書き）

セイバーアンチってわけじゃないんですが。

【本編かけない。きのこの『未来福音』のせいだといってみる。さすがプロ、頭

本編に関係ないメモ書き上げてみる。
忘れられないように。
せっかくお気に入りが１０００件超えたのに何やっているか私。

【本編かけない。きのこの『未来福音』のせいだといってみる。さすがプロ、頭

その日、神様に出会った。

他人に迷惑をかけずに楽に死ねる方法はないだろうか。

その日、加奈子は朝からそのことばかり考えていた。いや、それは正しくないかもしれない。もう数ヶ月もそのことばかり考えている。

睡眠薬を大量に飲む……どこで？　自宅のアパートは駄目だ。大家さんに迷惑がかかる。公園、山奥、どこだって他人の土地には違いない、かってに押しかけて死体になったら迷惑だろう。

それと同じ理由で線路に飛び込むことも、ビルから飛び降りることも出来ない。自分を引いた電車が止まったことで何人の予定を狂わせるのか、もしかしたらそれで人生が変わってしまう人がいるかもしれないと思うと恐ろしい。ビルから飛び降りた先に誰かが歩いていたらどうすればいい。昔、投身自殺者に体当たりされて死んだ人間がいると聞いたことがある。その時は下にいた人をクッションにしたため自殺しようとした人の方が助かるという本末転倒な事態になったらしい。自分が誰かを殺してしまうなんて、身が震えるほどに怖くなる。

海に飛び込むのも駄目だ。水死体は、それはそれは酷い有様だというではないか。そんなモノの第一発見者になったら、一生のトラウマものだ。加奈子には赤の他人にそのような仕打ちをすることは出来ない。

そんなことを考えると加奈子は死ねない。死んでしまいたいのに、死んでしまった後、自分の死体がどれだけ他人の迷惑になるか考え

ると、そちらの方が恐ろしく感じるのだ。
加奈子は勇気が欲しかった。死ぬ勇気が。あるいは自信が欲しかった。自分はこんなにも不幸で、もう生きていてもどうしようもないのだから死んでいいのだと確信できる自信が。
でもどちらも加奈子にはないので、加奈子は今日も生きている。誰か殺してくれないかなと思うけれど、殺人なんてリスクの高い行為をあえて加奈子のために犯してくれる酔狂な人はどこにもいない。世間にはさらわれて移植用に臓器を取られるということがあるはずだが、あいにくと加奈子の前には表れてはくれない。

だから加奈子は今日も生きている。
“彼”が他の女と結婚してしまったというのに。

彼女の職業はいわゆる風俗嬢というやつなので、動きだすのは必然と午後になる。年明けの真冬の午後は天候次第では三時頃にはすでに薄闇が世界をおおっていて、その日も加奈子が安アパートの玄関にカギをかけた時、街は黄昏の中に沈もうとしていた。
かんかんと甲高い音を立てて安物のハイヒールが鉄製の階段を下りていく。これまた安いレディスーツ姿の疲れた風情の女がうつむいているのは、別に足元を気にしているわけではなく、この女はつまりいつもそんなふうに生きてきたということだけだった。

（仕方がないだろう、彼女を愛してしまったんだ。お前には感謝してはいる。だがそれとこれとは話が別だ、それとも何か、お前は金で俺を買ったつもりだったのか。俺を養ってきたから俺の所有者きどりか、何様のつもりだ）

昨日見た夢はいつもの悪夢だった。貴方のために小さいながらも

正社員だった商社の仕事をやめて風俗嬢になったのだと訴えても、愛しい男は軽蔑を含んだ眼差しで“俺が頼んだわけじゃない”と吐き捨てただけだった。

でも貴方はすまないと私を抱きしめてくれたじゃない、俺のためにといってくれたじゃない。苦学生だった貴方がアルバイトもせずに勉強だけできたのは私のおかげだって。

（お前にはすまないと思っている。でも俺はもうお前を愛していないんだ。俺が愛しているのは彼女なんだ。自分の心に嘘はつけない）

なのにどうして貴方は冷たい瞳でそんなことをいうの。私たちの五年はそんなふうに切り捨てられるものなの。泣いて縋り付いて、それでも“愛”を持ち出されてはなにもなすすべはなかった。もう愛していないから加奈子とは結婚できないといわれてはどうしようもなかった。

もう若くない女と若い女。彼より年上の私と彼より年下の彼女。汚れた女と無垢な女。

風俗で稼いだ金はほとんど男に貢いだ。与えることが愛情の証だと思っていた。だから貯金はないどころか借金がある。それに比べて彼が選んだ娘は彼の勤める病院の院長の姪だ、院長には子供がいないから、つまり彼は逆玉の輿ということになる。女としての格など最初からかなわない戦いだった。

一緒に暮らした五年だけが加奈子の武器だった。それが意味をなさないなら加奈子になす術などなかった。

死んでしまいたいな、と加奈子は思う。優しかったはずの彼の眼差しが自分をゴミでも見ているかのように冷たく見下ろしている。そんな日が来ると思わなかった。思いもしなかった自分が滑稽だっ

た。与えれば男は自分の元にとどまると信じていた自分が哀れだった。
いつか彼の方から“籍を入れよう”といってくれることを疑っていなかった自分。
結局、彼は加奈子の人生から去り、別の場所で幸福な家庭を持ち、加奈子だけが二人で暮らした安アパートで取り残されているのだった。

その日、駅前の仕事場への道をぼんやりとした足取りでたどっていた加奈子の横を一台のタクシーが通り過ぎていき、やがて止まった。そこは線路わきの何もない場所だったものだから当然加奈子は怪訝に思ったが、考える間もなくタクシーの中から長身の女が飛び出してきた。
トラブルかと身構えた加奈子の前で女はしゃがみこみ、その場で口に押し当てた紙袋の中に嘔吐した。歓楽街に働く女だったので、泥酔客などが道端で吐いている風景は見なれたものだったが女の顔色はどちらかというと酔っているというより病人のそれだった。
急病人だろうか、思わずその場にたたらを踏んだ加奈子の前でタクシーから大きなバックを担いだ金髪の少年が降り立ったので、加奈子は再び驚愕した。

最初の女が長身以外は地味な印象を持つ女だったのに対して、次の登場人物は金髪に紅玉の瞳を持つ、信じられないくらいの美貌の少年だった。映画の中にもいないような神々しい美貌がこんな場所にいきなり出現したことは加奈子を混乱させ、このトラブルらしきものから早々に立ち去るという選択を加奈子から奪った。そんな彼女の前で少年は女に駆け寄ると肩にかけていたバックの中からウエットティッシュの箱を取り出した。ぜいぜいと荒い息を吐く女の唾

液で汚れた口を拭いてやりながら彼女の顔を覗き込んでいる。
「大丈夫、綺礼？」
「……この事態の元凶が惨たらしく死んでいくのを見ることが出来たら、きっと少しは楽になると思う」
「はい、おちついて。だから産婦人科でもらった薬飲みなって」
「……つわりは病気ではない。よって薬を飲む必要性を感じない」
「それで一時間に一回は胃液吐いていたら世話ないよ。我慢せずに薬飲んでよ。吐き気を抑えるだけでお腹の子には影響ないって医者がいっていたじゃない」
「……うん」

女はしぶしぶといった感じにうなずいた。少年は満足げにうなずくと、事態を見守っていたタクシーの運転手の元にかけていった。

「あの、運転手さん。ここまでいいです。少し風に当たった方がいいと思うし、駅が近いんでそこでタクシー拾いますから。いえ、おつりは結構です」

少年は物怖じしない態度で高額紙幣をタクシーの運転手に押し付けている。運転手は恐縮した表情でその金を辞退しようとしていたが、少年が苦笑と共に首をかしげて彼を見つめると、やがて操られたように頷いてそのまま車を前進させ加奈子の視界から去っていった。
徐行のスピードで去っていくタクシーをぼんやりと見送っていた加奈子が視線を戻すと、彼女の元に少年が近寄ってくるのが見えた。

「こんにちは、お姉さん。近くにお住いのかたですか？」

流れ出した瞬間の血よりも赤い眼差しが加奈子を射た時、加奈子は何故先ほどの運転手が少年のいいなりになったのかよくわかった。この視線は異常だった。見つめられただけで跪いて何か貴方のためにさせてくださいと懇願したくなるような求心力を秘めている。

僕、彼女を寝かせてやりたいんです、ねえ、どこかここらへんに適当なところはありませんか。そういわれてから加奈子の記憶は曖昧だったが、自分から自宅に彼らを招いたことは確かだった。

「どうもすいません、僕たちすぐにでていきますから。ああ、薬飲みたいんで、ちょっと白湯を作らせてくださいね。水道水そのままより飲みやすいかなって」

にこにこ笑いながら少年は手慣れた仕草で薬缶に水を入れて、ガス台に乗せてしまった。ここは他人の家、などということは少年の行動に何一つ影響を与えることはないらしい。まるで自分の実家のような気やすさだった。

「はあ……」

携帯電話で職場に今日は仕事を休むと報告した加奈子は、今度は押し入れの中から勝手に布団を取り出している少年の姿に曖昧な笑顔を浮かべた。幸いのことに体調が悪いという加奈子の主張はなんの疑惑もなく店側に受け入れられたようだった。そもそも加奈子は風俗嬢には見えないくらい真面目な女なので、仮病を使って休むなどという芸当ができるとは思われていないのだった。

「まったく、ボクのマスターは面倒くさい女だよ。頑固なんだか

ら」

ぶつぶつとよくわからないことをつぶやきながら、少年は中学生にもなっていないであろう外見からは想像もつかない腕力で百七十はある女を軽々とかかえて布団へと寝かせた。

加奈子はそれをぼんやりとみていたが、あることに気付いて少年に声をかけた。

「あの、ええと、彼女は……妊娠しているの？」

さっき、彼女はつわりといってなかったか。

「そうなんです」

ぱあっと少年は無邪気な笑顔を見せた。

「僕の新しい家族がもうすぐ生まれるんです」

それは喜びしかない、誇らしげな笑顔だった。だからそれは鋭い刃となって加奈子を傷つけた。

（今は無理だよ、加奈子。……わかるだろう？　今も僕らには無理だ）

「……あ」

死んでしまいたいのに。私は何故こんなところで一人で。彼も、あの子も誰も側にいないこの世界で。

「お姉さん？　どうしました？」

不思議そうに少年が覗き込んでくる。加奈子はかろうじて吐き気と涙をこらえた。

「いいえ、なんでもないわ」

「……そんなことはないだろう？」

その聞き覚えない声はここにいる最後の人物、力なく寝そべっていた女が発したものだった。

今だ青い顔をしている女が上半身を起き上がらせてこちらを見ていた。

「綺礼、大丈夫？　もうすぐ白湯ができるよ、そしたら薬飲もう」

「いや、薬はやめておこう。それよりも効きそうなモノがここにはありそうなのでな」

「はいはい、わかりました。でも白湯は飲んでね。さっき震えていたから」

「わかった、いただこう」

随分とぶっきらぼうな言葉遣いの女だと加奈子は思った。その薄く笑う顔は整ってはいるが、華やかさとは無縁の地味な印象の女であった。だがその暗い瞳は例えようもなく甘い笑みを浮かべており、それはまるで猫科の獣が獲物を見つけた時の歓喜に似ていたが、加奈子が知るはずもなった。

少年は肩をすくめて台所へ向かった。やがて沸騰したお湯と、お茶の入った湯呑をもって戻ってくる。家主の加奈子としては茶葉を使う許可を与えた覚えなどなかったが、加奈子も含めてその場の誰もそのことに対して関心を持たなかった。

「まずはお礼をいわせてください。休む場所をご提供いただき、ありがとうございました」
「いえ……」
何故提供してしまったのかよくわからないんです、とは深々と頭を下げる相手にはいえない雰囲気だった。空気を読んだ加奈子は曖昧に微笑むことにした。いつものように、嫌なことを飲み込むときのように曖昧に。
そんな加奈子に女はますます笑みを深めた。その笑顔が何故か加奈子は怖かった。小学生の頃、黙って母の財布から小銭を取ったことが一度だけあった。欲しい本があったがそれを買うためには小遣いが足りなかったのだ。くだらない内容の本だったから親に強請ることも出来なくて、数百円ならばれまいと悪魔が耳元でささやいたのだった。しかしそのささやかな窃盗はすぐに母に露見した。ああ、あの時、母が加奈子を叱る前、彼女はこんな顔で笑う母にそこに座れといわなかったか。そんなことを思い出して加奈子は無意識に姿勢を伸ばした。
女に加奈子の思い出などわかるはずもない。だが、目の前の女は加奈子の仕草によろしいと頷いたように感じられた。
さて、では切開をはじめよう。

本格的な夜の街を二十代半ばの女と、金髪の少年が歩いている。
女は大分気分がよくなってきたのか、その足取りは危なげない。
「聞いてみればありきたりな、どこにでもある話だったね。でも

綺礼には面白かった？」
「ああ、なかなか聞きごたえはあった。自分に自信がない地味な女がいて、そんな女に寄生するのが得意な男がいて、干からびるまで吸い取られて、もう得るものがなくなったから捨てられた。よくある話だが、捨てられた本人から聞くと格別なものがあるな」
「自分は中絶させられたのに、他の女は結婚して責任取りたいっていわれるのってどんな感じかなあ」
「素敵だった」
「……いや、綺礼の感想聞きたいんじゃなくて、ああん、もういいよ。機嫌なおったみたいだし。ねえ、ご機嫌ついでになんか食べて帰ろうよ、僕、お腹すいた。綺礼はなんか食べられそう？」
「……うどんくらいなら」
「じゃあ、それで。いい店知っているよ。ここから近いからそこに行こうよ。“僕”は行ったことないんだけどね、味はあっちの『僕』が保証する。“食える味だ”って」
「それは褒め言葉なのか？　……まあ、ではそこで軽く食べていくことにしよう」

おかしな二人組が立ち去ってから、加奈子の生活の何が変わったわけではない。
初対面の相手に自分の内心の苦しみをぶちまけてしまった恥ずかしさでしばらくの間もだえ苦しんだが、おそらくは二度と出会うことのない相手であると思い直した。だからこそ加奈子は誰にもいえなかった苦しみを、願望を打ち明けてしまったのだろう。
金髪の少年はお礼代りだと数枚の宝くじを置いていった。死んでしまいたいのだと咽び泣く加奈子の頭を優しくなでて、この宝くじ

が当たっているか外れているか、それを確かめるまで生きているのはどうかといった。
加奈子はいわれた通りにすることにした。宝くじの一等賞は六億円の賞金がもらえる。その使い道を考えると少しだけ加奈子は嬉しい。まずは借金を返す、それからこの安アパートからでて新しい場所へ行く。借金がなくなったら田舎の母親に三年ぶりに連絡ができるかもしれない。迷惑をかけたくなくて、道を誤った自分を見せたくなくて、背を向けてしまったただ一人の家族に。

寂しさがこたえる夜は、加奈子は夢の詰まった紙切れを抱いて眠った。
かなうはずがない夢には違いないが、夢を見られるだけで加奈子は幸せだった。終わってしまった事を思い出して、その時の苦しみや悲しみを追体験する、ただそれだけのことを繰り返しているこれまでよりも。

宝くじの当選発表の日、加奈子の夢は終わった。それは“夢”と呼ぶものではなくなってしまった。
風俗店の客の一人に強請った新聞の切り抜きと自分の手の中にある宝くじの番号を三十回は見比べてから、こわばった顔で加奈子は電話の受話器を取った。
何年もかけていない実家への電話番号は、しかし一度も間違えることはなかった。

不思議な雰囲気の二人だった。
神様だったのだと、加奈子は今も信じている。

【本編かけない。きのこの『未来福音』のせいだといってみる。さすがプロ、頭

時期としては兄上がやってくる少し前ぐらい。
こんなことがありました。

つまりギルガメッシュはカリスマ呪いレベルで黄金律垂れ流しだっ
てこと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2310q/

お母さんは黒幕 お父さんは英霊

2011年12月5日23時49分発行